日本人の性格

精神分析

★第8卷・第7號★昭和15年・7月★

東京精神分析學研究所出版部

日本科學史上の天才史家新井白石（六九頁參照）

日本人の性格號・內容目次

『精神分析』第八巻・第七號

岩倉具榮譯

理想の家族（マンスフィールド短篇集）

（定價一圓八十錢 送料共）

徳富蘇峰先生の批評

若し才媛の二字が、尤も適當なる意味にて當篏まるものを求めば、マンスフィールド女史（Katherine Mansfield）の如き、正に其の一人であらう。彼女は實に才の美なるばかりでなく、亦た女性らしき女性であつた。

今ま岩倉具榮君——岩倉具視公の曾孫、現公爵——の飜譯したる本書を一讀すれば、必ずしも我等の理想通りの出來榮えとは云はぬが、我邦文壇の水準から見れば、先づ其の好成績を嘉す可き一と云ふ遲疑しない。聊か生硬の嫌ひはあるが忠實であり、且つ忠實ならんことを勗めたる點は、十分に受取らるゝものがある。

特に面白きは、附錄第一の「カェザリン・マンスフィールドの生涯」である。此れは彼女の夫ミドルトン・マリー（J. Middleton Murry）の作にして、流石に能く彼女の眞相を描いてゐる。

本書附錄の二は「作品分析鑑賞案內」と題して、各短篇の各個に就てそれぞれ解題を作してゐる。それが何れも寥々たる文句ではあるが、能く作者の旨趣の存する所を闡明してゐる。而して中には餘りに穿ち過ぎはしないかとの心配がある程である（昭和十年十二月廿八日、東京日々新聞、及び大阪毎日新聞所載）

ヒッチマン・ベルグラー原著

大槻憲二譯

（菊版・莊重な學術書 一圓八十錢・送料十錢）

冷感症とその治療

婦人の不感症は文明の進歩と共に加速度的に增加しつゝあると云はれてゐる。現代婦人の大部分が既に冷感症化しつゝあるとは世の多くの婦人科醫たちの戰慄すべき報告である。これをこのまゝに放置することは彼女等の不幸であるばかりでなく、世の夫たちの苦惱であると共に、社會秩序の紊亂を來す一大遠因となる。而もその病因は肉體にあらず精神にある。精神分析の研究に依つて始めてこの病症の本質と治療法とは闡明せられた。出版一ヶ月を出ずして忽ち重版を見た！

東京精神分析學研究所

本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番

The National Characters of the Japanese People

(Summary of the Commenci g Article)

Kenji Ohtski, Tokio

The racial characters of the orientals are "id"ic and feminine as compared with those of the occidentals, which are egoic and masculine. So, at least, we concluded when we studied the oriental characters in the 1st number in this year of our journal. Among the orientals, we the Japanese are relatively strong in ego and not so regression-wishing as the Chinese, if I be right. But the death-instinct of the Japanese is yet crudely aggressive, and not very much sublimated into intellectual ability. The fact can be explained in various ways, and one the ways is to do as the natural effect of the peculiar family-system of the Japanese nation.

The Japanese constitution is very unique in the world, and the Japanese people is sometimes very proud of it, and the foreign people entertain often, it seems, an unreasonable phobia against it. But it is of no need, I believe, because it suffers its own handicap——the Emperor as the symbol of the national super-ego ever solemnly refrain the national ego or id from their licentious motivations.

The national family system of the Japanese can be analysed from the biological point of view, as the immortal bioplasma protected around and around by ever newly arising mortal soma. Soma is mortal, and consequently has not its own raison d'etre in itself, so it can never be fortified as each independent individual. Strong point as well as weak point of the Japanese peaple consist, I dare say, in the fact.

One of the characteristic marks of the Japanese peaple is said be their simplicity or naiveness. It may have been originated by various causes; but as long as the national family system as it is now seen continues, this national mark shall be also ever retained——to the happiness or unhappiness of Japan and the world, no one knows whether!

日本人の性格的缺陷とその原因

大槻憲二

一、民族的性格とその研究方法

民族の性格と云ふものは、確にあるらしく思はれるが、その認識は如何にして可能であるか。個人性格でも確かにあるらしく考へられるが、これを科學的に研究することはなかなか容易ではない。抑々性格學と云ふ如きものさへまだ極めて不滿足な狀態にある。これを哲學的に把握しようと思へば抽象的で實際的意義に乏しいものとなるし、これを科學的に把握しようとすると淺薄で常識的なものとなつてしまふ。一體、個人の性格とは如何なるものであらうかと、オハイオ州大學の敎授ングクリシュ氏の『心理學辭典』を參照して見ると、次の如く解說してある。

「(一) 性格とは、個人又は集團が何らかの標識に依つて他と異ると知られ得べきその標識 (mark) を云ふ。その區別的標識は正しくは性格 (character) でなく、特質 (characteristic) と云ふ術語を用ふべきであるが、兩者は混用せられる傾向がある。(二) 或る個人の心理的又は行動的の一切の特徵 (traits) の集合的名辭である。卽ち第一の意味に於ける心理的諸性格の總和である。(三) 或る個人が諸々な特徵や行動的傾向に依つて種々な障碍を乘り超えて道德上又は習俗上比較的終始一貫して反應し得る、そのやうな特徵や傾向の全的組織を云ふ。」

卽ち、イングリシュ氏は性格の意義に三つの別を擧げ、第一を標識、第二は第一の標識の總和、第三は行動上の終始一貫性としてゐる。このやうな區別は槪念的には非常に判然してゐるやうであるが、實際問題としてはあまり判然せぬのである。現に、標識 (マーク) と云ふ槪念の中には「皮膚の色、身長、その他種々の外的に目に見える器關」の標識のみならず、「心理的諸性格」も這入るらしく思はれるからである。もしこのやうに分つならば、寧ろ簡單明瞭に、(一) 身體的特徵、(二) 心理

的特徴、(三)道德的特徴、とするのがよいかと思ふ。併し、それでは心理的特徴と道德的特徴との區別如何、道德は心理でないかと云ふやうな反問も出て來ることであらう。尤な質問である。その時、我々は、心理的特徴とは自我に即して本人の性格を研究するを云ひ、道德的とは超自我に即して彼の性格を研究するものであると答へることが出來るであらう。

それ故に、我々としては、寧ろ性格の概念內容を二種に分ち、(一)はその身體的特徴、(二)は彼の心理的行動の法則であるとし、從つて性格研究とはその身體的特徴を記述すると共に、他方に於いてはその心理的行動の法則を發見することであると云ふことが出來るであらう。併しながら、心身はもと二元のものではないと我々は考へる故、身體的特徴と心理的法則とは窮極に於いて相關せしめられなければならないのである。で、現代の性格學も身體的特徴の記述の面から性格を研究せんとするものと、直ちに心理的法則の探究に向ふものとの二つの種類が存すると云ふことは偶然でないやうに思はれる。クレチュメルの性格學の如きは前者に屬し、精神分析性格學の如きは後者に屬するものであらう。

二、日本人の性格的特徴

以上、性格及び性格研究方法に就いて大觀して來たが、それは主として個人の性格及びその研究方法に就いてゞあつて、民族又は集團の性格及びその研究方法に就いてゞはなかつた。民族又は集團の性格研究方法は個人の場合と異らないわけに行かない。身體的特徴記述の方面は比較的容易であるが、心理的行動法則の發見は個人の場合よりも複雜であるだけに困難である。その方法は歷史的方法と地方色的方法とが區別せられるであらうと共に、他方にまた實生活方面に就いての研究法と共に精神生活方面に就いての研究もあり得るであらう。更にまた、歷史的方法も實生活方面からの研究と精神生活的方面からの研究とがあり得るであらう。

このやうに、その方法は多岐であるから、種々な方法の綜合によつて結論を歸納し來ると云ふ方法をとるより外はないが、併しその歸納の前提としての材料蒐集方針の中に既に演繹がないとは云へないのである。例へば、我々は假りに複雜な觀念的材料よりも單純な實生活的材料に依つて日本民族性を歸納的に結論して見ようと云ふ極めて科學的な方法を擇ぶとして、次のやうな諸々の日本的な物質を擧げるとするが、その「日本的」として擧げられた物品の選擇方針の中に、既に日本的性格なるものを多少とも豫想してゐないとは云へないのである。併しそれでも仕方がない。あまり嚴密なことを云つてゐたら手も足も出ない。結論を導き出してからそれを事實に照して科學的に再吟味すると云ふ方法をとつても遲くはあるまい。で、とりあへ

すこゝに、少くとも日本人にのみ特有であつて、他民族には見られないと云ふ物品を列擧して見て、その中から日本人の性格を抽出し來ると云ふ方法をとつて見よう。左に擧げた品目は、本年四月度の本研究所研究會の席上で、會員一同が擧げたものゝ中から私が適宜に取捨選擇したのである。

一、日の丸國旗――これは何日、誰が定めたか正確なことは私は知らないが、「白地に赤く日の丸染めて」誠に單純美を極度に發揮したもので、「日出づる國」の象徴としてこれにまさるものない。これに對する鑑賞や批評は別問題として、日本人の總てにこれほど愛敬信頼せられてゐるところを見ると、日の丸の國旗は日本人の性格を端的に具現してゐるものと認めて差支へあるまい。

二、風呂敷――大きいものでも小さいものでも、角いものでも圓いものでも、適宜な大きさのものなら何でも包むことが出來、且つ無用の時には小さく折疊んで懐中に片付けておくことも出來て、如何にも便利で、融通が利いて、簡單で、手輕で、而もいろ／＼な紋樣や色彩を施すことが出來て裝飾にもなる。これをカバンやケース等のギゴチないのに比すると如何にも輕妙で要領のいゝことは驚くべきであるが、併しカバンやケースは一定のものを一定の目的のために保護したり、保管したりしておく目的のためには風呂敷等の遠く及ばない長所があることは何人も直ちに認めないわけには行かない。書物を風呂敷に包んで持歩くことは輕便ではあるが、中の書物が歪んだり皺になつたりする心配がないではないが、鞄やケースにはそんな心配は殆どない。

三、手拭――手拭一本でタオルにもなればハンカチにもなり、鉢卷にもなれば頸卷にもなる。頗る便利であることに於いては風呂敷と同じであるが、併しタオルとしての役目に於いてはあれほど水をよく吸はないから、やはりタオルには及ばず、ハンカチ代用には少し體裁が悪い。手拭とタオルとの比較はそのまゝ風呂敷と鞄との比較にあてはまるやうに思はれる。

四、きもの――着物と洋服との長短も風呂敷と鞄やケースの比較とに於けるその長短を殆ど同じくしてゐる。着物ならば少々肥つた人でも痩せた人でも丈高い人でも脊の低い人でも、少し細工して直ぐに融通が利くが、洋服はどうもさう云ふわけに行かない。同じ人でも少し太つたり痩せたりしたらもう全部仕立直さなければ着られなくなるし、またその仕立直しと云ふことが殆ど不可能か、或は恐ろしく厄介であつて、極めて不便であるが、その代り身に付いた洋服はかり、着て（大部分の日本人は窮窟と云ふが）着心地のよいものはない。殊にどてらと云ふものは日本きものゝ長短兩所を戯畫化的に誇張したもので、その寛宏の反面にだらしなさの加減は相當徹底してゐる。どてらを着て握り睾丸してゐる有樣は恐るべき怠惰なる日本的特殊

風景である。

また布地にしても、日本服の布地はペラ〳〵してゐていたみ易く、よごれ易く、ぞろ〳〵してゐて優美ではあるが活動に不便である。ところが洋服の方は身體の恰好にそのまゝ適合してゐて、如何にも勞働服の成上りらしく、便利で輕快であるが殺風景である。併し毛織物は絹織物などと違つて、雨にも埃にも汚れにも堪えることが出來て、如何にも頑健で實質的である。

五、下駄——下駄の音と云ふものは、西洋人には如何にも特異な印象を與へるらしく、大抵の西洋人はまづその音に驚異の眼を瞠るやうである。その驚異は輕蔑の驚異にもせよ、或は讃嘆の驚異にもせよ……。下駄で石疊やアスファルトの上を歩く音は、殊に雜閙の巷、停車場のプラットフォームなどでは、如何にも殺風景であるが、併し地面の上を舞妓や小娘の穿くボックリで歩く音は一種の含み音で優美可憐、如何にも日本的である。恐らく馬蹄鐵の音から思ひついたものでないかと察せられる。西洋にも木靴と云ふものはあるが、日本の下駄とは凡そ趣きを異にするもので、靴はあくまでも戸外を本位にしてゐるが下駄は戸内生活を戸外に延長することをその本旨とするものゝ如くである。表付きの下駄なるものはその本旨を最も端的に表明するもので、その疊表は座敷の疊の延長に外ならぬであらう。

六、ふんどし——褌は一名また下帶とも云つて、直接身につける帶であつて、一種の締めくゝりを與へるための道具であつて、猿股やヅロースのやうに、單に局部を隱すものではない。漢字で「褌」の字を書くことになつてゐるが、これは日本製の漢字ではなく純粹の漢字であるが、衣偏に軍とは面白い構成文字ではないか。卽ち「緊褌一番」など云ふやうに、戰ひの精神的用意のための道具として意味が强いのである。かつて（昭和十五年四月二日）荻原井泉水氏は東京日々紙上にふんどしに就いて極めて機智に富んだ隨筆を物してゐた。その文章はこれまたやはり純粹に日本的なものと思はれる俳句と比較しての考慮であつたから、念のために左記に引用させて貰ふ。

ちかごろ、俳句を作り嗜む人が大さう衆いやうである。だが、其氣持はさま〴〵であらう。或人は、俳句を帽子にしてゐる。自分の風流氣を殊更眼につくやうに、頭へ載せて歩くのだ。或人は、俳句をネクタイにしてゐる。會社員諸君なぞには是が多い。多少の伊達ごころと流行を氣にしたりもする。或人は、俳句を袴にしてゐる。懇親會食の時だけ、お座なりに作るのだ。或人は、紋附にしてゐる。祝弔送迎の前書用作り方の本さへある。或人は、丹前にしてゐる。溫泉旅行でもした時には作るのだ。或人は、ゆかたにしてゐる。これは家庭的の樂しみであらう。或人は、首卷にしてゐる。老人には身に附いたやうな物だ。或人はステッキにしてゐる。ハイキングの友とするのだ。

私は、俳句をふんどしにしてゐる。また、他に俳句をすすめる時は、この意味ですすめる。俳句は交際の道具ではない。誰もが自分獨り

のものとして居るがいい。春夏秋冬のうつりかへを氣にする要はないが、春夏秋冬一日も缺くべからざるものだ、新風時流を趁うて移る要はないが、自分として用ひて古臭くなること最も警むべしである。

俳句がふんどしであるとしたならば、一定の型のある猿又式を用ふるか、結び方の自由な六尺式を用ふるか、即ち「定型俳句」か「自由律俳句」か――といふ事は、各人の好みに據る。尤も私は、學生時代には猿又を使つたが、其後三十餘年來、六尺式を愛用してゐる。それから、キリリと締める氣持が是でなくては、我慢出來ない。俳句の表現の氣持も、結局、キリリと締めた味にあるのではないか、と思ふ。西洋人に俳句が解るか解らぬかといふ事も、この氣持にありはしないかとも思ふ。

昔、坪井正五郎博士から聞いた事に、日本民族の祖源が何れの方面に居住してゐたかといふ研究は、體容、骨格、言語、風俗等の諸方面から檢討すべきだが、日本流のふんどしを締める風俗は、世界に餘りに類例が無く、たゞ馬來半島の土民と共通してゐるといふ事實も重要な資料として考へたい、といふ談を、今も覺えてゐる。

私は、ホノルルの市有博物館でカナカ土人の風俗模型人形を見てふんどしの形とその締め方の殆ど同じなのに驚いたのである。尤も、ふんどし（ふどし）といふ言葉の源が「踏み通し」だとすれば、上代のふんどしは猿又式だつたと推せられるが、「ふもだし」を語源とする說もある事だから、言葉のみによつても論定せられない。とにかく、六尺式の愛好は德川時代に至つて、町人氣質の「ふんどし一貫」の生活態度と結びつき、一種の日本的心境を現はす覺悟の象徵にまでなつたやうである。

その他、墨尺、日本刀、日本酒、醬油、扇、障子、握りめし、などが擧げられ、またそのやうな物品でなく、風俗、習慣文化的なものとしては、家族主義、角力、切腹、茶道、俳句、假名文字、校倉造り、白木の神殿造り、鳥居などが擧げられた。これ等の內には、勿論、外國に淵源するものもあるが、日本に入つて以來完全に日本化してゐることは勿論であるから、日本的なものとして擧げることに少しも差支へはないと思ふ。また環境的なものとしては富士山、櫻、地震などは誰しも氣付くものであるが、やはり日本人の性格の中に重大な影響を及ぼしてゐることを看過するわけには行かない。

以上、擧げて來た種々の實證から抽象し得るものは、日本的性格の單純、素朴、平明、率直、輕快、銳敏、などの諸々の標徵である。これ等の形容詞はもし、これ等を長所と見てゐることを意味すると云ふならば、同じ標徵を形容するに、簡單、粗末、低調、淺薄、輕佻、末梢的などを以てするならば、卽ちその短所を擧げたことになるであらう。

三、日本人の性格的行動法則

以上を以て日本人の性格の標徵であると云ふことが出來るならば、次に日本人の行動の法則は如何と云ふことが問題になつ

て來る。性格の標徵は種々な日本的物品の共通特質の中から抽象し來ることは出來るが、行動的法則の方はさう云ふわけに行かない。日本文化史や、風俗習慣、大小種々な個人の行動などを研究し分析してその結果から、統計的に法則を抽出し來ると云ふ方法を擇ばなければならない。併しさう云ふ方法をとるとすれば、論文は必然的に一卷の著書の形式をとらなければならないやうになつて來る。雜誌掲載の論文としては、多少直觀的になつても仕方がないから先に結論を擧げておいてそれを實例に就いて證明して行くと云ふ方法をとるより外はない。で、私は科學的な觀察態度で直觀し得た日本人の行動法則としての性格を、次の五要素に分けておいて、各々に就いて多少の解說なり、證明なりを附加することにして見たい。それが如何に成功するか否かは只今私の豫言し得るところでないが、私としては嚴正な科學的心理態度を失はないやうにと云ふ覺悟を主にしてゐることを敢て證言しておきたい。

（一） 幼兒的にして個性の確立疑はしきこと――

日本人が一般に云つて幼兒的であつて個性の確立が軟弱であると云ふことは、本誌本年一月號上に『日本人の弱點と家族主義の功罪』と題する論文の中で評論しておいたから、こゝにはその論旨を繰返す必要はないが、こゝでは日本民族性のそのやうな缺陷と日本人のあらゆる隈々に行亙つてゐる官僚主義との關係を考へ、そこからこの民族的缺陷が由來してゐる所以を論證し、將來ある日本民族のために相互に大いに戒め合ひたいと思ふ。

日本人は屢々日本の國體が世界無比なものであることを誇らかに宣揚する。それは確に世界無比なものであり、誇つていゝものではある。何處の世界に日本のやうに、一國一民族を擧げて家族關係にあるやうな國柄があるであらうか。併し家族關係であると云ふことは、一家の中では主人と長男とがその實際能力の故でなくたゞその位置の故に重要視せられ、他は比較的冷遇せられ、又は犧牲を强要せられると云ふことである。卽ち生殖細胞を歷史的に時代的にリレーすることに人生の全的意義をかけ、文化の發展や個人存在の深い意義や幸福と云ふ如きことは、二次的に扱はれると云ふ傾向を生ずることは理の當然である。從つて、文化發展や個性確立に於いて遲れをとり勝ちになることも理の當然である。然るに、外國人から見れば、發展せる文化、確立せる個性の意義と云ふ如きものゝみが價値を有するのであつて、爾々の國が家族關係であらうがなからうが、一族が何代續いてゐようがゐまいが、そんなことは殆ど興味のないことであるのは、これまた當然であつて怪むに足りない。我々は支那の古典を讀んで見ると、大古には一萬八千歲の長壽を保つたと云ふやうな古聖賢の話が出て來る。勿論、荒唐無稽な話であるが、假りにもし事實としてそれを我々が尊敬するかと云ふに、見せもの的興味は持つが尊敬すると云ふ氣にはならな

い。併し支那の太古の聖人がそのやうに長壽を保つたと傳說せられてゐるのは、その傳說の心理的根據を分析して見るならば、つまりさう云ふ長壽への願望があると云ふことであり、このやうな願望はその人の自己保存、種族保存の本能から生じ來るものであることは論ずるまでもない。して見れば、支那太古の人が、そのやうな長壽な人の存在を空想し願望したと云ふことは、つまり一個人の事ではなく、一萬八千歲の長きに亙つて子孫が絕えないと云ふことを願望し賞讃してゐるのだと分析解釋して差支へないのであらう。して見れば支那人がそのやうに昔から顯望し賞讃して來たことがわが國に於いて殆ど實際に行はれてゐるのであつて、たとへ一萬八千歲ではないまでも二千年以上の長壽を保てる家族を有し、それを本家として一國一民族が親戚關係を有すると云ふことは稀有なることであり、誇るべきことであらう。併しその誇りはたゞ當事者にのみ妥當することであり、他家のものから見れば、羨ましいことかも知れないが、特に尊敬すべきことゝは考へられなくても已むを得ないであらう。たゞその家族の中から代々優秀な個人を輩出し、それが世界文化に貢獻する限りに於いてのみ、人々はその家族を尊敬するやうになるであらう。

たゞ家族主義の缺陷は、人間の價値をその位置に依つて評定し、その能力に依つて必ずしも評定せぬと云ふところにあると思ふ。勿論、實際問題としては、能力は位置よりも重視せられる場合が多いけれども、それは寧ろ現實原則の威力が本能的願望の勢力を克服するものであつて、もしそれさへなければ、或は現實原則と願望空想の勢力とが合致するならば、その結果はいゝ意味に於いても惡い意味に於いても恐るべきことゝなるのである。で、價値が位置に依つて決定せられるとすれば、なるべく中心に近い位置を占めようとすることに各人の生活的努力の核心がおかれるやうになることは當然であつて、日本人の幼兒性と官僚主義の心理的淵源は實にそこに存すると私は思ふのである。何となれば、家長や族長は父親コムプレクスの對象であり、家族と民衆は「家の子郞黨」卽ち幼兒としての自覺と根性とコムプレクスとを永久に保留するものだからである。さうして官僚は家族國家の中心に近く位置するものと信ぜられてゐるが故に、それ自身幼兒的でありながら、民衆からは父親コムプレクスを寄せられていゝ氣になり易いからである。

然るに文化と云ふものは實際生活の中から生れ出るものであつて、位置や制度や組織の中から生れ出るものではないのだ。何らかの制度や組織が不必要であると云つてゐるのではないが、民衆の生活から游離した、單なる組織や制度から學問や藝術が生れると思つたら大きな間違ひである。然るに日本では、位置と組織と制度とさへあればそれで學問や藝術が發生し存在すると人々は思ひ込み、實際に民衆生活の中から生れ出た學問や藝術はこれを輕視し默殺する傾きがある。それは日本人の個性

の確立が遲延し、軟弱であるためにも由るのであらうが、また個性が軟弱であり幼兒的であるためにも亦、そのやうに位置や組織や制度を尊重して實力や實質を看過するやうになるのである。日本の官學がその組織を得てから今日まで、その業績は果して私學又は民間學のそれに比して如何であらうか。その實績よりもその位置に依つて遙かに大寫しにせられてゐる。それ故に私學もまた漸次に官學的擬態をとることに依り、その位置上の利益にあづからうとして、眞に學問的純粹性を失ふやうになり行くのは當然である。

學藝ばかりではない。政治に於いてもその通りである。例へば、最近代のファシズム又はファシズム的な運動に於いて、獨伊のそれと日本のそれとを比較する時、思ひ半ばに過ぐるものがある。獨伊のそれは完全に民衆運動であるが、日本のそれは純粹に官僚運動である。民衆運動から萠え出たものは土地に根を下した巨木の如く、官僚運動から發生したものはひねこびた盆栽の如きものである。元來、民衆的であるべき筈の政黨が民衆的であつては民衆の信賴を博し得ないと云ふ自家撞着に直面するので、漸次に官僚化しつゝあつたと思はれる。それならば、始めから官僚であるところのものゝ方が遙に政治にも適してゐると云ふ論理になつて來るのである。その結果は御覽のやうに民衆の意志を遊離した動きとなり、その生活を不安のどん底に陷れる如き有樣となつて來てゐるが、而もその當事者たちは一切を中心最高部の位置の威德に由ると謙遜することに依つて、實はその責任をそこに嫁すると云ふ罪過を無意識の內に冒險しつゝある。これ官僚主義の美德にして同時に惡德である。とは云へ、私はかく論ずることにより必ずしも一部官僚の徒を批難しつゝあるのではないのだ。かくの如き傳統、風習、政體、國是の中からは必然的にこのやうな缺陷や難局が生じ來るものであることを國民は十分に自覺し、これに對しては果して如何にすればこれを回避することが出來るかと云ふことは、私の方から民衆及び官僚、即ち國民全體に向つて質問したいと思つて云ふに過ぎないのである。

(二) 劣等感とその補償的優越感——

劣等感とは幼兒的優越感の崩壞して未だ成人的優越感がその跡に再建せられざる狀態を云ふとは我等の常に說くところであるが、もし前項に論じたやうに、日本人に幼兒性が根強く殘つてゐるとすれば、日本人に劣等感が強いと云ふことは極めて自然である。何となれば、自國內に於いて個性(人間としての實質)の確立にその存在の意義を求めようとせず、たゞ位置の獲得に最大の意義を求めるやうなものが、個性としての存立に意義を確立してゐる人間の前に出たならば、その人格的な威力に堪え得ず、幼兒性を呈露するやうになること已むを得ないからである。私は日本人が西洋人に對して劣等感を持ち、幼兒性を

發露すると云ふやうなことは考へたくなかつたのだ。そんなことは思ふだに不快なことだからだ。併し防諜思想普及會編『躍るスパイと軍機の祕密』と云ふ冊子を讀むに及び、日本人にさう云ふ弱點多く、そのために種々外國人に利用せられ、軍機の祕密が保たれ難いと云ふ事實を知つて、已むなく日本人の幼兒性と劣等感とを承認しないわけに行かなくなつたのだ。

劣等感は幼兒的獨尊觀念（ナルチスムス）が崩壞して未だ成人的自尊心が確立しない狀態であると私は右に說いたが、併し實際に於いてその劣等感を持つてゐる人々は、幼兒ではなくて成人であるのだから、幼兒時代の劣等感とはその內容を異にしてゐる。その劣等感は幼兒期的なものを中核としてその周圍に現前の劣等の事實の認識が附加せられてあるのであらう。「現實の劣等の事實の認識」と云つたが、併し私は別に日本人が劣等であると云つてゐるのではないのだから、その點について早まつた誤認をしないやうにして頂きたい。さりとて非常に優秀であると云はうとしてゐるのでもないのだ。實は優秀な點も多いが、劣等な點も同樣に多いと認識してゐるのだ。外國人に就いてもやはり同樣に考へてゐるのだ。何處の國民をとつて見ても、優秀な點を發見することの容易なやうに劣等點を發見して來ることも難くはない。たゞ一つの國民と他の國民とを比較して一方が他方に劣ると云ふやうな結論を簡單に下すことが出來ないし、またさう云ふ簡單な結論を輕卒に下す人の病的心理を愍むのである。私は日本人の大部分がさう云ふ病的心理を持合せ、簡單に結論を下して自己を無意識の內に劣等視し、その不快感を自分にまぎらせるために、何かの大事件が起きると、反動的に、今迄の劣等感を裏返して、誇大な優越感を持つやうになる、その幼兒性を憂慮するのである。

このやうな病的な幼兒的劣等感を克服するには、劣等點を劣等點として負け惜みなく卒直に承認すること、優越點を優越點として公平に自惚なく評價すること。他國民の性格に就いても、その長所と功績とは公平に寬大に承認し、その罪過と缺陷とは峻嚴に批判することがまづ第一の道であると私は信じてゐる。然るに日本人は幼兒的で劣等感が强いから、何か一つ長所を見せられると、菊面も笑凹に見えて何もかも結構づくめのやうに考へ出すのである。今までは拜英主義であつたが、今度はもしドイツが戰勝すれば、たゞ戰勝したと云ふだけで拜獨主義になるのではないかと思ひ、私はその日の來ることを今から憂へてゐる。戰爭に强いと云ふことは一つの長所ではあるが、それだけで民族性格の一切の價値が判定せられるのではない。日本人は今からドイツに對する批判的態度を確立するやうに準備してゐなければならないと思ふが、その準備は單に意識的にしても何の役にも立たない。無意識面への工作がなされてゐなければ、何時その方面からの裏切があるか分らないのである。

自他の長短兩所をあるがまゝに認識してその評價觀念に無意識的病理性が纒綿さへしてゐなければ、どんな優越な國民の前

に出ても劣等感を起すことはないのである。それは我々が一個人として病的劣等感さへなければ、如何に貴人や高官の前へ出ても少しも臆することはなく、人格としては對等に交渉出來るのと同じである。病的劣等感があると自分より身分卑しく知能劣つてゐる者の前へ出ても恐怖を感ずるやうになるものである。

（三） 單純で極端に流れ易いこと――

日本人が幼兒的で劣等感が根強いとすれば、從つてまた單純で一本調子で、時に極端に走り、他人から利用せられ易い傾きもあると云ふことは、一應承認しなければならない點であらうと思ふ。それは日本人が一般に非常に神經質で、あまり物事を鋭敏に感じ過ぎるせいにもよるのであらうが、何かの刺戟を受けると馬車馬のやうに驅け出し、惰性でどこまでも一本調子に走り續け、次にまた他の刺戟を受けると、今度は前と正反對の方に向つて一本調子に走り續け、前の事はケロリと忘れたかのやうな觀があつて、前後の脈絡や統一がとれないと云ふ傾きがある。最近の思想界の動きから云ふと、マルクシズム運動からファシズムに移つて行つた經緯がその特徴を最も端的に示してゐる。一時は雜誌と云ふ雜誌、文化と云ふ文化はマルクシズム一色に塗りつぶされた觀（勿論外觀だけであるが）があつたが、その後、ファシズムが擡頭すると、前のマルクシズムはケロリと忘れてしまつて、その間に辨證法的發展を期すると云ふやうなことは、口先では唱へるものがあつても、實際に於いても誰も實行はせぬのである。ところが、西洋のファシズムは實際はマルクシズムから發展して外觀だけ正反對らしい樣相をとるやうになつたものだと云ふことなどは殆ど誰も知らない。それ故に、獨ソ協定によつて共產主義とファシズムとが提携したとなると、すつかり面喰つてしまつて「複雜怪奇」と恐れ入つて手も足も出なくなると云ふ有樣である。況んやヒトラーこそは共產主義の實行者であるなどと云ふことは夢にも氣がついてゐないのである。

だから日本文化史には西洋の文化史に於いて見られるやうな辨證法的發展と云ふものは殆ど見られない。たゞ外部からの刺戟があると馬車馬のやうに眞向に驅け出すが、その刺戟がなくなるとダラケてしまつて、感覺的享樂に耽溺するやうになるのである。例へば、鎖國時代に於ける浮世繪の發達の如きものである。浮世繪は立派な感覺派の藝術ではあるが、併し何と云つても調子は高くなく、規模も小さくやはり下手物の內に屬すると云ふことは否定出來ない。そこらの點を考へると、日本民族はあまり優秀な民族でないやうに思へて來て、時に悲觀することもあるのである。

（四） 攻擊慾が生硬で知的昇華力不十分なこと――

そのやうに、日本人は感覺は鋭敏で神經は細やかであるが、死の本能に基く攻擊慾が比較的生硬で、從つて戰爭に破壞的の

役割を果す時には非常に適してゐるやうに思はれることもあるが、併し攻撃慾を昇華させて人格的威力や知的活動能力たらしめることにはまだ十分に達してゐないやうに思はれる。人格的威力や知的活動力が攻撃慾の昇華したものであることは、讀者諸氏にまで特に解說を必要とせぬであらう。然るに攻撃慾は死の本能に基くものであるが故に、死の本能や攻撃慾を生來のまゝで實現することを要求せられてゐるもの、又は實施する習慣を傳統してゐる國民は、人格の威力や知的活動に於いて缺けるところがあるやうになることは必然である。

私はかつて拙著『現代日本の社會分析』の中で「わが國民性」を論じ、第一に日本人の超自我が國家的ではあるが、人類的ではないと云ふ點を擧げ、第二に日本人の憎惡本能が露骨すぎると云ふ西洋人の批評を紹介し、第三に死を禮讚する性癖を自戒し、第四に日本人にもある戰爭神經症の實例を擧げておいた。併しそれ等が日本の國民的家族主義と何らかの關係があらうと云ふ點には當時に於いてまだ氣がつかなかつた。私は必ずしもその關係からばかりこれ等の國民性を說明し得ると主張するものではないが、併しその關係を無視することは出來ないと信じてゐる。已むを得ない場合に潔く死するのは立派であるが、死を禮讚したり犬死したりすることは病的である。さうして日本人にはとかくそれ等の病的な審美主義が道德の假面を被つて橫行してゐると云ふことを承認することは出來ないであらうか。不惜身命の境地から惜身命の境地に入つて、初めて眞に大國民的性格を確立したことになるのである。興亞奉公と云ふと「一日戰死」と云ふ觀念が直ぐに浮んで來るやうでは死の本能的であることは何人も承認しないわけに行くまい。せめて「一日激戰」と云ふ觀念でも浮んで來るくらゐ生の本能的にならなければ……。

(五)　被暗示性に富み、模倣的、女性的なこと――

私はさきに日本人が外國からの刺戟を受けると馬車馬のやうに一本調子に驅け出すが、それがなくなると感覺的享樂にのみ沈淪するやうになり勝ちであると云つたが、それはつまり知的昇華能力に乏しいと云ふことでもあると共に、また被暗示性に富み、模倣的女性的であると云ふことにもなるのである。今次のドイツの英佛への電撃戰に於ける新兵器の出現を見て、日本の官僚的當局は急に慌てゝ官民學徒を糾合して新武器の對策や考案に取掛つたと云ふ報道を見て、民衆たちはその信賴せる當局がこのやうに不用意なのかと却つて不安に思ひはせぬかと、寧ろその事を私は不安に思つた。ノモンハンの刺戟がなければ日本の武人は科學を輕蔑し機械を無用視し、たゞ竹槍と精神とだけでモスコーまで突進しようなどゝ云ふことを眞面目に主張したりするやうになるのだ。それはつまり、攻撃慾だけはなまであるが、知力にまで昇華させることに頗る不得意であるから何とかしてその昇華的努力を回避しようとの本能願望のあることを證明してゐるのであらう。

このやうに日本人が被暗示性に富み、模倣的で、興奮し易く、醒め易く、卽ち一言で云へば女性的であると云ふことは、日本人の性格的根本特質であると共に、それはまた或る意味に於いて支那人とも共通する特質であると云ふことは、本誌本年第一號の巻頭論文で、私が多少論證するところがあつた。併し支那人の方が概して云ふと一層女性的で、死の本能はエロチジーレンせられ、非知力的であるが、その代りエスのマゾヒズム的な底力は一層根强いやうに思はれると云ふこともその論文の中に說いておいたと思ふ。

四、結語

私は近頃、ドイツの最近代建築家ブルーノー・タウト著『日本美の再發見』と題する譯書を一覽したが、その中で日本建築の單純美を賞讃してゐるけれども、あの一巻の書を以て日本人及び日本文化が全的に賞揚せられてゐるのだと思つたならば、大變な誤解である。私は寧ろ、日本人及び日本文化への輕侮的警告であると感じた。成程タウトは、伊勢神宮、桂離宮、及び飛驒白川村の大家族の住宅建築を絕讃してゐるけれども、彼がそのやうに昔時の、限定せられた少數建築物をのみ賞讃すると云ふことは、つまり現代日本文化が過去のそのやうなよき傳統を生かしてゐないと云ふことに對する端的な批難でなくして何であらう。實際、彼は書中至るところで、現代日本建築及び文化の「インチキ」と「イカモノ」とを盛んに論難してゐるのである。タウトは「藝術は意味である」とか「最大の單純の中に最大の藝術がある」とか云ふモツトーを掲げてゐる。彼は無意味な外附的裝飾を拒否し、一定の意味あるところ、必然的に美は生じ、その意味を最も端的(單純)に生かすところに最大の藝術が生ずると云ふ思想を抱いてゐるらしく思はれる。それは私も亦、頗る同感である。併しその單純と云ふことは、必ずしも粗野、野蠻、低調、貧困と云ふことではない。率直、純正であつて「夾雜物」のないことの意である。

現代の文化は必然的に複雜になつて來てゐるのである。この時代に太古の單純をそのまゝの形で再現するのだと思ふならば大變な誤解である。現代の意味に於いても我々は單純であり得る。併し斷じて「一本調子で」他から利用せられたり、精神的享樂主義に墮して知性の發揚を忘れるやうなことがあつてはならないのである。知性も感情も現實原則も快樂原則も總て生かしてその統一の內に發見せられる單純が現代の單純でなければならない。この複雜な世代に單純な古代や中世に偶然存在した單純性を感傷的に思慕したり、それを誇ることに依つて現代の務めを忘れるやうなことがあつてはならないのであるが、日本人の性格はとかくさう云ふ方面に逃避し勝ちになることを私はひそかに虞れるのである。(完)

日本人及び日本文化の性格

土屋舒廣

① 日本文化の心理的特徴

本誌本年一月號が「東洋文化心理」號を編輯した時、西洋は大體に於いて生本能的、男性的、自我的であるに對し、東洋は一般的には死の本能的、女性的、エス的であると云ふ結論に到達してゐたと思ふ。各自このやうな特徴を生ずるに至つた社會的根據を求めるならば、先づ東洋に於いては、野蠻期の母系的氏族共同體に注意を向けなければならない。卽ち、その時代は個人性と社會性との相關制的によつて集團心理が幼兒期の母定着に停滯したのであり、この定着が傳統化せられたのが、東洋的特徴であると考へられる。次に野蠻期の第二期たる父權的家長制が成立するのであるが、その時代は、丁度個人に於いて幼兒期に母定着から父定着に移行する(男兒は父親に同一化して母親を愛の對象とし、女兒は反對に母親に同一化して父親を愛の對象とする)が如く、その心理が集團に反映し、そこに停滯した時代であつて、西洋的特徴はこの父定着が停滯して傳統化せられたものであると考へられる。このやうに、東洋の無意識的根本特徴は乳兒期或は幼兒期初期の母定着が野蠻期の母系的氏族共同體に停滯し、それが傳統化せられたものであると、いさゝか大膽な思辨に過ぎるが、想定して見る。然らばこの東洋的特徴の日本的顯現はどうであらうか。

日本最古の文献たる『古事記』に現れた神話說を考察してみる事はその證明に役立つこと大であるが、こゝでは餘りそれに立入る事は差控へて置かねばならない。唯、男女の神が雲に乘つて天下り、國土を生ませられると言ふ神話は、恐らく天體創造と民族移住と國土建設とが凝縮し、出産過程と錯綜せられて、傳へられたものと考へられる事だけは、一つの想像としてこゝに暗示して置いても無駄ではあるまい。民族學上南洋或は大陸から天孫民族が移住し、土着の民族と同化して日本民族が生

れたとの想像説は、學説として大體認められてゐるところであるが、もしそれが眞實とすれば、海上を渡つて日本島に上陸する事は無意識的に出産を意味するのである。卽ち母胎內で羊水の裡に成長した事實が海に投出せられるのであり、これは更に種族發生學的見地から、水棲動物が偶然の機會に陸上に移され、次第に變易して陸上動物が發生したとなす說によつて心理的にその投出が必然的とせられるであらう。神話において神の體から事物が生れると傳へられてゐるのは、誕生後、眼、耳、鼻舌、身、意の知覺、感覺、思考力が次第に生長しゆく過程と事物發見とが錯綜し、それが出産コムプレクス的に表現せられたのであらう。卽ち原始人は乳兒的であつて、その思考力は乳兒の心理に停滯してゐたので、事物を發見した事を事物が眼から或は手から、或は足から生れたと考へたのであらう。かゝる考へ方によれば、電氣を發見し、宇宙線を發見したと言ふ事を某學者の頭から電氣が生れ、宇宙線が生れたと言はなければならない。これは外界の事物と身體とが錯綜せられ、その認識が出産コムプレクス的に表現せられたのであらう。それから男女の二神が雲上から劍を海中に下し、その劍の先から滴り落ちた海水が凝固して島々が形成せられたと言ふのは、餘りに明らかな象徴である。卽ち、雲に乘つて飛來するのは、現實では民族移住であり、無意識では出産であり、母胎象徴としての海が空に轉位せられたのである。劍の象徴は言はずもがなである。劍を海中に挿込むでかき廻し、その先から海水が滴り凝固して日本諸島が形成せられたと傳へられてゐるのは、日本諸島を次々に發見した事の出産コムプレクス的表現であらうか。そして男女二神は、延島英一氏想像せられてゐるが如く、ランクの所謂雙生兒空想と關係があるかも知れない。更に神話で言ふ高天原は大空の別名であるが、それは民族の發生地が母胎としての海と錯綜し、空に轉位せられたものであるらしく、實際は南洋或は大陸を意味してゐるやうに考へられる。次に死の國とせられてゐる黃泉國は出生以前の境たる母胎が肛門性感によつて色付けせられた如く思はれる點が多く、黃泉國の食物を忌むと言ふ事は恐らく嗜糞症の禁斷を意味するのであらうか。吾國の童話において、白兎が鰐を欺いて海を渡つたところが、鰐が怒つて白兎を赤裸にしたのを大國主命が救つたと傳へられてゐるのは、民族移住と出産外傷との凝縮ではあるまいか。卽ち、鰐は蠻族を意味し、白兎は移住し來れる民族を意味し、海を渡つて本島に上陸するのが出産と錯綜せられたのではあるまいか。かやうな想像は餘り輕々しくは出來ないが、唯だ出産象徴が極めて多い點だけは確信し得る樣である。

　東洋の無意識特徴が乳兒的乃至幼兒的母定着の母系的氏族共同體への停滯に在る事は既に述べたが、印度、支那、日本を比較する時、吾々は印度が特に胎內的であり、支那が出産外傷的、禁斷的と考へられる點が少くないのに對し、日本は出産象徴的であると言へる。換言すれば、支那が超自我的であり、日本が自我的であり、印度がエス的であるとも言へない事がないと

思はれる。従つて、印度の文化が非常に遲れてしまつたのは、その强烈な胎内空想に原因があつたのであらうし、又釋迦が生れて佛教を樹立したのも印度人の退行願望處置の必要に應じたものであらう。これに對し支那は儒教に現れた限りでは相當に超自我的であり、道德（强迫神經症の反動構成）的であつて、東洋中最も西洋的であるが、それは支那人の出產外傷や禁斷と深い關係があると考へられる。しかるに日本は最も自我的であつて、「言擧げせぬ國」と言はれるのは禁斷が比較的に少く、從つて道德的に强迫症の反動構成をなす必要がないためであらうか。日本人が自我的であるためであらうが、その反面には超自我的な道德性が乏しく、又エス的なねばり强さが少く、「熱し易く冷め易い」と言はれる所以であらう。日本的感性のよさは、太陽や富士山や櫻花が象徵するが如く明朗、簡素な美、つまり自我的な現實性であるが、それは女性の積極的、能動的、生本能的面卽ち乳房的、口唇被加虐性と關係が深いのであつて、日本人が平和を好み、社會的慈愛（仁義）のためには身を殺して積極的、能動的に盡すと言ふのは、日本人の女性的陽性面に心理的原因をもつと考へられる。これは「産び」の觀念、欲求、思想としてイデオロギー化せられてゐる。

② 日本文化の空間的、時間的考察

日本文化の社會的構成に關して、これを空間的に考察すれば、世界に冠絕する皇統連綿たる皇室を超自我として高く頭上に奉戴し、その時代における支配階級を自我として中間に仰ぎ、被支配階級はエスとして、底部を形作り、その關係が「義は君臣、情は父子」の精神によつて結ばれてゐるものであると言へる。卽ち、「義」の方は經濟的、階級的、知性的方面であり、「情」の方は家族的、民族的、感性的方面であつて、兩者は密接に結合してゐる。超自我は日本人にとつて、「萬古不易」と確信せられるものであるが、自我とエスとはその時代により異るものである。これが大體の空間的考察である。

次に時間的に日本文化を考察してみやう。先づ原始蒙昧期が乳兒期に相當する事は明らかであるが、日本人の場合に於いては特に自然的及び歷史的條件によつて出產象徵が豐富であると言へる。神代は人類の幼兒期であつて、最初に母系的氏族共同體が存在し、次に父權的家長制が存在したのであるが、日本では天照大神時代が前者に相等し、ニニギノミコト時代が後者に相等すると、大體において言へる。天照大神がニニギノミコトに「豐葦原瑞穗國はわが子孫の王たるべき地なり行きて治めよ。寶祚の隆えは天地と共に窮りなかるべし」と仰せられて三種の神器（鏡、劍、玉）を傳へられたと『日本書記』に記してあるが、これは皇室と共に日本國民の不易の信念となつてゐる。神代時代の國民は極めて赤裸々な自然人であつて、

この時代は自我から超自我が分化した時代であると言へる。その次に古代期たる奈良朝、平安朝時代は人類の幼年期時代であつて、この時代が西洋歴史で言へばギリシャ時代に相等し、文化的に最も華やかな時代であつた。即ち儒佛二教の輸入、聖徳太子の十七條憲法制定、中大兄皇子、中臣鎌足等が南淵請安を顧問として大化の革新を斷行し、土地國有の中央集權制を確立した事（氏族制を打破し、氏族所有地を中央政府に回收したが、後に莊園制度を生ずる結果に到つた）、『萬葉集』、『古事記』『日本書記』、『源氏物語』、『竹取物語』等の制作等日本文化の最も美しい開花を示した。この時代の社會的自我は貴族でありその主なるものは最初に氏族的大土地所有者たる平群、物部、蘇我、大伴の四氏であり、次に藤原、源、平等の莊園所有者であつた。社會的エスは、從つて農奴であつた。次に源頼朝が平家を滅ぼし、幕府を鎌倉に開いて以來、北條、足利、織田、豊臣、徳川と支配者が交替し、徳川三百年の大平の後明治維新に到る迄の中世期が日本歴史の少年期であると言へる。この時代の社會的自我は封建武士であつて、エスは農、工、商の町人階級であつた。明治維新は第二の大化の革新とも稱せらるべきものであつて、それは西洋文明の刺戟により日本が封建時代の少年期の夢から醒めて、資本主義に飛躍した改革であり、その革新の原動力は商人階級であつた。即ち、歴史上の青年期たる資本主義時代の自我は資本家であり、エスは勤勞無產者であつて時代の動きを自覺せる薩長の武士は自ら商人階級の政治的、文化的技術インテリゲンチャとなつて皇室中心主義の超自我を奉戴し、資本主義を組織したのである。竟に徳川幕府も大政を奉還すべく餘儀なき狀態に立到つた。「勝てば官軍、負くれば賊軍」と言はれる如く、階級交替の社會的事實は善でも惡でもなく、一つの必然性であり、その必然性と相鬪ふ力の關係とによつて善惡が願望的に評價せられるのである。長い封建制の泰平の夢の後に、急激な改革によつて資本主義に飛躍した點は一つの日本歴史的特徴である。資本主義の原則は、個人の社會的取引上の自由、平等であつて、これが歴史の青年期として資本主義の特徴である。明治維新前後が歴史上青年らしい情熱を最も燃燒した時代であつて、その當時の理想、意氣と言ふものは非常に美しいものであつた。現代の日本主義は大東亞資本主義ブロック建設の途上にあり、その理想の下に資本主義的ヒューマニズムの情熱を燃燒しつゝあるのであり、全體主義的統制經濟が强化せられてゐるのは、決して資本主義的自由、平等を廢棄するのではなく、かへつて國家資本主義化せられつゝある獨占大資本主義の自由を確立し、その中央集權の下に國民の一切のエネルギーを動員して、大事業を遂行し、國利民福を招來しやうとするわけであらう。現代が怪奇であると言はれるのは、日本資本主義の現段階に種々の矛盾が含まれてゐるからである。即ち、東亞建設を目指して日本資本主義は偉大な躍進をなしつゝあり、同時にヨーロッパ資本主義行詰りの餘波を受けて封建制への退行願望があり、大東亞建設と言ふ民族的大事業の餘り

にも輝かしい光に幻惑せられて政治と經濟的實利との關係を忘却し易い傾きが感ぜられてゐる事等の矛盾が所謂怪奇として現象するのであらう。

以上、我等は日本文化を心理學的立場から空間的、時間的兩面から大略考察して見たのである。

③ 太陽と日本人

太陽の光熱は一切の生物にとつてその生存の不可缺の要素である。蓋し一切の生命と言ふものは太陽の光熱即ち遠心力の變形であつて、春が來れば植物の種子は大地から滋養分を吸收し、太陽に向つて伸び上るのである。太陽のかゝる性質によつてそれが慈愛の象徵とせられるのは極めて自然である。日本人の無意識においては、太陽は原始母神の慈愛をなしてゐる樣に考へられる。又旭日が海上に昇る樣な場面が日本畫の題材になるのであり、正月元日の朝に神社に參拜し、東天に昇る旭日を拜む習慣があるが、これは出產を象徵するらしく考へられる。太陽が國の表標として用ひられるのは、日本人の無意識が明朗、簡素である事を物語つてゐるのであらう。日本人は「言擧げせぬ」國民だと言はれてゐるが、象徵としての太陽は誠によく日本人の心を物語つてゐる。日本的精神について種々と小うるさい「言擧げ」をするよりも、「朝日に匂ふ山櫻花」や海上に昇る旭日を指示する方が具體的で日本人には遙かに好ましいのであらうか。「如何なるが日本精神」と試みに問へば、「旭日海上に昇る」とでも答へるであらうか。

④ 富士山と日本人

雲外に四季雪を帶びて佇立する秀峰富士は、日本人の無意識において何者かを物語つてゐる。雪は一般に女性の象徵として用ひられる。富士山の形は美しい三角形であつて、乳房を聯想せしめぬでもない。これらの點から恐らく富士山は處女の乳房を象徵すると同時に崇高化せられた母性卽ち日本的聖母の象徵であるらしく考へられる。一般に日本の山は女性の象徵であつて、女性の登山が禁斷せられてゐたのは、女性がそれに同一化し、男性の心を亂すからであらうか。女性が登山すると山が荒れるとして怖れられたのは、象徵としての山が、男性の心において荒れる事を意味し、女性崇高化が破れるからであらうと思はれる。「六根淸淨、お山は靑天」と唱へながら白衣で富士登山する一歩一歩は白雲白雪に汗を流す昇華された美であらう。

⑤ 日本人と櫻花

「花は櫻木、人は武士」と人口に膾炙し、又國學者、本居宣長によつて「大和心と人問はゞ旭に匂ふ山櫻花」と詠まれた櫻花は吾々日本人の心における祕められたもの丶象徵である。

一般に花の性的象徵性は精神分析によつて既知の事實とせられてゐるのであるが、象徵としての櫻花の特殊性については餘り論じられて居らない樣である。櫻花の特殊性として擧げられるのは、先づその色の所謂櫻色と言はれる、ほんのりとした白と赤との混合であり、次にもの丶哀れを感ぜしむる樣なその餘りにも淡泊な諸行無常の散り振りである。第一の特徵として考へられる櫻色において、私は口唇性感的な自我リビドーと、死神としての母性憧憬的な對象リビドーとを直感する。そして、第二の特徵たる櫻花の淡泊な散り振りにおいては死を感じる。が、これは私一個人のみの直觀ではなくして、誰もの感じではあるまいかと思ふ。かやうな意味で吾々は、櫻花において口唇性感的な愛卽死の本能滿足を感ずるのであらう。「願はくは花の下にて春死なん、そのきさらぎの望月の頃」と詠つた西行法師の心は亦、吾々日本人の心である。何と消えも入らむとする程に官能的で母性憧憬的な名歌であらうか。同じ歌人は又「岩戶あけし天つ命のそのかみに、櫻を誰か植ゑはじめけむ」と詠つて驚異に滿ちた嘆聲を放つてゐるが、これは上句を出產象徵（母胎象徵としての岩戶、原始母神における母の幻視）と解釋し、下句を「乳房を誰か吸ひ始めけむ」と心讀すれば、明瞭にその意味が理解せられる。更に母は妻に、乳房は陽器に轉位する。「佛には櫻の花をたてまつれ、我が後の世を人弔はゞ」の歌にも口唇性格者としての西行の心琴の音が響いて居り、妻子ある彼が堀川局と峻烈な情熱を燃やし（母錯綜）、妻子と別れて出家（罪障感とその贖ひのための去勢象徵）し、後に尼となつた妻と娘とに佛の道において再會（母錯綜を阿彌陀如來に投出轉位することによる昇華）する場面などが偲ばれて、石童丸の哀話と共に吾々日本人には親しみ深い。

⑥ 日本人と溫泉

櫻花を以てその心を象徵する吾々日本人が初湯において呱々の聲を擧げて以來、風呂好きであるのは當然である。靜かな山綠にかこまれた溫泉こそ、誠に母胎的であつて、愛人との逃避行に、新婚旅行に、失戀苦の保養に、老後の遊山に、激務後の休息に等々、その心理的使用價値は大きい。四面海にかこまれたこの島國に溫泉が多いことは、風呂好きな吾々日本人にとつ

て何と幸福なことか。

普通の風呂でさへ無意識においては母胎と錯綜され易い。況んや、靜かな山間の自然に湧出す溫泉は、言はずもがな、明らかに母胎象徵であり、噴出する鑛泉において母乳が、そして、臍の緒を傳はり流れる胎内榮養物が無意識幻視せられるのである。試みに、人里離れた山間の溫泉に相愛の男女が入浴する場面を空想してみよ。立ち昇る鑛泉の湯氣、古ぼけたラムプ、窓から射込む月の光、樹枝に鳴く夜の鳥、かうした情景は正に子宮内に精子と卵子とが相會することの、昇華された美しい象徵的幻想でなくて何であらうか。この樣な意味において溫泉は確かに精神的にも慰藉の效がある。神社の附近に色街が散在するのと同樣に、溫泉場に藝者屋や其他の遊興場が附隨するのは、普遍的な事實であり、無意識心理上必然的な現象である。しかし、これは國民精神純化的見地から言へば、餘り好しい現象とは言へないのである。何故なれば、溫泉の樣に無意識錯綜を纏綿し易い象徵的心身保養地こそ、高尙なリアルな超自我と結び付けて利用されゝば國民精神純化上大いに效果的であらうが、それが墮落願望等と結び付けられて居れば、國民の超自我が無意識錯綜的となり、低調となるのは必然である。と言つても、無意識願望を抑壓したり、低級な現實主義を標げる仕方ではいけない。それは可及的にリアルな分析的昇華でなければならない。國民精神運動なども徒にナルチス的ドグマを標げて、單にそれを反覆暗記せしめるだけに終る樣な手段をとらないで、かうした意味で、しかも確實に效果の擧げ得るであらう途を選ぶべきではあるまいか。日本佛教の創建者達が山間明美の地を道場として選んだ事は意味深いことである。

⑦ 角力と日本人

角力の土俵は圓である。その圓内で相手を倒すか圓外に出すかすれば勝となる。これが日本の國技たる角力の特色であつて圓は母胎の象徵であり、その中で素裸で取組むのは出產象徵的である。角力の土俵に立てる大きな幣束は臍の緒を象徵するらしくも考へられる。角力は非常にリビドー化せられた競技であつて、それが和氣藹々としてゐるのはこの爲めである。卽ち土俵に殘る方（勝）は母胎留保であり、土俵から出る方（負）は出產であつて、共に無意識的に願望を滿足する。それ故に角力は日本人の平和を愛する心を象徵するものであり、國技として誠にふさわしいものである。角力取りの褌、好漢男女川の稚氣は誠にほゝゑましいユーモアである。角力取りが相互に尻を向けあつて土俵の外で四股を踏むところ等は、肛門的サディズムがリビドー化せられてゐて和氣がある。又、土俵に鹽を撒くのは、心を清めるためであらうが、精神分析的に考へれば、我々

はそれによつて海水を聯想するのであつて、海水は羊水の象徴であらうと思はれる。そこには、敗北と云ふタブーへの忌避と云ふ魔術的な意味も別にあるにはあるが……。

日本の角力と比較すれば、西洋のレスリングやボクシングは著しく生の攻撃慾が發露し殺風景であつて、四角な格鬪場は禁斷せられた母胎の象徴であり、そこで角力の樣に外に相手を出せば勝つと言ふ樣な規則がなく、相互にエディポス的に相手を打ちのめし立つ能はざらしめねば勝利が得られないと言ふのは、餘りにも西洋的であつて、これは東西宗教の比較と同じ對照をなす。

⑧ 切腹と日本人

日本武士の切腹と言ふ封建時代の習慣は世界的に有名であるが、これは日本人の女性的サド・マゾヒズムを物語るものであつて、刀は男性器の象徴であり、腹は母胎の象徴であつて切腹は母胎復歸の象徴なのである。演劇で觀るところによると、白裝束で白布の腹帶を締め、刀劍を腹に突刺すところは、自己を女性化したところのコイトス象徴であり、介添人が首を切るのは無意識では出産象徴らしくあり、介添人は産婆の夢の化裝である樣に思はれる。死ぬ事の實際上の苦痛は、それを詩化し、リビドー化（愛化）する事によつて緩和せられ、從容として死むでゆくのであつて、そこにおいては切腹の場の儀式が重大視せられるわけである。

日本人のかやうな女性的サド・マゾヒズムが藝術として昇華された場合には、日本的な美として鑑賞し得るので、比較的無難であるが、それが哲學的理窟付けの下に道德として或は政治として行動化せられる事は、充分戒しめらるべき自己淘醉であらう。かゝる自己淘醉によつて現實生活の責任を解決し樣とする樣な事は、國家の發達のために餘り感心出來ない事であつて眞の武士道とか眞の日本道德とか言はれるものも、それをかゝるサド・マゾヒズムによつて構成する事は甚だ危險であつて、哲學や道德を構成する場合には充分に無意識を分析する必要がある。

⑨ 結論

日本文化の問題は、結局日本民族の無意識意慾の問題であると、心理學的觀點からは考へられる。それは更に東洋文化の問題と關聯し、又西洋文化との對照において人類の文化問題と重大な關係を有するのである。そして、かゝる精神的問題は社會

日本の現段階における最も重大な問題は、空間的に言へば東洋諸國の經濟的、民族的、政治的、文化的大同團結の問題であり、その問題解決のために日本のヘゲモニーを確立する事、と言つて語弊があれば、つまり一肌脱ぐ事であると言へるのであり、時間的に考へれば資本主義の諸矛盾解決の問題であると言へる。これらの問題は日本のみならず、亦支那、印度を含めての東洋一般の問題であり、更に、西洋の全體主義的資本主義諸國（ドイツ、イタリー）や自由主義的資本主義諸國（アメリカ、イギリス、フランス）及び社會主義ソ聯の三つ巴の葛藤との關聯において人類的問題であるとも言へる。かやうな重大問題に面して、日本民族は所謂八紘一宇の大理想を掲げて勇往邁進せむとするのである。八紘一宇と言ふ信念は實に廣大なヒューマニズムであつて、その嚴密な意味においては、少しの獨善主義も混入する事が許されないのであり、譬へ主義主張の相異る諸國に對しても人類としての見地から全世界同一家族と考へる事が要求せられであらう。かゝる廣大なヒューマニズムは、佛敎的に言へば、菩薩的慈愛とでも言ひ得るであらうか。しかし乍ら世界の諸國はそれぞれ無意識意慾を異にし、又或は社會主義、或は自由主義、或は全體主義と、種々の異なる經濟的組織を有するのであつて、それらの何れもが地上の產物であり、人類の創造であるとすれば、一を是とし他を否とする事も、その反對も、又一切を是とする事も、一切を否とする事も許されないのであつて、そこに八紘一宇の廣大なヒューマニズムの反面として八面玲瓏なリアリズムが必要とせられるのである。八紘一宇のヒューマニズムと八面玲瓏のリアリズムとは恰も車の兩輪の如きものであつて、一方だけでは危いのである。かやうな指導精神は全體主義にも、自由主義にも、社會主義にも普遍妥當するところの世界的精神であつて、必ずしも日本的とのみは言へないであらう。かやうな指導精神の下に立つたとしても、現實の立脚點、例へば資本主義とか社會主義とかゞ喪失するのではなく、それらが在りの儘に生かされるのであつて、覺むるも白石は白、黑石は黑であり、花は紅、柳は綠であるが、一切の感情の葛藤を撥無して黑石は黑、白石は白と觀る事は實に偉大な事であり、又容易な事ではないのである。

この樣な世界的指導精神を覺醒せしむるためには、東洋文化の直觀綜合によるヒューマニズム的感性と西洋文化の概念分析によるリアリズム的知性とが保存せられ、東洋の母定着と西洋の父定着とが廢棄せられて、東西兩文化の無意識的特徵が止揚せれらねばならないと考へるのである。（完）

藤森成吉氏の性格分析

宮田戊子

まへがき

文壇には批評家なるものがあつて、その時々の文藝作品を新聞雜誌に發表してをり、作家はそれを指針として進路を求めて行くらしい。然し誰でもその作品とそれに與へられた批評とを見て不滿に思はぬものはあるまい。それは個々の作品の取材、構成、表現等のみが批評の範圍で、その作家がその作品に於て現はした創作心理から、前作前々作を一貫して見られる發展は全然沒却せられてをり、それを以て能事終れりとなすものゝ如くである。從つてこれら批評家の職能は、作家をして取材、構成、表現の技術方面に裨益し得ても、作家の「人」としての進歩發展にはいさゝかも利するところがないと云つても過言ではない。これは作家に對して不幸たるのみならず、廣く日本の文藝のためにも不幸である。

私は今人間を研究するに唯一の方法たる精神分析の知識を以て、作家藤森成吉氏の人及びその作品を檢討しようとする。精神分析を應用したのは私が分析を學んでゐるからばかりでなく、文藝の作品にその作家の性格が關與するところが重大であり作家を切り離した作品なるものはあり得ないと信じてゐるからであるが、分析は必ずしも個々人を研究するのばかりが能事ではなく、誰もがもつてゐる病根の處理に役立つものであり、そこに分析の生きた使命があると信じたからである。特に藤森氏をこゝに選び出したのは、氏の中に研究上興味あるものを認めたからに過ぎないが、世上多く見る社交的・お世辭的なものゝやうに飴を嘗めさせて氏の歡心を買はんとするものではなく、氏のもつ病癖を取り除いて根本的な立ち直りを要求せんとする大手術なので、敢てこれをなさんとするのは、人としての氏を愛すればこそであると御承知を願ひたいのである。

藤森氏の文學の特徴

まづ第一に言ひたいことは、氏の作品及言行を通じてみて特徴的なのは自己戀慕(ナルチスムス)の傾向が頗る強いことである。例を擧げて見ると、改造社版の『現代日本文學全集』中の藤森成吉集で氏は自らの作品を解説してゐるが、『娘』と題する自作について「此の作のよさは人によつてわからないかも知れないが」といひ「殊に最後に父親の『吉』が強く娘を叱る時、プラットフォームへ入つて來た「汽車の上に、雪が眞白く積つてゐた……といふ結末を愛してゐる。」とも云つてゐる。こゝでの言葉に關する限りでいへば、氏は所謂「作品の客觀的なよさ」といふことゝ、それを自己が愛してゐるといふ主觀的なことを混同してゐるらしいことに誰でも氣がつくであらう。又戯曲『若き啄木』を書いた理由として、出版書肆が「啄木そのひとの人氣と共に、似たやうな詩人的素質があるから藤森なら面白いものが出來るだらう、といふところにあつたらしい」（『風雨帖』120P）と云つてゐる。事實書肆がさう云つたのかどうかは知らぬが「あつたらしい」位で氏自らかういふことを書いて喜んでゐるのを見るとほゝ笑ましくなるが、これは恰も、ナルチスムス的神經症患者が自己の身體を撫で樂しんでゐるのに似てゐるもので、自分の作品に對して自ら敍上のやうな陶醉的な言葉を、しかも多くの人に讀ますべき書物に書いて得意になつてゐるところに、氏の間の抜けた人のよさが見えてほゝ笑ましくなるが、然し斯から自己戀慕(ナルチスムス)は萬人にとつて、自己を策進し、鞭撻すべき努力を銷磨する大敵であるのはいふまでもないが、わけても藝術の最高峯を目ざして日々刻々の精進を怠つてはならぬ文學者にとつてはそれ以上の大敵であるのは論をまたぬところである。この氏自身の中に在つて氏を蝕んでやまぬ心的裝置のために、批評家が氏の作品に對して下した批判に對して、氏はそれの言に聽き、正當に自己の藝術を高める機會をいつも逸し、少しでも自作を貶下する批評に對してはムキになつて反駁し、それに反し、賞められた場合には有頂天になつて喜び、得々としてそれを又他に公表するのである。人から聽いたことであるが、嘗てW氏が氏の作を文藝時評で稱讃したところが氏はW氏の批評を德とし、菓子折を贈つて厚く禮をしたといふことである。これも氏の自己戀慕が爲さしめたものであることは勿論であるが、かゝる行動は成人や精神的健康者のそれではなくて、神經症患者もしくは幼兒などに見られるもので、精神分析の所謂幼兒性にほかならないと思ふのである。

　次に氏の言動のうちには、自分に親近するものとの競爭意識が絶えず烈しく働いてゐることを見のがすことは出來ない。氏は一高在學當時倉田百三氏と首席を爭つてをり、その後倉田氏が『出家とその弟子』で賣り出したのに刺戟され、競爭意識に

動かされて、倉田氏が唯心的に傾いたに反し、唯物的に傾いて『何が彼女をさうさせたか？』を書いたのだといふ説がある。このことの眞僞は知らぬが、氏のやりさうなことであると思ふ。やりさうなといふことゝいふのは他に例證があるからで、私は氏の故郷を扱つた諸作を讀んで、島崎藤村氏の『水彩畫家』や『家』などとの相似性を感じたが、同じ信濃から出た先輩の作として、且つその閱歷の似てゐる點によつて藤森氏が藤村氏の作を讀んでゐなかつたことはないであらうし、且『家』は舞臺が信濃に關し、主人公の商賣が藤森氏のそれと同じく桒種商であつたことから考へても、この影響は確かなやうであるが、のち藤村氏が『夜明け前』を著すと藤森氏は『渡邊華山』を幾何もなく發表してをり、且つ藤森氏がその後隨筆等の事で『夜明け前』を辛辣に批評してゐること等によつて、藤村氏の活動に無關心でなかつたことも窺はれ、競爭的な衝動で華山を書いたことの心理も分るし、前述した倉田氏との競爭心で唯物的諸作を創作したといふこともあり得ることゝ思ふのである。もちろんこの競爭意識を悪いといふのではなく、かゝる競爭意識によつて學術が進步した例も少からずあるので、藤森氏の競爭意識は自然なものとは思ふが、然し氏が競爭の對象としてそれを凌がうとしたものは、眼前程遠からぬ處に存在する同級生であり、同鄕者であつて、競爭心を起さしめた直接的な動機が、『出家とその弟子』にせよ『夜明け前』にせよ、その藝術的價値よりも、むしろそれの世間的人氣が氏をして競爭心を起さしめたものと見られるので、氏における競爭意識は幼兒的なそれでしかなく、一般には競爭意識が高次的な段階へ自己を推進する契機ではあるけれども、氏におけるそれは、さうした推進力とはなり得ず、『夜明け前』が勞働者などにニガ手であるといふやうな末梢的な非難を試みて*、世評の懸隔に對する劣等感への鎭痛劑となし、以てナルチスムスを滿足せしめてゐる處に、その幼兒性が露骨に見られる。即ち氏の競爭意識なるものは幼兒的ナルチスムスが原動力となつてゐると見なければならないのである。

＊『夜明け前』の批評を藤森氏はやつてゐるが、氏は全篇を通して讀んでゐないといふことを自ら斷つてゐる。(『風雨帖』17頁) 斷つてゐるのは正直でよろしいけれども、全篇を通讀せずに云々することが當を得てゐない行爲であることはいふまでもなからう。

次に氏の特色ある言動として頻りに自己辯護をやることを擧げなければならない。例へば『渡邊華山』を書いた時に、作家が歷史文學を執筆することは必ずしも退却ではないといふやうなことを言つてゐる如きがそれである。こゝにいふ退却とか前進とかは、マルキシズム文學の所謂前進・退却であり、文學者の前進・退却が果してそれと同じであるか否かはなほ議論の餘地があるにしても、藤森氏の場合でいへば、礫茂左衛門から華山、長英、シーボルト等の時代の犧牲者から、或る時代の啄木、政治に關係せぬ一介の藝術家に過ぎずして刺客に覘はれる冷泉爲恭『江戸城明渡し』における勝海舟『上野の戰爭』時代

の大村益次郎と、そのとりあげた史上の人物を一通り見たゞけで、氏の歴史文學が謂ふところの前進か退却かは明瞭になつてゐる。然るに、氏は豫じめこれに就ての非難を期したものゝ如く、歴史文學は退却ではないと防禦線を敷いてゐるのである。マルクス主義的文學批評の側からでなければ、かゝる非難は豫期されないので、氏は曾てのプロレタリア文學時代の批評家、作家に氣兼しての防禦構成と思はれるが、さうして見ると近頃轉向作家達が自己の轉向を合理化すべく努力してゐるのと同じ氏の轉向の辯にすぎないことがわかるのである。それを前以て敢て言明して難者の論を封じ籠めようとするところに氏の自己辯護の特色があるのだ。

　も一つ、これはゴシップではあるが、氏は近來自己の著書の定價がだん／＼高くなつて行くのを歎き、「安き本絶えず望みつ高き本絶えず出しゆく我の憂鬱」なる腰折を作つたといふことである。事實氏の『何が彼女をさうさせたか』などは定價五十錢だつたと思ふが、近頃の氏のものは二圓から二圓五十錢、最近作『華山と爲恭』の如きは定價五圓の豪華版である。然し著書の定價などは出版書肆の意思にもよることなのであるし、五圓の本にしろ十圓の本にしろ、それだけの價値のあるものならば、誰も定價に對する非難などを浴びせるものはない筈である。それを「弱つた／＼」と人に逢ふ度に言つてゐるといふのは、本は安く提供せねばならぬといふプロ作家時代の意識に囚はれてゐるか、もしくは自己の著書に對する自信のなさ（劣等感）から來る自己辯護にほかならない。氏が『夜明け前』を勞働者にニガ手だなどゝ言つてゐることから推して、氏は自著の讀者に勞働者を對象としてゐるかも知れないが、いくら軍需インフレの時代でも、高價な氏の著作を勞働者が讀んだり飾つたりするものではなく、矢張り氏の讀者は比較的經濟的に餘裕のあるインテリなのであるから、定價が高くともさう罪障感をもつ必要はない筈である。それを恰もそれが自分のみの責任であるかのやうに言ふのは、自己の社會意識を間接に表現せん爲のジエスチユアか、さもなければ例の防禦線にほかならないので、氏の性格から考へてこれは前者でもあり、又後者の受動的な自己辯護とも解せられるが、恐らく兩者の混合した心理の表現であらうと考へられ、さうとすれば、氏が常に何にかに自己が監視せられてゐる如く、監視者の攻撃を豫期して防禦線を張つてゐる心理狀態が窺知されるのである。（この心理の分析は後述する。）

　更にもう一つ氏の特徴を擧げると、氏は發表欲が極めて旺盛であるといふ事實がある。歴史小說の資料でも、氏は得たものは全部小說の中に表現せねば氣がすまないらしいが、そのために作品が資料の重壓によつてゴタついてしまふといふ缺點がある。華山などは殊にさうである。作家は資料や考へてゐることを全部羅列するデパートメントストアではない。それよりか反

對に一班を描いて全貌を傳へることが肝腎であるが、然し氏のこの手法には資料を衒ふといふ氣持もあるし、資料の正確さを買つてもらひたい氣持もあると思ふが、氏が失禮ながらあまり上手でもない和歌や俳句やまでを臆面もなく何にでも發表せられるのと併せ見て、その根原は發表欲の熾烈さにあり、詮ずるところナルチスムスの然らしむるところと考へられて來るのである。卽ち後に記した三つの特色は、最初に擧げたナルチスムスによつて一貫されてゐる譯で、それが競爭意識となり、自己辯護となり、發表欲への刺戟ともなつてゐるのであるが、前にも述べたやうに、氏のナルチスムスはその心的現象を一貫して見て、幼兒性を帶びてゐるといふことを認めない譯に行かないのであるが、この幼兒性ナルチスムスは氏を幸福にもしてゐるが、同時に不幸にしてもゐるといふことが言へると思ふ。幸福にしてゐるといふのは、氏の作品にこの幼兒性ナルチスムスが現はれてをり、それが同じものを求めてゐる人々により高く買はれてゐることであり、氏はまたそれが藝術的に高いのを買はれてゐるのだと誤信し、少しでも自分の作品に批難がましいことを言ふ者に對しては飽くまで反擊を加へてやまず、反對に多少なりともよく言ふものには、某氏に對して爲したやうに、最大の好意を菓子折に籠めてお禮をするやうな稚氣滿々たる行爲をなすのである。子供ならいざ知らず、五十に近い年頃の藤森氏、しかも藝術家を以て自ら任じてをり、自らを進步的なものと考へてゐるらしい氏が、自作を文藝批評で賞められたと云つてわざ／＼お禮にゆくといふやうなことは馬鹿々々しいことだが、この行爲の裡に氏が自作に對して無意識的に劣等感をもつてをり、その劣等感が前のナルチスムスの高さにまで補償を要求し、それが氏をしてかゝる我々が見て馬鹿々々しい行動に駈り立てたことがわかるのである。然し藝術家としての氏の不幸は、かゝる幼兒性ナルチスムスのために自己を高め作品を高めてゆく努力が、いつも瑣末的な應酬や興奮の間は銷磨され、それが年と共に、世間的な名聲と反比例してその作品を低下させてゐるといふ點にある。この自己の中に起つてゐる心的葛藤を氏は少しも知らないので、賞められゝば有頂天になつて喜び、貶されゝば怒るのであるが、これでは賞められたにせよ、貶されたにせよ、批評は悉く氏のためにはならないといふことになる。されば、この幼兒性ナルチスムスは氏にとつて獅子心中の蟲にほかならないのだが、これまで見て來ると、我々は何かそのナルチスムスが何によつて形成されたかゞ知りたくなる興味に刺戟されるし、又これによつて愛すべき藤森氏の自己反省の資料となるならば、同胞一人の不幸を救ふことゝなるので、どうしてもその根原をつきとめたい欲望に駈られて來るのである。

生ひ立ち及その性格

こゝで氏の生ひ立ちを一般讀者のために記しておくことは徒爾ではないであらう。

氏は明治二十五年信州上諏訪の藥種商の一人息子として生れ、その數へ年三つの時、その生母は短刀で咽喉を突いて自殺をした。原因は父の放蕩と祖母の專制、卽ち封建的家族制度のためであつたと氏は自ら年譜に記してゐる。その後へ繼母が來たが、それが石女（うまずめ）であり、そのためかまるで木の株のやうな女性だつたゝめに、幼時から氏は母の愛に饑ゑること切なるものがあり、父に向つて母自殺の原因を問ふと、前日母がアメノウオを煮たが、その煮方が惡いとて姑に叱られた。それが原因だと父は自分の放蕩を隱して答へ、アメノウオのせゐだから一生アメノウオを食ふなと敎へたが、アメノウオとはどういふ意味かと聞くと、父は天の魚といふ意味かなと答へた。そこで氏は魚屋の店頭で該魚を見たが、その美しさに眼をみはり、それを天の魚の天と、山國特有の美しい虹とを勝手に結びつけ、一度も見たことのない母親が、七彩の後光に包まれた此世ならぬ美しい人のやうに思はれたさうである。これは『或る男』なる作中の善太郎なる人物に假托してあるけれども、少年時の氏の母に對する思慕の幻想的表現と思はれるが、この母親への幻想的思慕と現實の女性觀とが相尅を演じつゝあつたことは、氏の處女作『若き日の惱み』の永二の左のやうな告白によつてわかる。

永二の母は彼の三歲の時に自殺してゐた。――然し彼の母は不斷の女性の理想として彼の胸中に生きてゐた。――そしてその尊い母を標準にして現前の女を見る時、彼は到る處に不滿を感じなければならなかつた。その後彼はさま〴〵の書物の中に女に對する憎惡の思想を讀んだ。そしてそれに深く〳〵同感した。すべての女は彼にとつてあらゆる背理罪惡の象徵にさへなつた――。

この心理は精神分析に所謂愛憎相反（アンビバレンツ）であつて、その憎惡の强いことは反對に女性への憧憬の强さを示すものであり、その源は母への思慕であり、それがエディポス・コムプレクスの强化と共に、母の自殺に對する父への復讐と、それへの同一化からナルチスムスを昂揚せしめたものと考へられるが、しかもなほ女性（母）への憧れは、永二の左のやうな心境によつて明らかにされる。

然しその後もなほ彼の心の中には思はないところに深い〳〵女性に對する愛着の情が潛んでゐた。彼が現在に見る女に對する憎惡が强くなればなる程その女性に對する愛着の情は强くなつて行つた。すべて自分を救ひ、自分を生かし、自分を高めてくれるのはたゞその女性によつてのみ可能だといふ感じは日に〳〵確かになつて行つた。――然しその女性は現在眼の前に見る女では少しもなかつた。彼が現在の世界に想像した女はみな最も卑劣な最も下等な人間だつた。然し彼のあこがれ

對象はそれを現在の女に求めないでどこに求あるところがあらう？　彼はそこで絶望とは知りながら現在の女にその女性をさがし求めようとした――

しかも氏は結婚後もなほこの母コムプレクスを超克することが出來なかつたことは、『子供』なる作品の森雄をして左のやうに思考せしめたことによつて知れる。

母親の愛情に餓ゑてゐた彼は、自分の心の對稱（象）となるすべての女に相對の愛より寧ろ――或はそれと全く奇妙な風に混合した母性の愛情に求めてゐた――

年甲斐もないと恥ぢながら、然かも亡くなつた母親の姿が、どんなに一時も心から離れなかつたか、妻を貰ひながらもどんなに繰り返して妻の姿と胸の中の幻影とを比較して來たか、子供を嫌ひつゝ自分の妻の中の母性の表はれに依つてどんなに慰められて來たか――

これは明らかに母への思慕から妻にその代償を求め、自らの子に同一化してその愛撫を求めようとする心理であり、父への侮蔑からナルチスムスを高めつゝ、一方において幼兒性へ退行して行つたものと考へられる。而してこのコムプレクスは、父への憎惡と反抗と共に、後述するであらうやうに氏の作品に相當色濃く出てゐる。

かゝる母への愛着は、自殺したといふ事實からして、それを敢てせしめたものへの復讐觀念となるべきは見易いことである。それを敢てせしめたものは父の放蕩であり、姑の專制であり、更に大きくは封建的な家族制度であると氏は考へたのである。（年譜）これはエディポス・コムプレクスを意識せぬ氏としては當然な解釋であらう。それがために氏は父に挑戰し、執拗な闘爭を繰り返すのであるが、後に氏が自ら社會主義者と宣し、たとへ一時的にもせよ、氏としては柄にもないと見られるプロレタリア作家となつたのは、この封建的家族制度を崩壞すべきものは社會主義より外ないと考へたのであらう。

なほ臆斷を避けるために、氏の父親はどんな人物か、氏が父をどのやうに見てゐるかを氏の作品、年譜等から拔萃して見ようと思ふ。

『或る男』の善太郎の父は儒敎主義で固まつてをり、善太郎にも小學校へ通ふ頃から四書五經を素讀させたと書いてあるし、『故鄕を去るまで』の中でも、主人公は父から嚴しく漢字を敎へこまれたと言つてゐる。年譜には父は曾て大政治家たらんとして果さなかつた代りに、自分を法科に入れたとあるが、とにかくその年頃で信濃邊りでそれだけの敎養のあつた人だから、まるでものゝわからない人物ではない筈であるが、エディポス・コムプレクスに使嗾されての行動であるから、氏は父親の惡

い面をのみしか見なかつたのである。『子供』なる作品では父を左のやうに書いてゐる。

――森雄の心は父親の心から獨立しようとしてゐた。さういふ意味で父親の罵る通り、自分を生んだ老いた心に叛逆を企てゝゐた。然し子の年齢と境遇から來たその必然性を公平に認識してやる爲には、父親の考へは餘りに今までの舊い習慣に、その心は餘りに子の柔順と自分の權威に馴れすぎてゐた。そしてたゞ突然現はれて來たやうに見える子の叛逆そのものに逆上した――

果して父はこゝに書かれてゐるやうに封建的專制に馴れてをり、それに反して氏は柔順な子であつたか？　後に擧げてあるやうに、叛意はむしろ子としての氏の方にあつた。これより前、氏の父は氏を法科に入れたい希望であつたにも拘らず、年譜によると一高在學中ロシア文學の影響をうけ、「斷然」父に會うて文科へ移つたのださうである。この「斷然」といふ語氣の強さを見逭がすことが出來ないし、『若き日の惱み』にも文科へ移るについての父子の押問答が書いてある。然し、その中で「これほどまでの犧牲を拂つて自分の文科へゆくだけの價値が果して文科に在るのかと疑ひました――文科そのものが一たい何でせう」と云つてゐることによつて、その反抗は反抗のため以外の何でもなかつた。後に結婚した時も氏は父には無斷でとりきめて式を擧げてしまつたのである。『子供』に書かれた父親への批判は、それから後に書かれたものであるので、父への反抗は父より自分への重壓を意識する前から存在したのである。氏が斯く父を中心とする自己の家を呪咀してゐるに拘らず、母の出た家へは好意をもつてゐるらしいことは『雀の來る家』での敍述に窺へるし、母方の叔父との會話にも「私の父達の手で私の母を失はれ云々」と書いてゐることによつて、反抗が氏自らいふ如く單なる思想の相違でも時代意識の相違でもなく、母の復讐といふエディポス・コムプレクスであつたことは確言して差支へないことである。しかるに岡山の方で教師をやめ、且つ病氣に罹り、姙娠した妻を携へて郷里に歸つて來る。父としては自分に無斷で貰つた嫁であり、自分に叛いた子であるからには、そこに面白くない感情の起るのは當然であるし、衝突は必至である。そこでの父子の爭鬪は『故郷を去るまで』の中に詳述され、それが一應店の使用人達の待遇改善といふ形で表現されたのである。

然し斯く父親に對しての憎惡も畢竟、父への憧れが變形したものにほかなない。『若き日の惱み』の永二は左のやうに父に就て語つてゐる。

親父は少年の時から政治に向はうと志したんですが、家の事情の爲に躓いて、志を抱いて空しく田舍に埋れながら僕を生み育てながら、たゞひたすらに子供をして自分の志を繼がせようと考へてゐたんです。――ところが僕が背いたゝめに親父

はすべてを亡くしてしまひました。僕はいはゞ手づから親父を殺して了つたんです——*

*『若き日の惱み』は大正二年の執筆で三年の出版であり、『故郷を去るまで』は大正十年に發表されたものだが、事實は同六年のことである。この兩作の間の父に對する心理はこゝに遺憾なくあらはれてゐるやうである。

この言葉は『故郷を去るまで』の激越さに似ず、父に對しての愛着と憧れと罪惡感とを表白してゐる。『故郷を去るまで』の中では父を許して

　家の名譽や富やを除外しては其責任者たる父親には今は何ものをも考へることも不可能だつた。——出來るだけ金を使はないやうに又外聞を失はないやうに、家に向つて不利益な事や反抗を企てるやうな人間はどんな事情にしろ棄てゝおく事の出來ぬ人——

だと云つてゐる。こゝで父達の複數を用ゐたのが母自殺の直接な關係者である祖母であることはいふまでもないが、或る場所では彼は祖母を男まさりの寡婦として讃美してゐるので、つまり母の當面の敵は封建的な家族制度であり、年譜で「要するに封建的殘存家族制度」のためだと書いてゐるのが、この書發刊の時代がプロレタリア文學の盛んな時だつたからばかりではない。エディポス・コムプレクスは無意識の衝動であり、意識的には斯う感じられたのであらう。斯く父への憧れは父との愛憎相反(アンビバレンツ)を濃厚にし且つそれとの心理的同一化を促進した。

　通常子供の超自我はその父を原型として形成せられるものである。藤森氏は少年の時父の影響で儒教的に身を持し、店の使用人たちが卑猥な話をしたり歌を唄ふと激怒して火箸を投げつけたといふことであるが、これは確かに父を自己の中にとり入れて超自我を築きつゝあつた心的過程と見ることが出來る。*然しさういふ父に對する憬憧はその後憎惡にかはり、父への敵意に滿ちた行動をとるに至つて劣等感を生じ、それがため、ナルチスムスは劣等感との均衡を失したので、以前のナルチスムスへと補償を求めてやまない。そこで父の最も不得意な方面、卽ち文筆活動によつて名聲を擧げようといふ欲望に刺戟されたのである。氏が自ら年譜に書いてゐるロシア文學の流行に刺戟されて文科に轉じたといふことは、いはゞ外形的な理由と自己の行動を合理化せんとする理窟づけにすぎないことは、氏の著作のどこにもロシア文學の影響など見出されないことによつて想像が出來る。だが斯く父を克服することに失敗した氏の不幸は殆んど生涯的なものとなつた。されば氏は幾度か父の代償もしくは人を父と假想してそれに向つて克服すべく努めるのだが、そのため大方の人に在つて自我の監視者たる超自我は、氏に於ては外にあり、それが爲、フロイドの所謂觀察されてゐるといふ妄想を抱き、そのためにこそ氏は世評に一喜一憂したり、自

己辯護をしたりするのである。

※卑猥の歌に怒つたといふのは禁制の生じたことにほかならないが、氏の考へてゐるやうに女性蔑視でないことは、父が土地の藝妓と關係して生ました妹があると聞き「以來妹に愛着すること無限」と、年譜に書いてゐることによつて分る。又この妹に關しての經緯を描いた『妹の結婚』なる長篇に、妹と「戀人同志のやうに」遊んで步いたことや、妹が最初の結婚をした時「祕藏の珠をみす〳〵奪はれてゆくやうな氣持」だつたと書いてゐる。後に此妹が二度目の夫をもつ時、氏自身であるらしい雅夫がいろ〳〵むつかしい仁義を唱へるのも、無意識ではこの妹を嫁入らしたくなかつたのであらう。

氏が結婚後も母への定着を濃厚にしてゐたことは前にも述べたが、この心理は男性として自主的なものを喪失し、母及それの代償たる女性の愛撫に身を委ねんとする被動的な心理を生じた。したがつてそれは幼兒期への退行願望となり、それによつて氏の幼兒性ナルチスムスは形成されたものと見られる。

敍上の心理は氏の作品によつても窺知することが出來る。『渡邊華山』の中で、華山が鎧の古いのを買つて來て飾つておきそれを母が見て今の世に鎧が國防の役に立つかと叱責するところがある。こゝでの華山は先覺者としてゞはなく、母の前の子供としてしか表現されてゐず、畢竟氏自らを華山に投影したものとしか見られない。氏は頻りに史實云々を口にするが、今日殘されてゐる史實が果して全的に信賴するものであつても、かゝる幼兒的な華山の一面を描いたといふことは、氏の幼兒性を露出するものでなければならないのである。それにも拘らず、鈴木春山はシュンサンとよむのだとか、立原杏所はタチハラケウショだとか、小說としてはあまり重要でないことをまで斷つてゐるのは例のナルチスムスから來たペダンチツクな癖で、氏の歷史物は史實に壓倒されて藝術的香氣は頗る稀薄であり、最近『華山と爲恭』の如き考證ものに筆を執つてゐるのも、惡くいへば史實を衒ふナルチスムスのなせる業だといふことが出來る。然し歷史文學や考證にしてからが、氏の幼兒的ナルチスムスの外にあるものではないことは、歷史文學論で服部之總氏のいふところを鵜呑みにしたり、繪畫論で內藤湖南氏の說を盲目的に引用したりするところに見られる。

何が藤森氏をしてさうさせたか?

斯くの如く藤森氏の超自我は、內になくて外に在り、外からその自我を操縱してゐるのであつて、これがため氏は感情の激するまゝに、相當無理な理窟づけをしては身を鬪爭に駈り立てゝゆく癖がある。たとへば氏が自ら藤森成吉集に書いてゐる、

プロ文學に赴く前から私は文壇に對して叛逆的だつたといふこと、自ら社會主義者と宣言し、左翼小兒病的な『拍手しない男』や『何が彼女をさうさせたか？』のやうな作品を書いたことなどがそれである。少しでも氏を知つてゐるものは誰でもさう思ふに違ひないと思ふが、氏は書齋に引籠つて仕事をすべき人で、プロ文學者などは如何にしても柄にないことである。ところが氏は昭和二年の總選擧に勞農黨を代表して郷里から立候補し、小川平吉氏と輸贏を爭つたこともある。當時の勞農黨が如何に尖鋭なものであつたかはいふまでもないが、何が書齋人的インテリゲンチヤとしての藤森氏をさうさせたか？　たゞに時代の勢ひとだけでは解釋しきれないものがあるが、これこそ氏の超自我がマルクシズム的外裝をなし、外に在つて氏の自我を操つてゐるからであらう。今日氏は既に轉向してしまつてゐるが、他の轉向者が種々轉向の辯や聲明やをしてゐるのに、氏はこつそりといつとはなく轉向し、口を拭つてマルキシズムを淸算してゐる如くであり、それらの行爲に少しも自省の跡は見られないのである。

何故氏が社會主義へ走つたか？　私はこれの遠因を敍上の如く父への憧憬とそれへの愛憎並存によるところと考へてゐる。この經路を見るべきものは『故郷を去るまで』であつて、これは氏が失職し且つ病氣となつて姙娠せる妻を伴ひ歸郷した時の自敍傳的なものであるが、主人公は雇人が自分の下駄を勝手にはいて歩くのに激怒し、それに制裁を加へたあとで、急に悔恨の情に迫られて來て、雇人らの父からうける待遇に着目し、父に待遇改善を進言するが、父に一言の下に刎ねつけられ、父子の間に大衝突が起る經緯が書いてある。その中で雇人間にはけ口のない不平が鬱積し、奥の者が怨嗟の對象となつてゐることを述べ、

――主人からならまだしも、若い息子から――然もまるきり店に關係のない――勝手に腕力に訴へられたりしても、一番々頭として面と向つて抗爭する事すら出來ない身分に置かれてゐた……

と自分に腕力に訴へられたことが恰もその位置にある如くに述べ、それに續けて

然しその事實は、果してそれで終るだらうか？――奥が店を脅かしてゐる程度に……恐らく更に陰鬱な程度に、店の者が奥へ何物かを脅かしてゐないだらうか？

と書いてゐることを私を見逭し得ない。これはこの小說の書かれた大正九年頃の社會情勢の影響をうけてはゐるだらうが、人を使つてゐるもの丶罪障感（それが當の主人のではなく、やゝ第三者的に見たそれ）と、權力への社會主義的な復讐に對する恐怖の心理をはつきり見ることが出來るのである。それが自殺した母の弔ひ合戰として、當の責任者たる父及それをさうあら

しめた封建的遺制への憎惡ともコムプレクスされ、鬪爭はいよ〳〵深刻なものとなる。

も一つ考へなければならないのは、前に一寸述べた倉田百三氏との競爭意識である。小說中の事實の父子の爭鬪は大正六年のことであつて、恐らく同年倉田氏と藤森氏は一高在學中首席を爭つてゐたといふことだが、倉田氏が唯心的な作品『出家とその弟子』を發表して好評を博したのは大正六年であり、同八年には創作劇場によつて有樂座に上演された。藤森氏はこれに刺戟され、反動的に唯物的に女の一生を描いた『何が彼女をさうさせたか？』を著し社會主義的になつて行つたのだといふ說（延島英一氏の唱へる處）がある。既に述べたやうに藤森氏は自分に近しい人に對して愛憎相反（アンビヴァレンツ）をもち、それを凌がうとする意識を有してゐるので、この說にも相當の根據のあることを認めなければならない。そこで年譜に就てこれを見ると、倉田氏の方には何にも書いてないに拘らず、藤森氏の方には「一方では倉田百三等と同級（倉田とは寄宿寮の同室に生活した。）」云々の記入がある。この最も親密の意をあらはした言葉の中に却つて愛憎相反の心理を我々は見ることが出來る。卽ち先に萠芽を示した社會主義的なものが、さらに倉田氏への反撥から拍車がかけられたのだとも見られるのだ。

曾て氏にはマルクス主義者として自ら任じた一時代があつたことは度々述べた通りである。マルクス主義文學の特色は、その社會科學的推理を以て、複雜なる社會の階級關係を分析し、その分析的犀利な眼を以て觀たる事象を描出するにある。たとへそれが何らかの理由で描出されないまでも、マルクス主義文學者には社會科學的な洞察が出來てゐなければならぬことはいふまでもない。しかるに氏におけるプロ文學にはさういふ分析的なものは見られず、見られるものは徒らなる現社會機構への反抗ばかりである。なるほど華山は武士として、海舟は御家人上りの敏腕家として、大村益次郎は町人出身の兵術家として描かれてゐる。然しそれらを通しての當該社會への藤森氏の認識は依然として曖昧である。例へば、華山についてそれを武士階級の藝術家として規定することはいゝが、同じ武士階級でも江戶幕府の成立時代と中期、末期等でそれ〴〵變貌してゐた全時代を貫く一定不變の武士なるものはない筈である。この事を私は曾て『歷史』昭和十二年八月號で述べたが、華山は純粹的な武士よりも士魂商才型の人間であり、彼が三宅藩のために町人の間に御用金棄捐や助鄕などに奔走した使命を辱かしめなかつたのは、一介の武辨でなかつたからである。しかるに藤森氏の華山はこの特質を全く無視し、氏自身の華山として描出した。我々があの小說を讀んで生きた華山を感じられないのもそのためである。

華山の師となつた文晁については、もつと機械的な位置づけが試みられ、彼は町人階級の藝術家といふことになつてゐる。文晁に町人的要素の多いことは事實であるが、そればかりであつたとなすは餘りにも單純すぎる。文晁のパトロンは松平定信

であり、それらを含んでの武士階級一般が町人化しつゝあつたのである。例へば松平定信が、いくらその著書で武士的道義を鼓吹したところで町人化の事實を蔽へるものでないことは、マルキシズムを唱へてゐた藤森氏は小ブルジョア的インテリ化の傾向あることを隱することが出來ないと同じである。今日斯かる圖引的位置づけでは、生きた人間は武士であれ町人であれ捕へることは出來ない。氏は華山に就てなした秋田雨雀氏の批評について「單に公式を振まはしただけでは當らない場合が多い」（『風雨帖』76頁）と云はれるが、この評言こそは秋田氏に對して云つたものではなく、氏自身に與へたものであると云つていゝ。

人間そのものゝ認識に至つては一層の迷蒙さが見られる。氏はその著『シイボルト夜話』が前進座によつて上演されたのに對し、例の通り前進座の前進だとなして喜んでゐるが、同時にいはゆる進歩性と何等關するところなき『人斬り伊太郎』が上演され、或る專門學校の教授が人斬りが一番面白かつたと云つたのに驚き、「あゝいふ無知暴力の無批評的描寫を——肯定しておくのは、一個の矛盾ではあるまいか？」といひ、「あゝいふ暴力は、野蠻人か、變質者か、然らずんば武士やならず者の心理からのみ發生し得るものであり、斷じて平和な百姓や町人の特徴ではなく、ましてプロレタリアートの心理なぞではない」と述べてゐるのは氏一流のプロレタリア絶對視でほゝ笑ましくなるが、それにも拘らず、專門學校の教授といふだけで進歩性を求めてゐるだらうと考へてゐることは、氏自らの念、即ちインテリは進歩の味方であり、町人、百姓、プロレタリアの先頭に立つものとの無意識心理を表白したものといふべきであらう、百姓一般、町人一般、プロレタリア一般といふやうな機械的分類法は、結局氏の人間觀、社會觀に何も得るところあらしめない。これらを以て觀ても藤森氏の認識が、素朴にものを見るといふことゝも、マルキシズム的科學性とも凡そ無縁のものたることは明らかであり、そして氏自らは何かそれらを得たと漫然考へてゐるところにその認識の不徹底さがある譯である。氏は歴史文學に作家が筆を執る衝動を。彼の中に確固たる人生觀的統一體系が築かれるにつれ、歴史が回顧せられるに基づくと說明せられてゐるが、（『風雨帖』69頁』差當りこれは氏自らが人生觀に確固たる統一體系を得られたと思惟される宣言であらうが、この何か得たものゝ如き想念こそ、幼兒が見たところを以て大人のそれと同じものとなすナルチスムスの然らしむるところではあるまいか。

先にも述べたやうに藤森氏は、プロ文學に赴く前から私は文壇に對して叛逆的だつたと云つてゐる。然しそれにも拘らず、氏は文壇の批評に虛心坦懷になりえず、その毀譽褒貶の一言一句について神經を尖らし、否とするものに反駁を加へることに果敢である。これによつて見ると氏は鬪爭そのものが正義を貫く道であり、叛逆によつてのみ理想が實現されると考へてゐるら

しい。が、然しその正義や理想は氏自身の主觀的なもので、理想が斯く主觀的である限り、他の人の正義や理想は叉氏の考へるのとは全く反對のものである場合もあり得るのであるが、氏のナルチスムスは自らを全智全能の神に高めてゐるのであつてその誇負は一見宗教の開祖の場合に似てはゐるが、子供が他と闘爭する場合の正義觀と同じく、成人的なものでないばかりではなく闘爭が正義を實現することの方法であると考へてゐるにもかゝはらず、絶えず外界によつて蕩揺されつゝある如きは矛盾であるが、この矛盾こそは幼兒性ナルチスムスの特徴であることは、子供の動作を觀察したゞけでわかるのである。

もちろんノーマルでない作家の藝術が偉大であることもあり得ることであつて、我が國でもドストイエフスキーなどのアブノーマル性が偉大なものゝやうに見られた一時代があつた。藤森氏がロシア文學の影響をうけて法科から文科に轉じた時代は恐らくさういふ時代であつたかも知れない。藤森氏は文藝批評でしば／＼藤村氏や山本有三氏を論じてゐられるが、その他の言動によつて見ても氏のナルチスムスは自らの偉大な藝術家のやうに思つてゐるらしい。然し無意識においてはそれに反し劣等感をもつてをり、それがため世評の毀譽に對して一喜一憂するのであらう。この世評に無神經でないことは、自己の切磋琢磨する上に效果あることではあるが、氏に在つては惡評に對して常に反撥し、反對に社交的お座なり的批評にのみ耳を假さうとする傾きがある。したがつて自己を切磋琢磨すべき契機はいつも逸し去つて、社交的お座なり批評にのみ左右されてゐるのである。これが幼兒的ナルチスムスの特徴である。

藝術への衝動がエディポス・コムプレクスの昇華されたものであることは分析によつて發見された事實であるが、藤森氏の場合にもこの昇華の過程を歴々と指摘することが出來る。既に述べたやうに氏はその自作品に對して好評だつたとか、有名になつたとかの自讃をしきりにやつてをり、自ら偉大な藝術家の如く空想してゐるらしいが、この自讃そのものこそ無意識の劣等感を遺憾なくあらはしてゐるものであつて、世評に反撥しつゝ却つて世評に右顧左眄してゐるといふ撞着を演じてゐることがその原因なのである。

果して氏の作品は氏が考へてゐるやうに高い位置にあるものか？　私はさらに筆をあらためて論ずるであらう。（未完）

附記　本稿に「年譜」と記したのは、改造社の『現代日本文學全集』中藤森成吉集の巻末に附した、氏自筆の年譜を指すものである。

肉體的異常現象の心理及び生理（二）

長崎文治

第三章　身心轉換の神經機構

前述の如き肉體的異常現象は如何にして生ずるか。從來、斯樣な現象は「有り得べからざるもの」として何等研究の餘地の無いもの丶樣に考へられて來た。併し、嚴密に云へば「有り得べからざるもの」といふ事は「無い」といふ事では無い筈である。唯それは存在の妥當性を認めないといふ事であつて、云ひ換へれば「事實は何うあらうとも、それは理屈に合はぬ」といふ事であつて、決して存在の否定では無い。妥當性の否定を以て事實の否定とするならば、それは科學として行き過ぎた論である。從來の科學者はこの行き過ぎを屢々行つて來た。ところが、現代、科學概念の進展に依つて、科學は事實の記述・説明をする事であつて、必ずしも妥當性を前提とするものでは無いといふ事になつて來た。そこで、今や、肉體的異常現象も科學の對象として吾々の前に登場する樣になつて來た譯である。肉體的異常現象は、常態の現象では無いから、常態の研究から得た説明を當てはめる事は勿論不可能である。そこで、この説明は別方面から與へられなければならない。

偖て、前章で述べた樣な、肉體的異常現象の基礎となる共通なものは何かといふと、精神と肉體との轉換作用である。そして、この轉換の機制を研究するには次の二つの順序に依らなければならない。第一は精神から肉體へ轉換する筋道、第二はこの轉換の契機となるもの丶檢討である。以上二つを共に解決しなければ、この問題は充分論じ盡された事にはならないのである。第一のものは生理學的基礎に立ち、第二のものは心理學的研究に依る。併しこ丶で、生理と心理とを全然離して考へる事は、精神と肉體の轉換現象といふ樣な二つの繫がりを研究する上には都合が悪い。この區別が肆意的であり都合上のものであることは論證ずみである。二つのもの丶關係に於て、神經機構から觀て行くことの權利は既に確立せられてゐるのだ。

（一）　腦脊髓神經機能

一體、人體を統制してゐる神經に、二つの系統がある。一つは大腦皮質に終始してゐて、その統制を受ける神經系統で、脊髓、延髓、小腦にも中樞を有するが、それ等は總て大腦皮質の大中樞の支配下に屬する。そしてそれから出た神經纖維は、吾々の感覺器官とか、顏面、四肢、軀幹等の筋肉（隨意筋とか又は骨骼筋とも云ふ）に分布してゐて、所謂、吾々の意識作用とか有意的の動作に關與する器官は、總てこの神經の支配下に屬してゐるのである。心理學的に云へば、自我行動といふ言葉に依つて示される一切である。精神分析學に依ると、自我の最初の發達は肉體感覺からであつて、これは自己の肉體と自己に屬しない外界との接觸に由て生ずるが、この兩者の接觸は一つの境界に於て爲される。この境界は身體又は器官を被つてゐる皮膜で、この皮膜にあらゆる種類の刺戟を感受する裝置が備へつけられてゐて、各々の質の刺戟を感覺として受取るのである。心理學の分類に依ると、これ等の感覺に次の如き種類がある。視覺、聽覺、化學的感覺（嗅覺、味覺）壓覺、痛覺、溫度感覺（溫覺、冷覺）運動感覺、平衡感覺、有機感覺である。視、聽、味、嗅の四つの感覺は、皮膚の特殊の部位に、特に分化した裝置（眼、耳、舌、鼻）を持つてゐるが、壓、痛、溫度等の感覺は皮膜に廣く分布してゐて夫々の刺戟に感應する。運動感覺といふのは筋肉を動かす時に起る感覺で、吾々には力の感じとして感得される。平衡感覺は耳器の中の三半器官で感知され、身體の位置、平衡の狀態に異常ある場合に感じられる。最後に有機感覺といふのは內臟の粘膜に生じた興奮を中樞に傳へるもので、生命維持に關與する內臟器官に起きた異常を、中樞に報知するといふ意味に於て大切なものである。これを一名內臟感覺とも稱する。

之れ等の感覺は何れも感覺器官と、之れの中樞を繋ぐ刺戟傳導路に依つて成立つてゐる。刺戟傳導路は神經纖維である。卽ち、外部又は內部の感覺器から受けた刺戟は、そこへ分布してゐる神經纖維を遡つて脊髓の灰白質部に入る。脊髓に於ては反射作用として、之れに對應した筋肉に行く運動神經に、刺戟傳導路を切換へるが、一部は脊髓の白質部を上昇して大腦皮質の知覺中樞に達し、一定の刺戟として感知される。併し之の刺戟が何ういふ質の刺戟であり、之の刺戟は自分の何處に與へられたものであるかといふ樣な、認識作用を持つには、大腦皮質の他の領域にある綜合中樞の協力が加はらなければならない。そしてこゝで自我意識が生ずるのである。

大腦皮質は高級の中樞であるが、中樞であるからと云つてそれ自身で働いてゐるのでは無い。その働きは常に刺戟に依つて營まれる。刺戟の無い所に大腦皮質の働きは無いから、知覺神經の一繫がりといふものは自我の開發に必要缺くべからざるも

のである。そして、自我の開發といふ事は、云ひ換へれば精神の覺醒といふ事であり、知覺神經の活動といふ事は亦經驗といふ言葉に依つて置き替へられる。それ故、精神活動は經驗に依つて始められ、之れ等の經驗が自我意識の上に統制される所に體驗が生ずる。心理學は體驗の事實を研究する學問であるから、先づ自我に就いて觀て行かなければならない。

前に自我は感覺から生ずると云つたが、之れを肉體の境界に基く自我、卽ち肉體境界自我と呼ぶ。肉體境界自我が確立し、次第に之れが發達して來ると精神境界自我が生じて來るのである。卽ち之れを簡單に説明すると、精神といふものは最初の經驗に依つて已れの物、他人の物との區別が起る。これは種々の感覺器官に依つて得られる感性的の認識である。そして、この己れの物と他人の物といふ樣な區別は、こゝに自我意識を形成せしめる（肉體境界自我）。一旦自我意識が形成されると、その次に來る經驗（體驗）は更に積重なつて自我を豐富にする。この體驗は腦細胞に對して常に一定の興奮を起して、そこに痕跡を殘す。これが記憶である。記憶は何時も體驗された事柄であつて、それが體驗される事柄を容易に自我化する。體驗されてゐる事柄が自我に屬するといふ感じ、卽ち自己の經驗として感ずる意識、又は自分は何時も同じ自分であつて、昨日の自分も今日の自分も同一であり、先刻經驗した事柄も、今經驗した事も皆同一自我の經驗であるといふ感じ（卽ち自我の同一性の意識）は、この體驗の連續、卽ち記憶の上に成立つてゐる。若しこの記憶に故障を來して、體驗の連續性が何處かで絕たれると、所謂自我の分裂となつて、變態心理現象を呈する樣になる。この場合は、一生涯唯一つの自我であるべきものが幾つかの自我を持つ樣になり、從つて、甲の人格、乙の人格、丙の人格と幾つにも異つた自我を現はして、その何れもが全く隔絕してゐて關聯が無くなつてゐるのである。常態の人は、總ての經驗を通じて同一の自意識、卽ち自我の同一性を持つてゐるのであるが、この自我の同一性は、異る自我、卽ち他我を自我から區別するものである。この自我と他我の區別は、前の肉體境界自我の樣に、感性によつて行はれるのでは無く、思考とか判斷といふ樣な知性に依つて行はれるものであり、こゝに精神境界自我が形成されるのである。

斯樣にして自我が形成されるが、これは皆大腦皮質の機能に關係してゐる。これが證據には大腦皮質に故障を來したり、又は取去られたりすると自發的の行動がとれなくなり、自他の判斷が無くなつて了ふ。實驗に依つて、大腦を取去られた犬は、その姿勢や動作は普通と變りが無いし、睡眠も規則的に攝れ、食事も出來るが、甚だ愚鈍となつて、主人を見分ける事が出來ないし、又眼前に有る危險物にも無頓着であり、周圍の事柄に就いては全く冷淡になり、且動作に隨意といふ事が無くなつて總て機械的に動く樣になる。又大腦の發達と自我の發達とは常に一致してゐるといふ事は發生學的研究に依つても證明される

事柄である。さてさうすると、大腦皮質の過程といふものは、感覺に依つて得た自我構成の材料は、大腦皮質の知覺中樞から綜合中樞に集められ、こゝに自意識、卽ち自我が生ずるのである。そしてこの自我は先づ自他の識別を行ひ、自己保存、自我の伸展を行ふ爲めに自己以外の物、卽ち環境に對して自己の定位作用（適應作用）を行ふ爲めに、その全能力を發揮する。發達せる大腦皮質は叡知を司る所であり、思考とか判斷に依つて外界適應作用は最もよく行はれる。而してこの適應作用は人間に於ては、最高の機能を發揮した有意的行動として現はれて來る。これは大腦皮質から一定の命令が、運動神經纖維を通じてその統制下にある顏面、四肢、軀幹の筋肉に達して、適當の行動をとるのである。

大體に於て、皮膚は受容器官（感覺器官）で、內外の刺戟を受取つて、之れを中樞に傳へる所であり、筋肉は中樞よりの刺戟を受取つて運動する器官（運動器官又は輸出器官）であるといふ事が出來るが、それでは知覺神經は皮膚のみに走つて居り運動神經纖維は筋肉の中だけに見出されるかと云へばさうとは限らない。筋肉にも知覺神經纖維は來てゐて、筋肉の感覺があり、又內臟の不隨意筋にも知覺纖維が走つてゐて、有機感覺があるといふ事は前にも述べた。運動神經纖維にあつても、皮膚の血管とか汗腺、又は立毛筋等に走つてゐる。尙ほ、知覺神經纖維は總て腦脊髓神經に屬してゐるかと云へば、最近では植物神經性の知覺神經纖維があると云はれてゐる。更に又、筋肉に走つてゐる運動神經纖維には腦脊髓性のものと植物神經性のものとあるが、顏面四肢軀の幹筋肉は本質的には腦脊髓神經性のもので、意志に依つて支配されて居るが、又植物性神經纖維が走つて來てゐる事を見逃せない事である。これに就いては後に述べる事にする。唯內臟とか腺・管等の臟器を組成してゐる筋肉は、純粹に植物性神經の運動纖維を受けてゐて、意志の支配を受けないと云はれてゐる。

（二）　植物性神經機能

そこで次には植物性神經に就いて述べる順序になつた。前にも述べた樣に、內臟とか、分泌腺、又は血管とか淋巴管といふ樣な器官（之れ等を臟器といふ言葉で包括して置かう）は、吾々の意志の儘に動かす事は出來ない。卽ち、胃腸や肺や心臟やその他の臟器を、吾々は隨意に、恰かも手足を使ふ樣に動かす事が出來ない。それが普通である。併し、吾々が隨意に動かす事が出來ないからと云つて、それでは臟器は働いてゐないかといふと、絕間無く働いてゐる。恰も何かの意志に支配されてゐる如くに巧妙な調和を保ち乍ら、整然たるリズムを保つてゐる。一定の生活々動に適應して、自分自身で巧みに調節し乍ら働いてゐるから、これを又調節神經とか自律性神經とも呼んでゐる。これ等の臟器は個體の生命を維持して行く上に最も肝要である。前の腦脊髓神經系統は對外的行動を主としてゐて、直接生命に關與する事は甚だ少いから、この働きが無くなつても、

或程度迄生命の存續は行はれるが、この神經系統は對內的に、直接自己の生命維持を擔當してゐるのであるから、之の働きが無くなると直ぐに生命が失はれて了ふのである。それ故、この神經を又生活神經とも呼ぶ人がある。更に植物性神經といふ名前は、腦脊髓神經が動物に特有な有意的動作を司つてゐるに對して、この神經はそれ以下の植物にも營まれてゐる營養とか、繁殖とかの、所謂自己保存の爲めの自然的活動をなすものであるから、前者の動物性に對して之れに植物性の名を附したのである。

植物性神經系統は、腦脊髓神經系統とは神經纖維も、神經分布も、又その中樞も異つてゐて獨立した一系列を爲してゐる。この神經には二つの拮抗的の働きを營む神經があつて、一を交感神經、他を副交感神經と呼ぶ。交感神經は脊髓の兩側、正中線に偏つて交感神經節狀索といふのを持つてゐて、一方はこゝから交通枝に依つて脊髓に連り、更に中樞との連絡を保つてゐるし、他方は各臟器又は隨意筋にも分布してゐる。副交感神經は、一つは頭部より出るもので、中腦又は延髓から出てゐるものと、薦髓から出てゐるものと、最近は脊髓の所から出てゐる（脊髓性副交感神經）事が證明されたが、之れ等の所から出てゐる神經纖維は、交感神經と同じ樣に各臟器又は隨意筋に分布してゐて、各臟器は交感・副交感の二つの神經の拮抗的支配を受けてゐる。例へば心臟に就いて云へば、交感神經は心臟の收縮を強盛にし、心搏動を增加せしめるに對して、副交感神經（こゝでは迷走神經）は收縮を減退せしめ、心搏動數を減少させる。胃や腸に就いて云へば、交感神經はその蠕動を抑制するに對して、副交感神經は之れを促進せしめる。斯樣にして、交感・副交感神經は一つの臟器に對して拮抗的に働き、適度の働きを維持させてゐるのであつて、恰度發動機と制動機の役割を行つてゐるのである。そしてこの二つの神經纖維は、吾々の生活々動に關與する器官（筋肉）には隈無く行き亙つてゐて、殆んどその影響を受けない運動器官は無いのである。

植物性神經は、斯樣に肉體的活動に關與してゐて、前の腦脊髓神經が精神的活動の原動力であるに對して、之れは肉體的活動の原動力と見て良い程であるが、併し吾々は腦脊髓神經が精神活動を司り、植物神經系統が肉體活動を司ると確然と分けて良いかといふと、決して斯樣に確然たる分割は出來ない事を認める。植物性神經も精神作用に關與してゐる事は、交感・副交感神經は共に調和を取つて働らいてゐるが、その一方の働らきが盛になり、他方の働らきが之れの平衡を取る事が出來なくなると、氣質に歪みが生じて來るもので、例へば交感神經が持續的に興奮してゐる場合は交感神經緊張症といふ症狀を呈し、副交感神經が興奮してゐる場合には亦副交感神經緊張症（多くは迷走神經緊張に來る）といふ狀態を呈する。この二つの症候は氣質が全く正反對になるのである。これはホルモンの關係であらう。ホルモンと植物性神經系の關係は緊密であつて、交感・

副交感神經は内分泌腺に夫々働らいて、各々に應じたホルモン分泌を促し、叉ホルモンも、その性質に應じて交感・副交感神經の働きを促がすのである。そしてホルモンが如何に氣質に甚大な影響を與へてゐるかといふ事は、この方面の研究に於て證明されてゐる。

最近の研究に依ると、腦下垂體とか甲狀腺とか副腎とか生殖腺等のホルモンが精神活動に大きな影響を與へてゐるといふ事が發見された。之れ等のホルモンは、血液の中に混つて全身を循環する間に、直接に中樞神經（或は腦髓の血管壁）を刺戟して、精神活動に色々な影響を與へると共に、亦植物性神經系に作用して、各臟器の働きにも變化を現はして、間接に精神活動を左右するのである。特に氣質と云はれてゐる性格的特徴は、情緒と衝動の複合に依るものであるが、これは亦多分にホルモンの影響を受けてゐると云はれてゐる。ホルモンと植物性神經はお互ひに複雜な關係を以て氣質に影響を與へてゐるものであるし、叉植物性神經は、それ自身として感情と密接な交捗を保つてゐるから、交感神經といふ名前も、こゝから生じて來たのである。

さうすると、腦脊髓神經の精神に關與する働きと植物性神經のそれとは同位に論ぜられてよいかと云へば、さうは行かぬ。腦脊髓神經の精神作用への關與は、前にも述べた樣に、本來それ自身、精神作用に專屬してゐる器官であり、この系統の高等中樞は、精神作用の中樞である。これに對して、植物性神經は本來が肉體的活動に參與すべき器官であり、その中樞も肉體的活動の調節としての重要な役割をしてゐるのであつて、精神活動には直接關與するのでは無く、間接的である。つまり精神作用、殊に感情と交渉を保つてゐるのである。從つて植物性神經は自我といふ樣な高級の精神活動には關與しない。

斯樣に、植物性神經は自我意識には關與しないで、不隨意的に働いてゐるから、或點に於ては、腦脊髓神經の意識作用に對して無意識的活動を營んでゐるといふ事が出來る。併しこゝに云ふ無意識的活動は、精神分析學で云ふ無意識の働きとは異なつてゐる。精神分析學の無意識活動は、意識の上に現はれて來るべきものが、抑壓に依つて現はれ得ないで、無意識の領域へ追ひやられてゐる狀態であるが、植物性神經の働きは、本來無意識的の活動器官であるから、そこには抑壓された狀態といふものは無い。抑壓が無いから屢々意識に上す事が出來るのである。併し、植物性神經系統は、全然精神分析學の所謂無意識とは緣が無いものかと、いふとさうでは無い。吾々は植物性神經系統を中心に向つて進み、それの上位中樞である間腦に達して、之れを孜細に觀察すると、無意識の生理的據點を發見する事が出來るのである。これに就いては後に愚見を述べるが、今こゝではその前提として、間腦の機能に就いて觀て行かうと思ふ。

（三）間腦の機能

從來、中樞部位の研究で、大腦は最も多く研究の對象となり、各方面から觀察されてその機能が明らかにされて來たが、その下部に在る間腦に至つては、未知の部分が非常に多かつた。現時に於ても尙ほ、大腦皮質が精神作用を營み、これの研究に依つて精神作用が闡明されると考へてゐる者が尠くないが、こゝ十數年來の間腦に關する研究と、近來流行した嗜眠性腦炎の研究的病理學と、及び最近の發達した腦外科の手術方式に依つて、間腦を大腦から切離して研究し得る樣になつて來てから、間腦の正體が次第に明らかになつて來たのである。その結果、大腦皮質のみが精神作用を營むものでは無く、間腦に於てもつと複雜な精神作用が營まれてゐるといふ事が證明される樣になつて來て、今では、大腦には感覺とか、知覺、運動、又は觀念の聯合とか、記憶、思考、判斷といふ樣な叡知の働らきを司る中樞、卽ち自我意識の中樞であり、それ以外の精神作用、卽ち感情とか欲望とか、物事を意識する働きとか、又は生命維持としての臟器の働き等は、凡てこの間腦に於て營まれると云はれる樣になつた。

間腦は多くの相關機能の中樞を持つてゐるが、その中最も重要なのは視床（タラムス）とその下部に位する視床下部（ヒポタラムス）である。視床には情意的の要素たる衝動とか情緖の中樞があり、又意識作用の中樞も此處に存すると云はれてゐる。そして、こゝは知覺神經の中間中樞として、末梢から中樞に至る神經纖維の通路になつてゐて、感覺器官に與へられた刺戟は、此處へ來て情緖中樞を刺戟して感情を起させ、同時に、自分自身、この感情に依つて着色されて、快、不快を伴つた感じとして大腦皮質に達するのである。更に視床部に來てゐる知覺神經纖維は、その下部にある植物性神經の上位中樞にも連つてゐるから、反射弓を作つてこゝへも興奮が傳へられるのである。植物性神經の上位中樞は、交感・副交感神經の調節を司どるもので、新陳代謝、體溫調節、呼吸、血液循環、睡眠、生活衝動等の、生命維持に必要な働きに關與してゐる。

間腦は、以上觀て來た所によると、二つの働らきを持つてゐる。一つは肉體的活動の中樞、卽ち植物性神經の上位中樞であり、一つは精神作用の一半である情意と　意識作用である。この中、意識の中樞が間腦にあるといふ事に就いて說明しなければならない。これは病理學上、腦疾患の中で、意識に混濁を來す事の多いのは間腦に故障がある場合であつて、今日の腦外科で大腦皮質の廣い範圍を切除する手術があるが、この場合、大腦皮質を取去つて了つても、生命を喪ふ事は無いし、又意識も無くならないといふ事を發見した。この事柄からして、意識の中樞は大腦皮質に有るのでは無く、他の部分に有るといふ事が分つて來た、前に間腦に病變が有る場合に、意識の混濁を來すといふ臨床的事實が證明されたが、この事柄からして、間腦に意

識の中樞がありはしないかといふ様な注意が向けられたのである。そこで、動物實驗に依つて、大腦皮質を取去つた實驗動物の、間腦刺戟實驗を行つた結果、中心灰白質部卽ち視床下部を强く壓迫すると、忽ちにして昏睡狀態を惹起すといふ事が證明された。それ故、意識喪失とか譫妄狀態、又は意識朦朧とした狀態、卽ち自意識（自我）を失つた狀態といふものは、間腦の異常狀態と關係があり、從つて間腦には意識の晴明度を調節する働きのあるといふ事が推定されたのである。

こゝで、間腦の意識作用に就いて、特に注意して置かなければならない事は、これは、吾々が普通一般に用ひてゐる様な意識といふ考へとは異るといふ事である。吾々が平常用ひてゐる意識といふ言葉には、自意識とか自覺とか、又は確認といふ働らきがある。併し意識には確認の無い意識、卽ち自意識を持たない意識作用のある事も、吾々は屢々經驗する所であるが、間腦の意識といふのは之れである。自意識とか確認とか、又は自我といふのは大腦皮質の機能であつて、これは精神現象のほんの僅少部分である。大腦皮質の洗禮を受けない。從つて、自意識の無い精神といふものは、恰度スタンリー・ホール（Stanley Hall）博士が比喩した様に、氷山の水面に出てゐる位の部分と同じで、この部分は恐らく十分の二位で後の十分の八は水中に沒してゐる。水面に現はれてゐる部分と、水中に沒してゐる部分とは本質的に異るものでは無い。同じ氷山の一部分である。同じ氷山の一部分であり乍ら、水面に浮び出てゐる部分は、美はしい陽光を浴びて吾々の視界に入つて來る。然るに水中に沒してゐる部分は吾々の視界の外に置かれてゐる爲めに、その存在が氣付かれないのである。更に私は無線電信を以て例にとつてみやう。間腦は電波の發信所である。こゝで一定の振動を持つ電波が作られて、之れが空中に向つて放射される。この電波は空中を一定の方行に向つて流れてゐるのであるが、吾々には之れを感受する力はない。感受出來ないからと云つて電波が無いのでは無い。一定の受信装置の下に於ては、之れが記錄として現はされて來る。この受信装置こそ大腦皮質であり、空中に流れてゐる電波は間腦の意識である。そして、受信機に依つてキャッチされて、一定の記錄となつて現はれて來たものを、吾々は意識化されたもの、卽ち自意識と稱するのである。更に哲學的表現を以てすれば、間腦の意識は生命の流れといふ様に解してよいと思ふ。併しもつと適切な區別は、精神分析學に依つて分類された意識、無意識を、前者を大腦皮質の意識、後者を間腦の意識と分ける事である。精神分析學は、この意識と無意識を、自我とエスに分けて居るが、自我は明らかに大腦皮質精神であり、エスは間腦精神と解してよいと私は思ふのである。これに就いての私見は後に述べる積りである。

（四）大腦皮質と間腦との關係

最後に、大腦皮質と間腦との關係に就いて觀なければならない。大腦も間腦も、共に獨立した中樞であつて、それ自身とし

て一定の働きを營んでゐるが、併し之れ等は全然無關係かと云ふとさうでは無い事は、前に述べた事項で分つてゐる事と思ふ。之れ等二つの中樞間は神經纖維を以て連絡してゐて、大腦皮質の影響は間腦に與へられるし、間腦に起つた興奮は常に大腦皮質に傳へられるのである。併し、嚴密に云ふと、大腦皮質と間腦の中樞は何れも直接の連絡を以て關係してゐるか、例へば大腦皮質と情緒中樞、情緒中樞と植物性神經上位中樞、植物性神經上位中樞と大腦皮質が三角形的相互關係を持つてゐるかといふ事である。情緒中樞と大腦皮質との連絡は確實であつて、之れは後章で述べるが、大腦皮質と植物性神經上位中樞との直接の交捗に至つては疑問無きを得ない。ベヒテレフ（Bechterew）やスピーゲル（Spiegel）は、この二つの直接的關係を認めて、大腦皮質內に、植物性神經系に關する中樞があるか、又は重要な影響を與へてゐると云つてゐるし、事實として、羞恥に依つて顏を赤らめたり（顏面血管の擴張）、心臟が躍つたり（心臟收縮數の增加、强盛）するし、心痛すると流淚を起させるし、憤怒は氣管枝筋の收縮、呼吸異常といふ樣な狀況を來し、恐怖に依る立毛、嘔吐、下痢を起したり、その他恍惚とした場合の流涎、重大な事件に直面して、精神に緊張を來した場合に屢々便意を催ほすといふ樣な場合は、大腦皮質が植物性神經系統に影響を與へてゐる樣に見える。又大腦皮質刺戟實驗に依つて、瞳孔の變化とか利尿を見る事があるといふ事實は、この說明を强化するものである。併し、之れに對して、バード（Bard）の實驗に依れば、大腦皮質を完全に取去つた場合も、感情と隨伴して植物性神經系の興奮が生じて來て、大腦の有る場合と變りが無いから、大腦は直接植物性神經上位中樞に關係ない樣に思はれる。之れは要するに大腦の間接的影響が、植物性神經中樞に與へられるものであると考へられるのである。この場合何時も感情に隨伴して現はれるから、大腦皮質の興奮が情緒中樞の興奮を促し、情緒中樞の興奮に伴つて植物性神經系の興奮が生ずると見るべきである。これに就いては後章で說明しやうと思ふ。

第四章　情　緖

（一）情緖と表出作用

情緖（Affekt）は强烈にして、而も突如として現はれて來る感情であつて、常に一定の身體的表現（情緖表出運動）を伴つて來る事が特徵である。キャノン博士（W. B. Cannon）に從へば、この表出運動には二種あつて、一を外的表出、他を內的表出とに分ける。外的表出は、例へば博士の實驗した猫に就いて觀ると、この猫に犬を嗾しかけるとか、又は强い刺戟を與へるかして苦痛を起させると、全身の毛を逆立て、爪を現はし、齒をむいて特徵のある唸り聲を發して怒りの情を現はし、一定

の情緒發生を明らかに相手に觀取される樣な狀態で現はすものである。次のこの憤怒した猫の肉體的變化は、啻に之れだけかといふとさうでは無く、單なる觀察では分らない變化が現はれてゐる事を見出した。卽ち心搏數の增加、血壓の上昇、赤血球の增加、血糖量の增加、アドレナリンの分泌、消化管の運動減退、血液凝固性の增進等が見られるが、博士は之れを情緒の內的表出と呼んでゐる。

この二種類の情緒表出は、憤怒の場合のみに限らず、あらゆる情緒に附隨して現はれて來るものであつて、吾々が普通感情と稱してゐる喜怒哀懼といふ樣なものは、何時も夫々に特有な情緒表出形式を持つてゐて肉體の上に見られ、これ等を情緒と呼んでゐる。この情緒は、心理學ではその本質的なものとしては快不快の感であるとしてゐる。ヴント（Wundt）は快不快の外に、緊張と弛緩、興奮と沈靜を加へて、感情の三方向說を說へてゐるが、之れに贊成する學者は少く、多くのものは快と不快を以て感情の要素過程とし、他のものは隨伴的のものと觀てゐる。この快不快の起因に就いては色々の說があるが、生物學的說明が最もよく吾々を納得せしめる。卽ち、生物の生命維持に寄與する刺戟は快であり、之れと背馳する刺戟は不快であるといふのが原則的であつて、こゝに情緒が生ずるのである。卽ち生物的生得の感情である。從つてそれは本能と密接に結合してゐて、寧ろこれは本能的であるとさへ考へられるのである。Affekt といふ語には多分この意味が含まれてゐるが、大槻氏は精神分析術語としては「本能感情」なる譯語を與へて居られるが、私はこゝでは、從來の心理學に於て規定されてゐる情緒といふ語を用ひる事にする。

情緒表出の二つの形式の中、外的表出は古くから一般に表情と呼ばれてゐるもので、顏面とか四肢、軀幹の筋肉や血管や汗腺や立毛筋等が、夫々の情緒に應じた反應をするのであるが、昔から、大體この表情を以て情緒の標識としてゐた。併し嚴密に云ふと、この表情が常に情緒に隨伴して來なければならないのか。この表情が現はれなければ情緒は生じないのか。この兩者の相互關係は必然的のものであるか。若しこの相互關係說が絕對的のものであるとするならば、心理學者の間で色々批判されてゐる、ジェームズ・ランゲ說（James-Lange Theory）は無條件的に肯定されてよい筈である。ジェームズ敎授は「吾々は泣くから悲しみ、毆るから怒り、震へるから恐れるのであつて、悲しんだり、怒つたり、恐れるから、泣いたり、毆つたり震へたりするのでは無い」といふ樣に、從來の云ひ方とは全く逆の考へ方をしてゐて、この說は、情緒が本で色々の表情が起るといふ從來の說に對して、却つて行動が本で情緒が生じて來ると主張するのである。卽ち、我々は悲しいから泣けて來るのでは無くて、何か原因があつて泣くといふ樣な身體的態度をとると自ら悲しみの情緒が湧いて來るといふのであつて、或る特

殊の知覺が身體的變化を起し、この身體的變化に伴つて情緒が生じて來るといふ事である。今迄の考へ方では、或る知覺が生ずると、之れが情緒を起し、情緒に伴つて身體的變化が生ずるといふ樣に云はれてゐたが、之れと全く反對である。この說に對して批判や說明を加へる事はこゝでは不要である。唯かういふ樣な說が何れも情緒とその表出が定型的に結合してゐて、何れが先であらうとも、兎に角情緒と表出は密接不可分に起て來るのだと考へられてゐる。ジェームズ教授が「急迫せる動悸も淺い呼吸も、震へる唇も、力なき四肢も、鳥肌も、内臟の動搖も、何等之れ等の感じが無いとしたならば、何んな情緒が殘るであらうか、余は全く考へる事は出來ない」と云つてゐるのは、總ての點に於て正しい樣である。これは教授の擧げてゐる表出作用は皆内的表出であるからである。内的表出と情緒とは後にも述べる樣に常態の場合に於ては不可分の關係にある。

併し、右の關係は外的表出の場合に於ては妥當しない。卽ち外的表出は必ずしも情緒發生の徵表にはならないし、又外的表出が情緒を起させる事の出來ない場合が多い。例へば、腹が立つても怒りの情を抑へて、無理に笑顏を作つて居る事が出來るし、可笑しくとも、故意に怒つた樣な顏付をしてゐる事も出來る。この場合は、情緒表出が意志（大腦皮質の活動）に依つて抑制され、變へられたのである。併しこの場合は、外的表出の全部が抑制され、又は變へられるのでは無く、顏面血管とか汗腺又は立毛筋といふ樣なものは、顏面、四肢・軀幹の筋肉とは獨立して、情緒に應じた興奮を起すのである。それ故、この場合の表情は不自然で、苦笑ひとか、凄味の無い怒りの表情が現はれる許りである。之れは神經支配の異つてゐる爲めに生ずるのであるから、次にこれに就いて述べてみよう。

（二）情緒表出に關與する筋肉の神經支配

顏面とか四肢・軀幹の筋肉とかは隨意筋（骨骼筋）であつて、大腦皮質に高級中樞を持つところの腦脊髓神經支配を受けてゐるものであるが、同時に亦、間腦に上位中樞を持つ植物性神經の纖維も受けてゐて、この影響も多分る蒙むのである。それ故情緒が生ずると、その興奮が植物性神經纖維を下つて、顏面筋とか四肢・軀幹筋の運動を促す事になる。情緒に伴つて自然に現はれて來る表情が之れである。ところが、も一つのこゝに分布してゐる腦脊髓神經は、吾々の意志に依つてこの表情を或程度變へる事が出來るのである。この二つの神經支配を最もよく證明するのは病的の場合である。例へば、腦溢血の爲めに、大腦皮質の運動中樞の一部（例へば右側）に故障を起すと、その反對側である左側の顏面筋を故意に動かす事が出來なくなる。併しそれでは全然怒つたり笑つたりする時の、外的表出が出來なくなつたかといふと、さうでは無い。この患者に何か面白い話を聞かせて喜こばせると、自然に顏面全體に微笑が浮んで來るのが見られる。悲しい時も、怒つた時もさうである。さ

うすると、これは大腦皮質の働らきではなくて、間腦の働らきに影響されたと見るべきである。卽ち、腦溢血に依つて、大腦皮質のその部の運動中樞に故障を生じた爲めに、大腦皮質の他の部で起つた興奮を、運動中樞に切り換へて、適宜の命令として傳へても、運動中樞が之れを自分の支配下の筋肉に傳へる事が出來なくなつてゐるから、意志通りに之れ等の筋肉を働らかせる事が出來なくなつて了つた。ところが、故障の生じたのは大腦皮質の方面で、間腦の方には何等の故障も無いから、一定の情緒が起つて來れば、之れに附隨した植物性神經系統の興奮となつて、表情が現はれて來るのである。これと反對に、嗜眠性腦炎を患つた患者で、大腦皮質には何等の異常が無く、間腦の視床部に故障を來してゐる患者は、何んなに面白い話を聞いても表情は起つて來ないが、故意に笑つてみせる事は出來るのである。

斯樣に、顏面とか四肢・軀幹の筋肉は腦脊髓神經系と植物性神經系との二重支配を受けておるのであるが。血管とか汗腺とか立毛筋、又は其他の臟器は、總て植物性神經系に屬してゐて、間腦の支配下にのみ屬してゐるから、意志の自由にはならない。それ故、情緒の中樞と植物性神經の中樞との間に故障の無い限り、一定の情緒には必づ一定の臟器の興奮が伴つて來るのであるから、若し不快の情緒が生じた場合、如何に理性を以ておし隱さうとしても、顏や形はどうやら取りつくらう事は出來るが、心搏動や呼吸や血管やその他の分泌、及び消化器の運動減退等はどうとも取去る事が出來ないのである。

（三） 情 緒 の 中 樞

情緒が起るには、情緒の中樞が何かの原因で刺戟されなければならない。吾々の日常生活に在ては、外部から感覺器官を通じて刺戟が與へられる場合と、內部の心像に依つて起る場合とがある。感覺器官を通じて情緒が起される場合といふのは、何か情緒を起させる樣な原因が現實に存在する場合で、例へば、不愉快の事件に遭遇したとか、又は愉快な話を聞いたといふ樣な場合である。次に內部の心象に依つて情緒が起される場合といふのは、現在情緒を起す樣な事件が存在しなくとも、過去に有つた事柄を想起して情緒を惹起すといふ樣な、所謂心因性のものである。併しこの場合は、想起する事は過去の事柄であるが、總ての情緒は想起されたものとして現はれるのでは無く、想起された事柄に就いて新たに情緒が湧いて來るのであるといふ、キュルペ（Külpe）の感情現實性說に依つて解釋され得る。

此れ等の場合で見ると、情緒は決して單獨で現はれる事が無くて、感覺とか表象といふ樣な客觀的內容を前提として現はれて來るのである。併しリボー（Libot）の樣に、客觀的內容と結合しない、純粹感情の狀態といふものも存存すると述べてゐる學者もあるが、仔細に觀察してみると、漠然と、又は所謂無意識的過程としてゞも存在する事が證明されるのであつて、一定

の客觀的内容を持たない感情といふものは無いといふ（レーマン（Leheman）の說の方が正しい様に思はれる。これ等の客觀的内容といふものは、大腦皮質の機能に關係してゐるのであるから、では大腦皮質の興奮が生じなければ情緒中樞の興奮も無いと云つて良い筈である。併しこれに對してバードの研究は否定的である。バードはキャノンの門下で、視床（タラムス）部に情緒の中樞を證明した人であるが、猫の大腦を取去つても、情緒は無くならないで、却つて情緒表出は激しくなつて來た事を認めた。併し大腦が無いから、情緒の意識（自覺）は無い譯である。そこでキャノンは情緒の生理學的特徵を次の如く觀察した。

一、情緒表出は、刺戟と共に敏速に、豫め用意でもしてあつたかの如く起る。

二、情緒表出を起させる刺戟には一定の型があつて、その刺戟を與へれば必ず現はれるが、さうで無い刺戟に依つては自由に現はさせる事は出來ない。

三、情緒表出の型は世代を通じて恒久的である。

四、又動物の種類を通じても略々同じである。

五、同一個體に於ては、生涯同じ型で表はれる。

六、生命保存の爲めには合目的的である。

といふ點である。これでみると情緒反應は殆んど反射的であつて、大腦の關與が必須で無い様に思はれるが、この點に於ては確かに大腦皮質と情緒の中樞との繋がりは生得的で無く、後天的に獲得された結合である。キャノンが、長い間鎖に繋がれてゐた罪人が、刑場に於て特赦せられてから後でも、鎖の音を聞くと、直ちに恐怖と苦痛の感におそわれるといふ例を擧げて、條件反射的に情緒反應が起るといふことは、情緒反應が無條件的の現象である事を意味すると云つてゐるが、この點に於て大腦皮質と間腦の繋がりは條件反射的に形成されたものと觀てよい。併し、この條件反射的結合は個體一代で爲されたのでは無く、宗族發生的に、何代かの間に形成されて來たものであるから、個體に於ては矢張り生得的である。それであるから情緒が起きるには一定の感覺が生じ、この感覺は腦脊髓神經系として、大腦に連つてゐるから、たとへ、感覺器官と大腦の間に間腦が存在してゐて、こゝを神經纖維が通つてゐて情緒中樞を刺戟し、何等かの故障で、情緒中樞から大腦への道が絕たれたとしても、本質的には、この情緒發生は大腦皮質の興奮を前提として居るものである。

又感情は、情緒が植物性神經系の興奮を促して一定の情緒表出を爲すと同様の繋がりを以て、一切の行動に隨伴して來るものである。これは、前章に述べた通り、情緒中樞と植物性神經上位中樞とは同じ間腦の中にあつて、密接に連絡してゐるから

である。

斯様に觀て來ると、情緒は、刺戟の認識（大腦皮質の興奮）と、情緒の發生（間腦の視床部にある情緒中樞の興奮）及び肉體的表出（間腦の視床下部にある植物性神經上位中樞の興奮）といふ三つの機能の結合に依つて惹起されるのである。そしてその結合は大腦皮質と情緒の中樞、情緒の中樞と植物性神經上位中樞といふ組合せが定型的のものであつて、この關係は、例へて云ふと、二つの大陸を連ねる輸送路の様なものである。二つの大陸といふのは、一つは大腦皮質であつて、之れは腦脊髓神經系の高級中樞であるし、他は植物性神經系の上位中樞である所の間腦の視床下部である。この二つの大陸は全然異つた、そして直接には何等の交渉も持たない、各々獨立した輸送路を採つてゐる。併し、この二つの大陸は絕對に交渉を持つ事が出來ず、從つて、一方の大陸から他方の大陸に荷物を輸送する事は不可能であるかといふと、さうではない。二つの大陸の間には大洋が介在してゐて、兩者の交通路を海路に依つて連結するが、この大洋こそ、情緒の中樞が存在する所の、間腦の視床部である。二つの大陸は必づこの大洋の航路に依らなければ繋がれないのである。この二つの大陸を、私は更に精神と肉體との二つの領域に分けてみる。精神活動を營むのは腦脊髓神經系であつて、これは總て大腦皮質の叡知の中樞に奉仕するものである。これに對して植物性神經系統は、その中樞に在ても精神作用を營まないで、純粹に肉體的活動に關與するものである。そしてこの二つの間に介在する情緒中樞が、精神と肉體との交渉を仲介するもので、云ひ換へれば、精神的エネルギーを肉體的エネルギーに轉換させるところの轉轍手の役目をするのである。それであるから、情緒を介在しない精神と肉體との轉換作用は存在しないのである。

（四）　情緒中樞と大腦皮質の關係

次に大腦皮質と情緒中樞との關係をもう少し觀て行くと、大腦皮質は情緒中樞に對して、次の三つの働らきをする。第一、外部から得た刺戟を情緒中樞に傳へて情緒を起させる。第二、自己の批判を以て情緒中樞を抑制する。第三、情緒中樞の興奮を受取つて、之を改變するといふ事である。第一は前章でも述べた様に、外部から得た刺戟が、間腦で感情的着色を受けて大腦皮質に入るが、こゝでこの知覺の認識が生じて、始めて情緒が現はれて來るので、この認識が無ければ情緒は起らぬのである。第二は、一旦發現した情緒が、人間生活と屢々衝突する事があるから、これを適當に抑制して行く働らきであつて、これは日常生活に吾々が常に用ひて居り、それが教養の名に於て賞用されてゐるのである。第三は、前の働らきが情緒を抑制するといふ様に消極的であるに對して、この情緒を矢鱈に抑へて了はないで、洗練された感情に拵へ直す働らきで、情緒とか衝動

の様な感性的感情から、情趣とか情操の様な精神的感情に迄高めて行く事である。吾々が精神分析學で、常に用ひてゐる言葉を以て云へば、第二は抑壓であり、第三は昇華である。この抑壓と昇華の機制は大腦皮質の發達と伴つて發揮されるものであるから、若し大腦皮質に故障が生じて、情緒中樞に抑制的の働らきをする事が出來なくなると、所謂精神退行現象が生じて、原始的生活、本能的行動に還つて行くのであるといふ事は、精神病とか白痴を見れば分るし、又大腦の發達しない時代に遡原的な考察をして行けば充分了解される事である。又間腦自身に故障が生ずると、本能的生活が過大になり、非社會的行動を生ずる様になる。この場合は知力には何等の故障が無いのであつて、その最も良い例は、未だ青春期に達しない少年少女期に流行性腦炎に罹つた患者に見られる。斯様な子供は該疾患が治癒しても、知能の方面には何等の變化を認めないが、今迄溫順で善良だつた子供も、病後は一變して喧騷となり、不安となり、反抗的となり、虛言、窃盜、暴行、徘徊、性的放逸等の不良行爲を衝動的に行ふ様になる。卽ち、性格が一變して了ふのである。種々な觀察からして、性格形成は大腦皮質で行はれるのでなくて、その要素は間腦にあつて、情緒が漆喰となつてゐる事が分るから、結局性格異常といふものは情緒の異常といふ事になる。更に大腦皮質自身、又は間腦自身の故障でも無く、二つの間の神經纖維が連絡してゐる部分に故障が生じても同様である。ヘッド（Head）及びホームズ（Holmes）の實驗に依ると、腦の半側に損傷のある患者は、情緒が少しの刺戟に對しても過大に反應して、殊に不快の刺戟に對する反應は強く、發作的苦痛に惱まされる事が多いといふのである。彼等の實驗した一患者は、疾患側に讃美歌が與へた影響が原因で敎會行を中止して了つたと云はれる。又快感に對する反應も普通の場合よりも強く溫湯は常態側より、異常のある側の腦に快く感じられ、又該患者は、損傷後は疾患のある側に於て性的興奮が一層強くなり、且同情をより多くする様になつて來たと云はれる。之れ等は總て、間腦が大腦皮質の影響を受けない爲めに生ずる異常狀態である。

（五）小　括

大腦と間腦との關係は、斯様に、常に大腦が支配的位置に立つ様になつてゐるから、大腦の發達した者ほど、情緒に對する條件づけが多くなる譯である。腦髓の發達に於て、大腦が間腦より大きい程進化の度が大きいし、大腦が間腦を支配する率の大きい程文化人である。比喩を以て云へば、間腦なる小役人は、大腦なる上司の指揮を受ける譯で、これが人間生活の正常な狀態であつて、若し反對に下剋上といふ様な狀態になると精神異狀現象を呈する様になる。それであるから、本能的な間腦精神が理性的な大腦精神に依つて統御せられて行く所に、人格形成が遂行されて行く譯である。

以上、情緒に就いて本題の要目とは關係の無い事柄に迄亘つて、必要以上の説明をした觀があるが、それは、本題の解決に最も關係の深い情緒に就いて充分知り、且その機能を明らかにする爲めに屢々述べた譯である。情緒だけに就いてはまだ多くの問題が殘されてゐて、こゝでは論じ盡せないが、兎に角、この章に於て、次の事項がもし理解されゝば幸である。

第一、精神から肉體への轉換作用は、情緒を仲介として行はれ、情緒無くして轉換作用は行はれない。

第二、情緒の生理的、常態的な、轉換仲介作用は、表出作用といふ樣な、器官の正常な興奮として現はれるので、それは定型的である。この埒を越えると異常であるといふ事である。

そこで、本稿に於て論ずる所の肉體的異常現象は、身心轉換作用の常態的のものでは無く、異常なものであるから、情緒が如何樣な狀態になつて働いた時に、奇蹟的異常現象が生ずるのかといふ事を考察しなければならない。（未完）

心理家としてのシュニツレル（テオドール・ライク）

—Arthur Schnitzler als Psycholog : Dr. Theodor Reik—

黒子昌彦譯

序

元オーストリーの小説家にして戯曲家アルツール・シュニツレルに就いては、その多くの作品がわが國に飜譯紹介せられてゐるので、今さら説明を要しないであらう。その作家を對象としてこの研究を試みたライクは、フロイドの高弟で、醫家出身でないが、多くの論文を公にして頗る豐富な才能ある人として有名である。この著書は一九一三年八月末ヴィンに於いて公刊せられたものだが、今では絶版である。まづ原著者の「序」を次に紹介しておく。

「次の研究は最初から美學的評價を放棄し、唯科學的な目的のみを追求し、アルツール・シュニツレルの作品に現はれた種々の人物を心理學的分析の對象として宛も實在の人間のやうに取扱つたものである。云ひ換へれば、彼の自我の分割された部分彼の人格の分裂した部分として扱つたのである。この研究は新しい應用心理學、詳しく云へば、精神分析學の觀點から作中諸人物を觀察してゐるのである。

この研究に於いて精神分析的方法がどう云ふ風に適用されてゐるかといふことを簡單に説明しておかう。讀者はこの研究の各部分が同じやうな組立を持つてゐることに氣附かれることゝ思ふ。卽ち、この研究はシュニツレルの描いてゐる人物の體驗中の一見本質的と思はれない細々した事柄（部分的な心理現象）から出發し、更に、此の點から、人物の深奧な、錯綜した、最も祕められた亢奮に迄、突き進めてみたいと努力した。フロイド教授は、美術研究に於て同樣な方法がとれると云ふことを親しく私に注意して下さつた。イヴァン・レルモリエフ（Iwan Lermolieff, 1816—1891）といふペンネームで知られてゐる

美術研究家ヂオヴァニー・モレルリーは、多くの美術館に於いて古畫の作者が爾々の巨匠となつてゐるけれども、それは彼の見るところと完全にかけ離れてゐることを認めた。

彼は、一つの非常に鋭い方法を發見し、同時に從前の美術研究家たちの云ふことが間違つてゐること、並びに美術作品の實際の動機を證明することが出來たのである。從前の人々が「全體的印象」に依つて判斷したから往々思ひ違ひをし、フラ・セバスティアノ・デール・ピオムボーの作を研究家も大衆も、ラファエルの作だと思ひ込んだりするところを、彼は「特徴指摘法」から出發するのである。全體的印象では、その作家のものであるかどうかゞ決定出來ないといふことから、モレルリーにさう云ふ考へが起り、その代りに彼は繪畫の各部を微細に研究する方法をとつたのである。彼は、或る畫家の個人的な手法を題材選擇、着彩、描線から認識しようと努めないで、例へば指の爪、耳朶等を描く、人によつて違ふ遣り方から認識しようとしたのである。彼は指の癖とか、前腕や二の腕又は鼻翼などの藝術的な描き方を研究した。かうした、又それに類似した細部を、嚴密に吟味し比較することに依つて、彼は數々の繪畫に就いてその作者を斷定的に確認することに成功したのである。それほど有效な結果を示したモレルリーの方法もその根本原理は他から借りて來てゐるのであつた。つまり、細部を描く場合に、藝術家の最も特質的なものがあらはれると主張するのである。卽ち、畫家は大抵このやうな特殊な手法、いはゞ、腕先の描寫などを意識してやるとは考へられないのである。

むしろ、うしたことは、彼等が不知不識の裡に行ふものである。つまり「無意識的に」と我々は云ふのである。

註 モレルリーは彼の藝術觀の發生や發展を、彼自身、非常に興味ある筆致でかいてゐる。『イタリー繪畫に關する美術批評研究』F・A・ブロックハウス・ライプチッヒ（一八九〇）

それと同樣に、とかく見落され勝ちな、併し見る目あるものには歷々と何物かを見せてくれる細部の調査から、本書の研究法は出發し、そしてモレルリーの「特徴指示法」と同一の原理に基いてゐるのである。これが精神分析的研究の根本的見解であり、云ひ換へれば、精神生活もその表現も、よしんば如何に微細なものにもせよ、まさかと思はれるものにもせよ、殘りなく例外なく因果的に決定せられてゐると云ふことなのである。

かうした精神分析的研究が果してシュニツレルのやうな重要な詩人を、より深く理解するのに適してゐるとすれば、シュニツレルを唯藝術家をしてばかりでなく、人間の魂の高さと深さとを知る人として、尊敬してゐる我々の悦びは何人の悅びよりも遙に大であらう。」

念慮の全能

「殺人が行はれるのを考へる時には、短劍のきらめきが見えるやうでなければならない。」（曠野への道）

一見副的なもの、夢の顯在內容の些細な部分が、潛在せる夢の思想の發見に極めて重要な意味を持つといふのが、夢の解釋の一つの法則である。夢の當人にとつては大して重要とは思はれないかうした細部から、夢の解釋のつく事が屢々あるのである。かうした意味で、英國十八世紀の諷刺詩人スウィフトの所謂「馬鹿萬歲」が是認される。

夢と文學とは種々類似點の多いものである以上、文學作品の分析に當つても、挿話或は一寸した問題としてさり氣なく出てゐる細部が、聽者或は讀者が本筋との關係を殆ど氣にとめない細部が、却つて明瞭な光を全體に投ずるものだといふことが想像される。かうして、病體のレントゲン撮影に依つて醫師はこれまでは氣づかれなかつた苦痛發源の個所を注意するやうになるのである。

此處に、從來度々精神分析が凱歌を擧げた道が開拓されることになるのである。我々は、全體の精神分析的說明に使用する爲めに、瑣細な問題を吟味し比較檢討しようと思ふ。次に私の意圖する所を、一つの例を以て示さう。

イプセンの『人形の家』に於けるドクトル・ランクのエピソードは、同じ作者の『幽靈』の解釋に多大の寄與をなし得ることは事實である。『人形の家』ではこのテーマは本筋とは關係のない小さなエピソードとして取扱はれ、『幽靈』では主要な事件として扱はれてゐる。或る作品を生み出す心理的素材は、作品となる際に所謂「第二次仕上げ」を受けるものであることを、我々は承知してゐる。然しかうした仕上げは、作者が自分の精神的亢奮を唯一の葛藤に集約しようとの興味が大きければ大きい程、益々烈しくなるのである。戲曲中の主要事件は、何等かの小事件よりも、より大きな抑壓から由來するものであり、また其處に更に強烈な加工、轉位、變動が起る事を我々は認めないわけに行かない。また最初は唯簡單に取扱はれた事件や問題が、次の作では全體の主題となり、そこに精神的強調點が置かれると云ふこともあるのである。例へば『人形の家』のランクが『幽靈』に於けるオスワルド・アルヴィングに發展したやうに……。いはゞ、それは意識の周邊からその核心へと進むやうなものである。かうした目立たぬながらも典型的な問題から出發し、そこに如何なる無意識的性質の空想が隱されてゐるかを示すやうに試みて見よう。『寂しき道』には一人の醫者が登場するが、彼はグラーツ地方への就職を永い間待つてゐた。遂に彼はそのチャンスを獨特な理由（次の會話で明瞭となる）から放棄してしまふ。

フェリクス―へえ、グラーツの方へは他の人が聘ばれたんですつて？　けしからんぢやないですか。
ドクトル―けしからんけれども、併し他の人と云ふのはその位置に確實に向いてゐたのだが、登山旅行で首を挫いたんです。
フェリクス―では、愈々あなたにとつては絶好のチャンスぢやありませんか。あなたより他に誰が問題になりませう。
ドクトル・ロイマン―えゝ、今では私のチャンスは確に悪くはないでせう。でも私は寧ろ、それを斷念する氣になりました。
ウェクラート夫人―まあ、どうしてでせう？
ドクトル―その招聘を受ける氣がないのです。
ウェクラート夫人―まあ、あなたはそんなに御幣擔ぎ屋さんですの。
フェリクス―不見識だと云ふのですかね。
ドクトル―いや／＼、どちらでもありませんよ。けれど、他人の不幸のお蔭で何等かの利益を獲るのだと思ふと、私には、とても堪えられないですからねえ。それぢや私の半生も、にが／＼しいものになつてしまひますよ。ねえ、これでお解りになりましたらう。なにも、御幣を擔ぐわけでも、見識張つてゐるわけでもないんです。全く平凡な、小つぽけな虚榮心に過ぎんのですよ。

實際生活では、我々が假に或る地位を得ようと思つてゐる場合、かうしたやり方で斷念を理由づけることを、殆ど思ひつかないであらう。若し假に、我々と緣もゆかりもない競爭相手が死んで、椅子が我々のためにあいたとしても、我々は別に何とも思はないであらう。その性來のエゴイスムスを認める勇氣のある人々は、多かれ、少なかれ、大きな滿足さへも、容易には押しかくすことが出來ないであらう。從つて、此處で問題になつてゐるのは、或る特殊人の極端な氣弱さ、倫理的感情の極端な纖細さであらうか。然しかうした疑問の解答は、同じやうな問題を集積して、多くの材料を自由に處理出來るやうになる迄保留したいと思ふ。『曠野への道』に於けるゲオルグも、彼の上役が死んだ時、樂隊長の地位を得たのである。この小說中の一人物は主人公に向つてはつきりと次のやうに云つてゐる。「君とは何のゆかりもない、何の罪のない人が死んでしまつたので、君はまんまとその位置にありつけたのだ」と。『曠き國』の筋は、同じやうな問題と特殊な關係にある。その家の友人である若いコルザコフは、ゲニア夫人が彼の求愛を拒絕した爲めに、自殺をしてしまつた。對話中に、ゲニアは次のやうなことを物語つた。「夫の嘗ての友達で、ドクトル・ベルンハウプトといふ人が二三年前登山をした時に、夫の傍から墜落して、そのまゝ死んでしまひました」と。或る若い淑女は、フリードリヒ・ホーフライテルの友達運がよくなかつた事を話した。ドク

トル・ロイマンの場合と同じやうに、此處でも亦、登山の時の墜落に依る死が問題となつてゐる。コルザコーヴの自殺問題とドクトル・ベルンハウプトの墜落問題とは錯綜せられてゐるやうに見える。

これ等二問題の關聯は我等にはなほ不明な所があるが、この兩方の場合に競爭者フリードリヒ・ホフライテルの死が問題にされてゐる事を考へれば謎が解ける。同じ戯曲中のさつさと進む會話の個所が（別の關係の事であるが）其際我々の念頭に浮ぶ。詩人アルベルトゥス・ローンは次第に老い行く登山家と色魔アイグネルとに向つて云ふ。「しかし、變な氣持ちがするだらうな、自分が一番最初に登つた山の麓にへたばつて今ぢやもう登ることが出來ないといふのはね……これを物に譬へて言ふと……いや、こいつは止した方がよささうだ……。」アイグネルは幾分興奮して「いや、その話は止さない方がいゝぢやありませんか、ロオーンさん。」と答へる。此處では支配人の愛慾生活への暗示がなされ、そして詩人が、彼の話相手の性的不能（インポテンツ）を譬喩で言はうとしたことは疑の餘地はない。*

從つて、二つの問題（コルザコーヴの死とドクトル・ベルンハウプトの墜落）が、詩人の無意識裡に結合されてゐるものと思はれる。心理的に同一化せられてゐる。（主題の重複）。**

註* 登山が象徴になることは、精神分析者には周知のことである。それは無意識心理の全ゆる所産に於て見られる。フロイドは、登山が夢の中に現れるとそれは確實にコイトスだと指摘してゐる。民謠、傳說、創作文藝作品にはそれと同じ象徴化が見られる。同じ象徴は言語にも多くの實例がある。

註** ドクトル・マウエルの言葉が、コルザコフの死（及び、我々にはベルンハウプトの死もさうだと認められるのだが）の隱れた意味への暗示を傳へてゐる。曰く「コルザコーヴは謂はゞ人身御供に上げられたのだ、さういふ星の下に生れて來たのだ、わたしにはさう思はれてならない」と。つまり彼は、コルザコーヴの死によつて、ゲニアとホフライテルとの危機に臨んでゐる結婚の幸福が再び恢復すると考へたのである。

總てそれ等の主題が類似してゐるといふことを見逃せない。その間に共通してゐるものは、二人の間に存する神祕的に思はれる結合に見出される。さうした二人の中の一人は、他の一人の死に依つて實現する或る事を、激しく願望してゐるのである。我々は、そこに一つの事實上の關係や形而上的影響があると信ずる程、迷信的ではない。從つて、かゝる種々の關係の精神的根元は何か、心理的體驗の實體は何かと云ふ疑問が生ずるのである。我々はこの種の結合を或種の神經症患者、殊に恐迫神經症患者の分析に際して屢々發見するのである。錯雜した聯想が土臺となつて、一風變つた關係が作られる。かゝる聯想は、强

烈な道德的考慮と對立する祕かな願望に依つて驅り立てられるとフロイドは證明してゐる。從つて、我々は、ドクトル・ロイマンの場合、この人がグラーツの方で職を得たいといふ激しい願望を持つてゐた事、自分の競爭相手が道を開いてくれゝばよいがといふ考が彼の心に浮び上つた事を想像出來るのである。かうした考へは凝つて競爭者に對する死の願望となる。彼があとになつてその職を斷念した事は、一種の贖罪、道德的な反動形成である。他人の不幸のお蔭で何かを得たくないと云ふ虛榮は、して見れば、彼の敵愾心の抑壓と云ふ意味で、この斷念の理窟づけである。

この解釋は決して不充分とは思はれない。といふわけは、彼が支出してゐる本能感情量は、彼の覘つてゐる對象に就いて不釣合なほどであつたからである。さきに我々はロイマンの防禦を神經症患者の强迫行爲と關係づけて考へた事がある。神經症患者が自分の非難的感情を轉位させ得るといふこと、云ひかへれば、本來はその患者にとつて極めて重要な事柄とか人物に向けられた感情を、永い間には全くどうでもよい事柄、或は人物に移し得るといふことは、將に强迫神經症患者の持つ一つの特性である。シュニツレルは、ロイマンに同じやうな感情轉位があらはれた事を我々に示してゐる。心臟を患つてゐるザーラ氏は、醫師ロイマンに相談する。この藝術家ザーラ氏はロイマンの戀敵で、共にヨハンナ・ヴェーグラートを愛してゐたが、ザーラの方が勝利者である。ロイマンは、ヴェーグラート家の敷居を二度とまたぐまいと決心する。彼はフリクスと別れる。するとフェリクスは云ふ。「ロイマン君、君が何故もう此家へ來ないのか……わたしにはようく判つてゐるよ。また別の人が頸を挫いたわけだからねえ……。」フェリクスはこの言葉で、ロイマンとザーラとの關係を引合に出して、我々の分析の出發點となつてゐる例のエピソートを暗示してゐるのだ。我々が、ロイマンのあの變な行動の背後に見出し得る非難感情を、徹底的に究明することによつて、この解釋は深められる。地位の拒否と、ロイマンがヴェーグラトから別れたといふ事實と、これ等二つの中に「本末轉倒」(轉位)が問題になつてゐると思ふ。ロイマンは彼の患者であるザーラ氏が死ねばよいと思つた。その理由はザーラが、ヨハンナとの戀愛の競爭者であつたからである。戀敵を殺したい慾望は醫者であるロイマンにとつては、其他の同じ事情の下に於ける場合よりも、尤なことであつた。この考へが、心理生活の檢閱法廷で直に抑壓された事は勿論であつた。で、ザーラ氏が近く死ぬといふ見込みによつて、彼が自分の秘かな願望の實現が近づいたと知つた時に起つたロイマンの諦めは、つまり敵意を持つた興奮の反動であつたことが分るのである。醫師が戀敵に對してとつた全ゆる態度は、後に職業に於ける競爭者への態度となつて再び現れてゐる。同じ心理機制に依つてロイマンはかう云ふ決心をするに至つたのである。

編輯者附記——第一章の中頃で中斷しなければならなくなつて、譯者にも讀者にも申譯ないが、編輯の都合上已むを得ず、あしからず。

リットン・ストレイチー（アンドレ・モーロア）（承前）

岩倉具榮譯

三、歴史家の特質

併しこの點に關する吾々の關心事は、この歴史といふ問題についてヴァレリーやストレイチーがフステル・ド・クーランジュに勝つか負けるかを確かめることではなくて、ストレイチーが何者であつたかを見出すことである。それ故、吾々は彼が數へた歴史家の三つの特質をとつて、どの程度に彼がそれを具へてゐたかを檢べて見よう。

第一、種々な事實を吸收する傾向である。併しそれはどのやうな事實であらうか。ストレイチーは事實を無數に蒐積する。彼は細々したことが好きである。勿論、時に彼は一時期の概觀、廣濶な描寫を行ふが、併し何よりも彼は追想記のよき讀者でその中で細かい眞實の部分々々をあさるのである。「歴史の女神クリオは最も光輝ある女神の一人だ。併し、誰でも知つてゐるやうに、彼女は（その姉妹、歌の女神メルポメーネの樣に）悲むべき缺點を持つてゐる。彼女は、華美に過ぎる方である。半長靴を穿き長衣を纏ひ、勿體ぶつてゐるので、時には全く鼻持がならないのである。併し幸にも運命の神たちはその缺點を補ふものを與へてゐる。彼女が玉步を運ばせ給ふ時に、猿の樣な、小鬼の樣な何かの動物が跟いて步き、クスクス笑つたり長い鼻を引張つたりしながら周りをかけ廻つて、時には彼女の步みを邪魔したり、衣物の端を一方に引寄せて、ひどく無樣に下着を見せたりする。その樣に運命の神々は決めてゐるのである。彼等は過去の日記書き手、手紙書き手、雜文家又はジャーナリストで、ペピシーズやホレース・ウォールポールやサン・シモンの徒で、彼等の務めは大事件の裏にある小事を吾々に示し、かくて歴史そのものがかつては現實の生活であつたといふことを吾々に知らせるにある。」

傳記又は歴史物を書くに當つて、澤山の追想記や手紙の生々しい詳細を追求して行く程愉快なことはない。ある時には吾々

が數百頁を讀んでも一般的な觀念以外には何も發見出來ず、それも疑はしいこともある。すると突然一文章轉ずると生面が展開し、忠實な讀者はそれを摑む。例へば、ドルセイが「ハ！ハ！」と高らかに笑つて友達の手をぎゆつと握りしめたことなどを知るのは愉快だ。ストレイチーはかう云ふ藝當が上手である。小さいビクトリア姫が、子供の時分、家庭教師から銀紙や造花で厚紙の箱の飾方を敎はつたことや、アルバート公がドイツを離れる前に、ウェーベルの作『自由射手』が公國のオーケストラで演ぜられるのをものかげに聞き、また死の床で「愛する乙女、よきをみな」といふ言葉を繰返したことを、彼は知つてゐる。ウィンザーの一夕、圓卓に集ふ團欒、女王の銅版畫アルバム、それからプリンス・コンソートが三人の侍從と何時までも將碁をやられる有樣などを彼はまざ／＼と見せてくれる。歷史と云ふものは大規模な計畫によつて成り立つてゐるといふよりもむしろ、以上のやうな小事によつて成り立つてゐると、彼は見做してゐる。いつぞや彼は私に云つたことがある。「國際會議とは、單に多數の人が各々その固定した性格、習慣、神經痛、よい消化、惡い消化を持ち寄つたものに過ぎない。會議の歷史が書かれるとしたら、それは大きな對抗せる興味の分析のみではなく、之等の氣質のお互ひに對する相互の反應の描寫であるだらう」と。ストレイチーは少しも歷史的事實を輕蔑しなかつたが、その事實を細かい所まで追求した。

一寸した事に象徵的な意味を見出すことは彼の最も得意とするところであつた。若し彼が英國の政治家大ピットの子孫ヘスター・スタンホープ夫人について語るとすれば、彼はまづそのピット型の鼻を摑まへる。「ピット型の鼻は數奇な運命を經て來た。それは三代を通じて生々流轉してゐる。老チャタム卿の恐ろしいかぎ鼻の曲線の下に英帝國が生れ、それに續いて出て來たのは御し難き高慢の硬張つた象徵である小ウィリアム・ピットの物すごい上向の鼻であつた。ヘスター・スタンホープ夫人に到つて最後の場面が來た。未だ上向き加減の鼻には流石に男らしさはなくなつてゐる。伯父と祖父とにあつた硬い骨は消えて了つた。ヘスター夫人の鼻は野望の鼻、狂信的な誇りを現す鼻、地上を輕蔑し、何か永遠に偏奇した天に向つて突出してゐる樣に思はせる鼻であつた。實際それは全く空中の鼻ともいふべきであつた」この樣にしてヘスター・スタンホープ夫人についての評論が始まる。そして、夫人の死に臨んで彼はこの鼻の問題に戻つて（それがいつもの彼のやり方なのだが）次のやうに云ふ、「最後は一八三九年六月に來た。彼女の召使達はすぐに、家の中の動かせる凡ゆるものをかゝへた。併しヘスター夫人はもう氣にもとめなかつた。彼女は寢床の中で仰向けに橫はつてゐた——不得要領に、大らかに、不自然に、鼻を空に向けて。」

かう書くと歷史が殆ど象徵派の詩の樣に見える。それは魅力的ではあるが、この魅力を出すために、基本となる眞實が多分

犧牲にされてゐると云はなければなるまい。この漫畫は眞實を暗示してゐるであらうし、又眞實そのもの以上に眞實でさへあるかも知れないが、併し眞實ではない。さうだ、クリオが玉歩を運ばせ給ふ時に側でゲラ〳〵笑ひながら善良な女神の上衣を引張り上げる小鬼共は、確かに愛嬌にはなる。最良の手紙を書く人と追想記を書く人とは吾々に鋭い美的な樂しみを與へる。併しフステル・ド・クーランジュは、この樣にして再建されてゐる過去の正確さを信用しないからとて悪いのではない。何故なら追想記を書く人は偏見を持つてゐたらうし、小冊子を書く人は自分が嘘だと知つてゐる逸話を書いたらうし、手紙を書く人は根據のないゴシップを蒔き散らしたらうからである。實際、吾々が彼に從つて吟味し得たある細部に於ては、ストレイチーは歷史家といふよりもむしろ偉大な藝術家である。彼のゴルドン將軍の肖像は全く公平ではない。彼のディスレーリーは實物よりも滑稽で、深味がない。彼のビクトリア女皇は公開されてゐる書簡によつて吾々に示されてゐるほど、その晩年に於ては勇猛で頭腦明晰の君主ではない。して見ると、事實の蒐集者たるストレイチーは、その讀書の範圍の廣い事と探究の良心的なことに於ては驚くべきものであるが、とかく嘲弄する傾向があることと、警句を喜び過ぎることのために、單純と正確とを犧牲にしてまでもたゞ面白可笑しく書くことが時々あると云へるのである。

併し乍ら、彼の曝露藝術を振り返つて見れば、その直截さと雄辯排斥とに此の賞讃すべき點の存することを見出す。「雄辯を捕へてその頸を絞めろ」とはストレイチーが恐らく云はんと欲する言葉であらう。彼は明示を、暗示を好む。抽象的な主張をしない點で、スタンダールを彼は屢々賞めてゐる。「多分人の知性に對する最良の試みは、概括する能力であらう。ベール(Beyle)はこのことを知つてゐた。そして彼の小説の中には今では湮滅して了つた莫大な元の物語の驚くべき有力なる概括に外ならぬと思はれる部分がところ〴〵に見られる。」彼はマコーリーの修辭と英國の凡ゆる古典的歷史家とを容赦しない。「シセロ時代以降、雄辯の大なる不利益はそのために人々が拘束せられることである。どんなに知りきつてゐることでも、又どんなに自明なことでも、何でもかでも聞いてゐなければならなくなる。この樣な著作家に對してはスタンダールの藥用をすゝめねばならない。併し乍ら、マコーリーはこの處方では利きさうもない。彼には私も匙を投げる。「バルムの僧院」の一讀くらゐではなかなか强壯劑的影響は覺付なかつたらう。ショームベルグがウェストミンスター寺院に葬られたといふことを云はうとして彼は「この有名な戰士は、數代の王公、英雄、及詩人の遺骸に依つて聖化せられたこの尊き僧院に横たへられた」と云はないでゐられなかつた。何とも仕樣がないのだ。そしてショームベルグはウェストミンスター寺院に全然葬られないで、ダブリンに葬られるに至つた偶然の故障は、その文體の平板さと比較すると、少しも重要ではないのである。」

ストレイチーは、雄辯に次いで、道徳が歴史に干渉することを嫌つてゐる。「恐らく一番人を怒らせるものはこの様な心的狀態の平板さであらう。確かに、哀れなルイ十五世はチェルシアからの説教なしに死ぬことを許されてもよからうと、人々は考へる。併し、さうは行かないのだ！　機會は失はれてはならない。この説教者は長い息をして、さて徐ろに道徳や王冠や自負の空しさなどについて分りきつたことをくだ〳〵と力を込めて述べ立てて行く。彼の……クロムヱルに對する考へには想像的な偉大さがある。例へば、その表現には勇猛さと情熱とがある。併しこのクロムヱルをカーライル式の道徳的英雄に見立てようとする過度の慾望によつて凡ては打壞され、從つて、結局、文章は濁り、構成は亂れ、描寫は不確かとなつてゐる。」

彼自身はこの様な非難からは全く免かれてゐる。彼の純一な文調は氣持がよくて、眞に微妙な融合を作る完全な親密さに到達してゐる。ビクトリア女王の幼年時代を描寫する彼の調子を注意して御覽なさい。「溫い打てば響く心で王女は親しいレーツェンを愛した。そして又なつかしいフェオドラとヴィクトアル、それからスペース夫人を愛した。母君を愛した。そして勿論母君の方からも愛した。それは王女の義務であつた。而も——何故だか分らなかつたが——王女はクレールモントブ伯父君レオポルドと一緒にゐる時にはいつも一層幸福であつた。」

この親しみのある水々しい書方、變化と休止に從つて、思想にピッタリ當てはまる文體は、現代最良の多くのイギリス作家の多數の特徴となつてゐる。この點で彼等の長であつたストレイチー自身は、多分それを次の様なフランス作家から受けついだのであらう。卽ちモンテーヌとか、スタンダールの『日記』とか、それからもつと何度も讀み返されるべきすぐれた作家、ジュール・ルメートルの『同時代の人々』等である。

マルセル・プルーストは、讀者の心を現實に突込ませ得るものは唯譬喩のみだから、想像がなければ文體の偉大さがあり得ないと宣言した。だからストレイチーもその歴史的物語の賦彩を強めるに大膽な驚くべき空想を以てするに躊躇しないのだ。ニューマンの悲劇的經歷を傳へて彼はかう云つてゐる。「彼は自分で金をかき集めたり、學生の雜誌のために論文を書いてやつたり、醫學實驗所の計畫を立てたりせずにゐられなかつた。彼は風變りな聖職者や野蠻な地主達と一緒にアイルランドの僻陬の地方を何ヶ月も旅行して過さねばならなかつた。彼は大八車につながれた駿馬の樣なものであつた。」と。又、マニングとニューマンとの會合を記して曰く、「それは鷲と鳩との會合であつた。まづ高く翔け上り、とびかゝつて、それからす早い嘴と强靱な爪とであの仕事をした。」と。

彼はナイチンゲール孃がシドニー・ハーバートに對して如何に獰猛であつたかを次のやうに見てゐる。「孃はハーバートを

つかまへ、教へ、形作り、吸ひとり、徹底的に支配し盡した。彼は抵抗しなかつた――抵抗する氣もなかつた。彼の生來の性向は彼女と同様なものであつた。唯あの壓倒的な個性は孃自身の恐ろしい足取と容赦のない足並とで彼を前方に押しやつたのだ。押しやつたとは――何處へ？ あゝ！ 何だつて彼は一體ナイチンゲール孃と知合つたものだらう。バンミュア卿が野牛であつたとすれば、シドニー・ハーバートは疑ひもなく牡鹿――森をかけ廻る可愛いゝ、忠實な動物であつた。併しその森は危險な場所であつた。何だか猫の様な、強い何物かによつて急に魅せられる、ギョロ〳〵した眼が幻に見える。うか〳〵立停つたりしてゐると、忽ちふるへる腰に牝虎の爪が襲ひかゝつてくる。それから――」又、彼はエリザベス女王を見て云ふ。「恐ろしい老鷄が、イギリス國民を羽の下に抱きしめて、靜かに坐つてゐた。すると英國民の成長する精力は彼女の羽の下ですす早く成熟と統一とに到達した。彼女は靜かに坐つてゐた。併し羽毛は凡て逆立つてゐた。彼女に恐ろしくも潑剌としてゐた」

そして、歴史を藝術と詩の作品たらしめようとしてストレイチーは、今度もやはりプルーストの様に、殆ど音樂的とも云ふべき效果を目指して努める。種々の主題の表出が呼出され混合せられ、導入された幻像の表出が加工せられ、適當な瞬間に反復せられる。この一番有名な例はヴィクトーリア女王傳の最後の章である。女皇が死の床に横はつてゐる時、ビーコンスフィールド卿の好きな櫻草の咲き滿ちたオスボーンの春の森へ――パアマーストン卿の妙な着物と高尚な態度、又は綠のランプの下のアルバート親王の顔、バルモラル離宮のアルバート親王の最初の牡鹿、銀綠色の正服を着たアルバート親王、又は戸口を通つて來る男爵、みやま鳥が楡の木で鳴くのを聞きつゝ、ウィンゾル宮で夢みるM卿、曉に跪まづくカンタベリーの大僧正、老王の七面鳥の叫び聲、クラレモントのレオポルド伯父君のやさしい聲、手袋をはめたレーツエン、又は彼女の方へ掃いて來る母君の羽箒、鼈甲細工の箱に入つた父君の大きな古いチン〳〵鳴る懷中時計、又は黄色い毛布、小枝模様モスリンの裾飾、ケンジントンの木や草へと女王の思ひ出ははせる。」

これは歴史であらうか。臨終の女王の心をこれ等のものが横ぎつて行つたと云ふことは、何の文書で確證出來るかとフステル・ド・クーランジュなら云ふであらうが、それに對しては何とも答へは出來ない。これは歴史とは云へないことは認めなければならない。併しそれは確かに動いてゐて美しいものである。（未完）

新井白石の性格

大槻憲二

德川家宣將軍に事へて、事實上當時天下の政治を料理してゐた新井白石が、その青年時代、貧困の極にあつて、當代の巨商河村瑞賢の孫女の婿になつてはと勸められてすげなく拒絶した話は有名で、これは彼が利慾に動かされぬ淸廉な性格の現れだと普通に解せられてゐるに對して、實はさうでなく、彼の野心がもつと大きく、町人の家の婿になつては武士階級の身分を放棄せねばならず、さうなれば彼の大野心を當時社會に實現することが出來なかつたゝめだと云ふ解釋を、私は拙著『新しき立身道』（一〇頁）に述べておいたことを讀者諸氏は記憶してゐて下さるであらう。

それ故に、白石の思想は始めから階級的であり、その性格はいゝ意味に於いても惡い意味に於いても始めから俗であつたと云はゞ云へるのに、近頃、山路愛山の『新井白石』傳を更めて讀み直して見たら白石が晩年になつてその思想は階級的となり、性格は俗的になつたと批難がましく論じてゐるのを發見し、經濟史に秀でゝゐたと云はれてゐる愛山にして分析を知らなかつたゞけに、やはり彼自身のコムプレクスや願望で史上人物を觀察し、勝手な批評を下してゐると思つてをかしくなつたので、こゝでその點を少し闡明して見る氣になつた。

白石には二人の娘があり、その長女の嫁入りに就いて父白石は相當の苦心をした。何となれば、當時、白石は將軍吉宗から毛嫌ひせられ官位を追はれ、世人は白石の家に出入りすることにさへ將軍の顏色を恐れねばならないやうな事情にあつたからだ。その娘の縁談に就いて、友人室鳩巣に與へた書翰の中に彼は次のやうに述べてゐる。「此方より堪忍頃と存候は或はむこ殿は同心にても親類に當時御役に仕られ候人まじり候へば某事を承り舌をふるいていやがられ候。……すこしも祿の重く候人にもと存じ候は今は身のむかしを忘れ候ての事にはなく候　男子は其才德によりいかにも身を起す事もあるべき事に候、女子は夫次第のものに候處、近代のならはし、一色の御役に撰ばれ候もとかく一應は祿の重きかたを撰ばれ候やうになり來り、たとひ才覺行跡よく候ても小身なるは御加增入りとて、埋れ居られ候人々多き事に候」云々と。

これに對して愛山は、「これ程非論理的の言譯はなし。若し男子は才德に因りて身を起すことあるべくんば女を與ふるものは先づ女婿の人物に就きて商量すべきに非ずや。若し唯高祿の者は善き役になり易きが故に女を嫁すべしと云はゞ是れ貴ぶ所人物に非ずして榮官に在るに非ずや。……河村瑞軒の三千金を辭せし意氣軒昂なりし當年の青年も今は純乎たる俗人となり果たり」と嘆じ「彼の思想は階級的になれり」と難じてゐる。勿論白石が老境に入つて氣が弱くなり、青年時代ほどの覇氣がなくなつてゐると云ふことは確に幾分事實であらう。併し白石が晩年になつて始めて俗人となり階級的になつたのではなかつたことは、『新しき立身道』を讀まれた方々には今更めて說明するまでもなからう。併し私は、よしんば彼の思想が階級的であらうが、彼の性格が俗人的であらうが、何もさう批難がましく云ふ必要はないと思ふのである。愛山はなるほど民間の一學徒とし

て始終淸貧に甘んじて高雅な生活を送つた人ではあつたらうが、さうしてまた平民的な思想に忠實であつたことは認めるが、白石と愛山とでは時代も能力も環境も全然違つてゐると云ふことを考へなければ、歷史家として、あまりに主觀的に過ぎるとの批難を以て逆襲せられることは已むを得ない。實際、白石のやうに身體强健、神經强靱、頭腦明晰、才覺豐富な人が、世俗の活動に野心を延ばして行かうとすることはあまりにも當然である。現に愛山自身が、白石の歷史學の法則を抽出してゐる第四條に「希望は力量に副ふものなり」と云ふのがある。愛山これを註釋して「白石は宇宙の最大哲理なる事業は力量の變化たる事を認めて之れを史論に用ゐたり」と述べてゐる。果してさうならば愛山の事業と力量とを以て白石の事業と力量とを評量することは非科學的であらう。とは云へ、私は愛山の事業を決して輕蔑してゐるものではなく、寧ろ相當の敬意を拂つてゐる。白石の階級的なのは白石だけの責任でなく封建時代そのものゝ責任である。當代に於いて階級を超越した物の考へ方をしたら寧ろ非常識の譏りを免れない。

娘の婿の祿高を氣にしたことは彼の俗物化した所以の如く愛山は云ふが、これも一面的な考へ方である。白石は自分の事には自信があつたから區々たる小利に拘泥しなかつたのであらうが、娘も婿も自分のやうに偉大であるとは思つてゐないのであるから、小人物には小人物並みの事しか期待出來ないわけであるから從つて祿高や役柄まで心配してやるやうになつたので、白石はどうせ娘や婿の世話になるつもりなどは毛頭ないのであらうから、彼等の祿高や役柄を心配してやつたからとて、それで俗物呼ばゝりをされる事は白石のために誠に氣の毒と申さねばなるまい。

私は日本人の中では新井白石と佐久間象山と二宮尊德とを最も尊敬するものである。白石のやうに知力の鋭い人は日本の史上には一寸類例は稀であるやうに思ふ。日本人は感覺は鋭いが決して知力の優れた民族ではないと思つてゐるが、その中で白石の歷史科學は殆ど分析的で恐らく日本學として最も傑作の一つと云つてよからうと考へ、また彼のやうに、健全な性格者の存在は我々同胞として誠に心强いことに思つて、日本人の性格を研究する本號のために特に本文を認めて見た次第である。讀者よ、この文の分析學に直接關係の少いことを許し給へ。（完）

神經症の意味

高水力太郎

神經病の治療の第一步は、その病氣が患者自身の手製のものであることを氣付くことである。云ひ換へると、病氣になつて何か自分に都合のいゝ點のあることに氣付くことである。病氣は勿論いろ〳〵苦しいことの伴ふものであり、苦しければこそ病氣であるのだが、併し病氣の苦痛よりもつと大きな苦痛が病氣と云ふ比較的に小さな苦痛を甘受することに依つて避けられるならばそれは仕方のないことだからとにかく病氣に逃げ込んでおくと云ふ理窟は成り立つ譯で、さう云ふ意味で自分は病氣になつてゐるかも知れないと云ふことに氣を配つて見ることである。

こんな事をいふと世の多くの神經病者達はいきり立つて來ることだらうと思ふ。人を馬鹿にするにも程がある。誰がそんなにすき好んで病氣になどなるものか、病氣よりも大きな苦痛とは何か。そんな苦痛は考へて見ようがない。自分には病氣とは大きな苦痛であると。いや、さういふ患者諸氏の憤激は實に御尤である。何となれば、患者諸君は病氣の苦痛だけを意識的に知つてゐて、それ以外の苦痛といふものはたゞ無意識的に知つてゐるだけであるからだ。つまり、彼の病氣は彼自身が無意識の裡に作つてゐるものであるから、それを無意識面から私が批評しても彼には全く思ひもよらぬ話であるからだ。ところで、無意識的に知つてゐるなどと云ふのは言葉の矛盾で、無意識的に知つてゐるなら知らないと同じだと、諸君は再びいきりたつであらう。左樣、知らないと同じであるには相違ないが、併し知らないから存在しないと云ふ理窟にはならないのである。知らなくとも存在するものは存在してゐるのである。で、私は諸君の病氣は諸君自身が知らない裡に自分で作つたものだといふことを悟らせるために、まづ骨を折らねばならぬ段取となつた。何となれば、さう云ふ悟りに達することが治病の第一段階であるからだ。

無意識のうちに自分で自分を病氣にすると云ふやうなことは、複雑な病氣になるとなかなか說明がむつかしいから、まづ極めて簡單な實例から說いて行くと分りが早いであらう。

私の知人に或る中老の婦人があつた。彼女の夫は職業の行き詰りのために氣を腐ら てか 氣になつて了つた。息子や娘は相當成人してそれ〴〵月給取りになつてゐるのだが自分達の生活だけがせい〴〵でまだ親の生活を助けるほどの力はない。長い間、夫人は家の中の暮しに追はれて來たので商賣の事や金錢のことには全く何の力もなく知識もなかつた。併し夫が病臥してしまつた今となつては、一家の全責任はとかく彼女の双肩の上に掛つて來るやうになり勝ちであつたことは已むを得ない次第であつた。ところが、彼女は何か一家中の重大問題——殊に金錢にからんだやうな問題——が起きるとその度に病氣になつて寢込んでしまふのが常であつた。それ故に、しまひには息子や娘は、何か問題が起きても母には話さないやうになつてしまつた。この話を聞いて諸君はどう思はれるか。夫人が病氣になつて寢込む原因が肉體的なものでなく、心理的なものであることは承認せられるであらう。よしんばその際如何に彼女の病氣に肉體的症候——腹痛とか頭痛とか惡寒とか——が伴つてゐようとも……。次にその心理的病氣の原因が彼女の聞き度くない話に關係があるとすると、その話を聞くのが苦痛である爲めに、その苦痛を回避するためには、その苦痛よりも小さい苦痛であるところの病氣の方を選ぶやうになつたのだといふことは何人も容易に理解出來るであらう。併し、かう云ふ選擇は彼女が意識的に行つてゐるのかといふと、決してさうではなく、全く無意識的にやつてゐるのだと云ふことも亦明らかである。このやうに、人間は無意識の裡に自分で自分を病氣にが出來るものだといふことを、極めて單純な實例に就いて見て承認することが來るやうになつたならば、諸君はまた諸君の病氣が、よしんばこの老婆の場合程單純な機制によるものではないにせよ同じく自分で拵えてゐるものであるかも知れないと云ふことを、少しは承認して見る氣になられるであらうと思ふ。

ところで、それでは、この老婆の病氣を癒してやるためには、彼女の病氣が實は彼女自身で勝手に無意識に作つてゐるものであると告げてやつたらよいかと云ふに決してさうではないのである。もし彼

女に向つて「あなたは卑怯だ、病氣へ逃込んでゐる、自分の責任を回避して、これをまだ若くて無力な息子や娘におしつけるために、さうして病氣になつて一家の責任を遁れてゐる夫に復讐するために、巧みに病氣へと逃避してゐるのだ」などゝ云つて聞かせたならば、彼女は狂氣のやうにいきりたつて、翌朝は首をくゝつて死んで了つてゐると云ふやうなことにならぬとは限らぬ。いや屹度さうなるであらう。何となれば、彼女としては、さう云はれて攻め立てられたら、死の道へ逃げ出すよりは外に逃げる道はないからである。彼女が現實の樣々な不安を目前にしてゐながら、とにかく生存に堪えてゐられるのは、病氣へ逃げ込むと云ふ苦しいながら確實な道が殘されてゐるからである。もしこの道が封ぜられたら、愈々壇の浦である。死の海に飛び込むより外はなくなる。だから神經的な病氣は病人にとつて必要なのである。苦しい苦しいと云ひながら本氣になつて癒らうとしないのはそのためである。癒つてしまつたなら、又別の苦痛に直面しなければならず、その方の苦痛は病氣の苦痛よりも一層大きい苦痛であることがよくわかつてゐるからである。そこで、治療に對する「抵抗」と云ふものが生ずる。で、この「抵抗」がもし取去られ、醫師の導くまゝに跟いて來るやうになつたならば、病氣は既に半ば直つたのも同然であるが、「抵抗」はさうなか〳〵簡單にはとれないものであることは何人にも容易に想像出來やう。

右の老婆の病氣を癒すとすれば、諸君はどう云ふ方法で進むのがよいと思はれるか。いきなり彼女の圖星を指して、無意識を意識面に引張り出すのは亂暴であり、デリカシイに乏し過ぎると云ふことは、既に述べた通りである。で、まづ彼女の病氣の最大の原因たる不安の生じた事情を研究してみることから始め、なければならない。その不安は生活の不安である。生活の不安は夫の病氣から生じた。併し、もし彼女自身、又は息子や娘が有力であつて生活を平氣で支持して行けるやうであるならば、彼女に於いて不安の起きる必要はないのである。從つて、病氣になる必要もないのである。それ故に、息子が有力になるか、自分に經濟能力が出來るか、或は何處からか遺産でも轉り込むかすれば、恐らくこの老婆の場合のやうな單純な神經病はケロリと癒つてしまふことであらう。併しさう云ふことは醫療ではなく金の力である。けれども、地獄の沙汰さへ金次第と云はれてゐるのだから神經の病氣が金で癒ることがあつても敢て驚くには當らぬ。併し、金さへあれば一切の病氣が癒るとは限らないことは、金が無くなれば一切の人が病氣になると限らぬのと同じである。現に右の老婆の場合でも、戶主の病臥のために苦しい立場におかれたことにかけて、老婆も息子も娘も同じであるが、ひとり老婆だけが病氣になつたのは、彼女の神經がはじめから病氣になり易い傾向を帶びてゐたゝめであるからだと考へなければ理窟が通らぬわけになつて來る。

「病氣になり易い傾向」と右に云つたが、その「傾向」とは單に「惡い素質」と云ふ風に常識的にばかり考へてはならないのである。勿論、さう云ふ常識的な考へ方が悉く誤つてゐると云ふのではないけれども、併し常識的な考へ方はたゞ表面的な、一方的な考へ方に過ぎなくて、また別の深い面からの考へ方もあると云ふことを知らなければならない。何となれば、現にどのやうな傾向にもせよ、惡いだけの傾向と云ふものはあるものではなく、同じ傾向が或る場合、ある限度を越え、或る性質の有無によつて善くもなり、惡くもなるのだからである。この老婆が不安や苦痛を回避する傾向とても一概に惡いとばかりは云へない。もし彼女が不安や苦痛を避ける道を知らず、無暗に

自動車の前を驅け拔けるスリルを喜んだり、自分の能力や知識を知らずに株に手を出して失敗したりするやうであつたら、一層の困りものであらう。彼女が一つの不安（生活の苦痛）を避けて、別の不安（病氣）を選んだことは 病氣になることに一種の無意識的な快樂が潜んでゐるからであることを知らなければならない。人間のする一切のことには、表面如何に苦痛ばかりのやうに見ても、その裏には常に必ず無意識の快樂が隱されてゐるものだ。登山 相撲、拳鬪、勉强、努力、旅行など、凡そ人間のなす一切は、苦痛と快樂とが相隨伴してゐるものであることが分る。病氣も亦同樣であつて、そこに根深い無意識の色慾的快樂が伴ひ、殊にヒステリー性の病氣に於いて一層甚だしいと云ふことを我々は、精神分析治療に從事して見て確信するに至つてゐるのである。現に身體頑健で叩き殺さうとしても死にさうにもないやうな女はさつぱり色氣が無いが、なよなよとして風にも堪え得ぬやうな女は如何にも色つぽい。芝居の『太閤記』十段目で、娘初菊が許婚の夫十次郎の甲を運んで來るところで、重くて下げられないから、長い振袖の上に載せて引きづつて來ると云ふ仕草をする型があつて、それは如何にも色つぽいと評せられてゐるが、もしあの時、初菊が甲を片手でブラノ＼と下げて來たらどうか。これは芝居だが、現實に於いてもさうで、變態的に色つぽくありたがる人間 殊に女は如何にも弱々しさうに振舞ふ。またそれが深く昂ずると無意識にだが實際病氣にもなつてしまふことがあるのである。

神經病は右の老婆の場合のやうに簡單なものでなく、もつと／＼複雜で深刻な場合でも 何らかの意味で病氣が逃込み場所になつてをり苦痛ではあるが、また他面快樂にもなつてゐると云ふ點では變りのないものであるが。それが複雜であり深刻であればある程、自分の無意識を開發し、意識化して、病氣を放棄して健康に復歸し來ることに「抵抗」は頑强となるのであるが 分析者の助力を仰いで努めるならば、遂になし遂げ得ぬといふことはないのである。（完）

時評

日本人の奴隷根性

大槻憲二

飯本信之とか云ふ東京女高師教授が「蘭印問題と獨逸の回答」と題して六月三日東朝「學界餘滴」欄に書いてゐたが、近來この一文くらゐ私にとつて不快な感じを與へたものはなかつた。近頃、日本の全般を風靡してゐるらしく思はれる對獨（同時に對××）媚態的感情を、端的に代辯してゐるものであると思へたからだ。

氏は政治地理學又は地政學の專門家であるさうだが、その見地からすると「蘭領東印度問題に關するドイツの友好的且つ示唆に富む回答は一般に好感を以て迎へられたが、……當然の歸結であつたと思へる。卽ち、地政學は他の條件を論外とすれば、諸强國間の同盟政策は隣國と隣國との同盟が最も永續性を持つこと、國土の團塊的形態をとることは國防的に有利なること、更に自給自足上不足の食糧並びに食糧源の獲得は距離の近い程有利であること等を敎へてゐる。」（圏點は大槻附之）さうであるが、そんなことは別に地政學とやらを待たなくとも常識で分ることではないか。

「墺國の併合を始め、隣接諸地方の占有に徵しても明かな如く、國家の政治的行動を著しく地政學的原則に準據せる今日のドイツとしては、遠隔の蘭印に關する彼の處置は容易に首肯し得られる所であらう。」

墺國やチェクやポーランドの併合は、あだかも地政學的原則だけで敢行せられ

アブフウブ

ABHUB

他の學問がアブフウブ（屑）として棄てたものゝ中から、分析は眞理の黄金を探し出す。

花と女

不老泉院主

フランスの文學批評家テエヌの文學研究法は文藝作品を植物のやうに見なして、地理的環境の影響をそこに見ようとするものであるが、それがもし、理論上可能とすれば同じことはまたその作者たる人間にも移して考へられなければならない。

もしさうならば、日本の植物と日本の人間とはその性格に於いて一致するものがなければならない筈だ。さう云へば、日本の植物殊に花と日本人の性格とは非常に共通點が多いやうに思へる。日本の女の子を「大和撫子」と云ふが、純粹の日本の撫子の花は可憐でよ

たかの如き口吻である。それではドイツが以前に蘭印の隣りに南洋群島（今わが領土となつてゐる）を保有してゐたり、第二次世界大戰勃發の直前に連りに舊植民地反還要求を唱へたりしてゐたのは、地政學を知らなかつたせいか、或は一時的に忘れてゐたせいによるとでも云ふのであらうか。かう云ふ頭腦の所有者が日本の知識階級の中でも優秀な部類に屬すると云ふのだから、全く以て恐れ入つたる新興國だ。なほ氏は續けてかう論ずる。

「殊にヒトラーの懷劍と稱される副總統ヘスは、地政學の最高權威者で、日本研究者として又大の親日家として知られてゐるカル・ハウスホーフェル教授の高弟であることを惟ふ時、思ひ半ばに過ぎるものがある」と。

つまりドイツは、地政學的原理と「親日的」、「友好的」感情に基いて蘭印を日本に下しおかれようとして、極めて「示唆に富む回答」を與へてゐるのだから、日本は感謝を以て頂戴しなければ罰が中ると云はむばかりの口吻である。

地政學の原理などは怪しげなものであることは、既に右に論證した。で、次にドイツは果してそれほど「友好的」、「親日的」動機から蘭印を日本に「占有」せしめんとしてゐると解することが出來るのであらうかゞ問題になる。目下のドイツがイタリーや日本に對して表面上友好的でないとは私も云はないが、國際間の關係に於いて友好だの親交だのと云ふものは、自國の利害の上に咲いた一時的のあだ花に過ぎないと云ふことを、今なほ考へようともしない飯本氏のやうな人が知識階級の間に存在することの奇蹟は、一應問題にしておく價値があると思ふ。日支事變の間、今次歐洲大戰勃發直前まで、防共協定の握手の下をくゞつて、英佛とあだかも競争するかの如く、多くの援助を蔣介石に與へてゐたのは何國であつたかを氏は知らないのであらうか。

ドイツが友好的表情を作つて、自分の腹の痛まない好餌スイツルでイタリーを

く纏つた美があつて、色彩が鮮明で、濃緑の葉との調和が、如何にも日本の古典的な少女の感じである。カーネーションは撫子に相當する西洋の花だが、カーネーションは如何にも西洋的である。櫻もアヤメもさつきも西洋にそれ〴〵それに相當するものがあるが、何れもみな西洋のものは西洋くさく、日本のものは日本らしく、その特徴を云へば、西洋のものは複雜で濃厚で妖艶であるが、日本の花は淡々としてゐて單純で可憐で清楚である。そのまゝ西洋の女との相違である。日本の櫻も西洋へ持つて行つて移し植ゑると、やはり西洋化して、日本に於けるやうにあざやかな散り方をしなくなり、いつまでも枝にこびりついてゐて色あせて行くやうになると云ふ話である。もし本當にさうだとすると、人間もまたやはり散り際のあざやかすぎて生に執着の少いやうに見えるのは、氣候風土の影響もあることを想定しなければならなくなる。

薔薇が西洋花の女王であるやうに、牡丹は支那花の女王である。この對立は如何にも兩者の性格を鮮明にしてゐるが、複雜、妖艶、豪華な點に於いては共通するものがあるが、日本の代表花がもし櫻だとすると、何といゝ意味でも惡い意味でも單純清楚なものではな

同じく他人の所有に屬する好餌蘭印で日本を、自分の味方に引入れようとしてゐるのは、友好のためだけでは斷じてない。そんな甘つたるいことを考へた日には大變なことになる。それは英佛の勢力をそぐ所以になるからだ。もし英佛への打擊としての意味がなかつたならば、何であの狡猾なドイツが默つてなどゐるものか。現に日清戰役に、自分には何の發言權もない遼東半島還付を强要して日本に苦汁を呑ませた主魁は誰であつたと思ふのか。それは帝政時代のドイツで今のドイツではないと强辯するか。國民性がそれほど簡單に豹變すると思つてゐるのか。三國干渉も中立侵犯もその道德的、性格的意義に於いては同じではないか。腰ぬけの日本知識階級として、もしそんな强辯が出來るならば、まだしも見所があると云つて賞めてやりたい位のものだ。

イタリーが參戰する〳〵と云ひながら聲がゝりばかりでなか〳〵立上らなかつたのは流石にムソリーニの偉いところだと私は思ふ。へたにドイツ側に參戰したらドイツのために火中の栗を拾ひ、戰終つて後にドイツの屬國にせられてしまふ事は明かだからだ。ドイツの腹の痛まない御馳走スイツルに輕率に手を出すほどイタリーは馬鹿ではない。尤も、何れ側に參戰しようにもイタリーとしてはどちらにも都合の悪い點があつて、困つてゐることも困つてゐるのだらうが……。日本も有田聲明に忠實に當分蘭印を睥睨してゐるのが最も賢明である。學界に於けるやうなオッチョコチョイが政界に居らざらむことを私は危局に立つ日本のために切望して已まない。とは云へいつまでも指をくわへて蘭印を眺めてゐろと云ふのではない。行動を起すには起すべき獨自の時機と理由とがなければならぬ。ドイツに唆けかけられて尻尾を振る野良犬のやうな眞似はするなと云ふだけだ。まして、野良犬の愛國者面にはあてられる。

——（完）——

いであらうか。

單純な頭

テーヌと云へば、私は今から十數年前に、當時の左翼評論家平林初之輔君と論爭して、彼がテーヌの地理的環境說からマルクスの經濟史觀說に移つたと云ひながら、たゞ文字通り「轉向」したゞけであつて、テーヌとマルクスとの辯證法的止揚のあとが明白でないのはどう云ふわけか、これマルクシストの自家撞着でないかと詰よつたことがあつたが、彼はそれに對して答辯が出來ないまゝに死んでしまつた。併しそんなことを理論的につきつめて考へるなんて事は日本的ではないので、そんな能力のないところに平林君が日本の論壇に人氣のあつた所以が存したのだ。

一つのものから他のものに移つたときには前のものはもうケロリと忘れるところに日本的性格があるのらしい。それは平林君が一つの代表であるが、ジャーナリズムでも、學界でも、政界でも、大體みなさう云ふ傾向に支配せられてゐる。だから、ジャーナリズムでも左翼流行となつたら左翼一點張りで信仰的になり、教育界でも入學試驗に學力考査よりも體力考査が重大だと云へば、學力考査を完

文藝時評

宮田戊子

毎月雜誌に發表される作品を讀んで、さてそれを批評した月評類を讀むと甚だ異な心持がする。何故なら、作品を讀んで我々が心理的に興味あるものと考へてゐたのが、概ね批評からオミツトされてゐるからである。もちろん、我々と文藝批評家と見る角度が違ふといふことのあるのは分つてゐるにしても、心理的な作品だつてたしかに文藝作品である筈であるのに、それの多くが批評の眼から洩れてゐるについては不可思議の念を禁ずることが出來ない。

由來わが文壇人は、文學の士といふよりも職人的な要素を多分にもつてゐる。したがつて文壇を代表する批評は、表現の方法に偏して、たか〲作中人物の個性が描寫されてゐるかどうか位に內容批判がなされるにすぎない。一の文藝はこれを讀んで樂しむためにのみ存在價値を有するのではない。より優秀な作品であるほど、樣々な角度からの批評に堪へうるのである。さうして種々なる角度からの批評は、一層その作品に價値を與へることゝもならう。ところがかうした文藝時評家の視野の狹さといふものが、日本の文藝を偏頗なものにしてしまふのだ。

作家其他に對してはやゝ我田引水のやうに聞えるかも知れないが、作品はもつと精神分析學を作品にとり入れ、分析學的批評に庶幾せねばならぬのではなからうか。現在のわが國の文藝作品に精神分析の影響が全然ないといふのではなく、例へば石坂洋次郎氏や岡本かの子氏の作品には、僅かながらそれから學んでゐる

全にやめてしまふほど極端に走り實際問題上で行詰らせてゐる。外交官試驗に外國語の重要性が問題になると、忽ちこれを試驗科目中から全廢してしまふと云ふやうな亂暴なことをやり出す。（その後、また復活せられたと聞いたが、それにしても……）併しその背後には、非常に外界の影響に過敏な、被暗示性の強い女性的性格が存してゐることを考へねばならない。現在で云へば、何もかもドイツの影響、模倣であつて、何ら獨創的な見識から出てゐるのではないのだ。こんなことでは外國人（殊に支那人）に馬鹿にせられるのは已むを得ぬことだ。今次事變勃發の動機は、實に支那人の日本への輕蔑にあるのだ。それは一概に日本が輕蔑に價するからだと私は云はうとするのでは決してないが、併し、その代りまた一概に支那が無意味に排他的であると云はうとするものでもないのだと云ふことを判然と斷つておかう。

蓮の開花音

理學博士大賀一郎氏が昨年八月三日の東朝「學界餘滴」欄に蓮の開花音の民族的傳說は嘘だと云ふことを發表し、最後に次のやうに結論したことは、なほ多くの人々の記憶して

痕跡が認められるが、それは甚だ微少なもので概していへばないに等しい。然し分析學より學ぶところがないといふ狀態が、文藝が分析學的見地への資料となつてゐないとはいへない。分析學を學んだ作家は、それを應用して作品を書くかも知れぬが、分析學を知らない作家の書くものに分析學の所說と同じものがあるならば、それは却つて、分析學の所說の正しさを證明してゐるものでなければならない。

前書が甚だ長くなつたが、私が今回文藝時評のペンを執る所以は、文藝と分析學との交流を志してゐるものであり、一方分析學の人々のために、斯ういふ作品もあるといふことを紹介して、以て研鑽の資料にしようと思ふのである。その意味で誌友諸賢の御助言と御示敎とを期待してやまない。

▼男性の思春期心理の作品

近頃の文藝作品を讀むと、思春期の頃を回顧しその心理を暴露的に描寫してゐるものが甚だ多い。私が手帳に控へてあるところを記してみると、

貴司山治「平島公方」（日本評論二月號）
北原武夫「青春」（文藝四月號）
武田麟太郎「二本の枝」（改造四月號）
尾崎士郎「夜明けの門」（新潮四月號）
岡本かの子「女體開眼」（日本評論連載中）
窪川稻子「素足の娘」（單行本）

といふやうな有樣である。これについて某文學批評家は、文藝が思想性を喪失した結果、手近のところに材料を求める結果だといふやうなことを私に話したがそれはこの批評家のマルキシズム的視野をもつ觀察であつて、私は一時マルキシズムの影響から、人間の心理と行動とを外的原因にのみ求めてゐたのが、その反

ゐられるところであらうと思ふ。

「實に、東洋文化を相傳した印度人間にも、支那人間にも、朝鮮人間にも無くて、この廣い世界の中、唯日本人の間にだけ、男女老幼貴賤貧富を問はず、斯くも根强く、昭和の今日に至るまで侵潤傳承されて來た、この蓮の開花音傳說の存在の如きは、確かに、我が民族性研究上の興味ある一問題であると思はざるを得ないのである」と。

それに續いて、同月十二日の同紙槍騎兵欄に杉山平助氏は、蓮の華が開く時に「ポンとかパンとかいふ威勢のいゝ音を決して立てるものではないと云ふ記事ほど、近頃私を仰天させたものはない。……どうして私をこんなにがつかりさせるのか、自分でもよくは分らない。とにかくお蔭で世の中にまた一つつまらないことがふえたのは事實である」と述べてゐた。

私も蓮の華はポンとかパンとか云ふ音を立てゝ開くと云ふ傳說に非常に興味を覺え、二三年前、夏日早朝、家内一同を引きつれてこの動坂町からは程遠からぬ上野不忍池畔に出かけて耳を傾けたことがあつたが、一向不得要領であつたので、ひどくがつかりしたことを記憶してゐる。

動で反對にさういふ心理と行動を、内的なものに求めて來た現象ではないかと思ふ。が、それはいづれにせよ、多くの作家のかゝる思春期における記錄は、たとへ某氏のいふやうに思想性喪失といふ感心しない事柄であるにしても、我々分析學を學ぶものにとつては甚だ貴重な資料の集積といはねばならない。

貴司山治氏の「平島公方」は未完のものであるが、鳴門海峽附近の高島といふ島に生れた作者の自傳風のものである。これによると主人公は伊達といふ金貸の子であつて、金貸の子だと人に云はれるのを嫌ひ、尋常三年の時と四年の時家出をしたが、母はそのためお前は伊達の子ではなく、平島公方と呼ばれた井縫の子だと云つた。その井縫の子だといはれたゝめに或時教師比佐先生の處へ行つた時そこにゐた平島の樣と呼ばれる自分より十二三も上の井縫某女に關心をもつやうになつた。井縫は足利義稙の子義冬の分家だといはれてゐて、中學に入る頃、比佐先生はそれの種々な史實を彼に語つたゝめ、彼はアリストクラシズムに偏し足利家の墓を訪ねたりしたが、時には平島の樣と一緒に死んで了ひたいやうな愛着に驅られた。その頃、彼の女は赤ン坊を生むため入院してゐたが、その赤ン坊を見た時、彼はその子の顏が比佐先生に肖てゐやしないかと注意した。大人になつてから『女の一生』を讀んで初めて女が無理なお產をした理由が分り、女が死んでしまふと彼は比佐先生に甚だしい憎惡を抱き、先生の處へ行かないやうになつたが、その後七年經つて、少年の決心を抱いて島を去つたといふ處で終つてゐる。この小說では子供の父との反抗と、比佐先生と平島の樣とが父と母との代償として心理的に作用してゐることが描かれてゐる。主人公は中學へ入學を志望し父は己れの子を中學を通じて都會へ奪はうとするものと考へ、反抗する子を折檻する。又主人公は平島の樣に母代償を求め、彼の女に關係あるらしい比佐先生に嫉妬を感じてをり、彼の女が死んでしまふとそれが先生のためのやうに考へ、そ

大賀氏の考へ方に從ふと、私も杉山氏と共に日本人の資格があることになつたが、ところで、何故に、蓮の開花音の威勢のよしあしを日本人はこんなに問題にするのかと云ふ問題はまだ解決してゐない。大賀氏も一つの問題として提出してゐるだけである。これは併し心理學の問題であつて物理學の問題ではないから大賀氏が解決への努力を拂はうともしてゐないのは當然の差控へである。杉山氏も文藝評論家であるから、「自分でもよく分らない」と放言するだけで別に責任はない。たゞ心理學徒として立つ我等にだけその責任が掛つてゐるわけである。

私は一個人として、自分の心理を分析自省して見た結果（それも甚だ行屆かないものながら）だけは公表出來るが、それが日本民族心理全般の解決のためにどの程度の妥當性を有するかは、今のところ保障の限りでない。

蓮は神聖淸淨なる母胎の象徵とせられてゐることは、佛教以來、わが國民族の集合無意識性として、恐らく何人も否定出來ないところであらう。この華が一日の誕生時であるところの早朝に、卽ち太陽の上る（出產する）時刻に水の中から出て開くと云ふことは、何か太陽が（卽ち太陽に同一化してゐる人間そ

れを憎惡するのである。思春期に男女の祕密を知りたがる少年の心理を暴露した作品である。

北原武夫氏の「青春」は、或る青年の告白に擬してある作品であるが、中學三年に自分の同級生から情死したものを出し、それに刺戟されて性に目ざめて來る經路を說き、その情死の相手が女學生だつたゝめ、急にどの女學生もが美しく見え、どの女學生も自分に其氣さへあれば高い處から谷川へでも身を躍らしさうに見えたと語つてゐる。かういふ幻想が性行爲を象徵するものであることはいふまでもなからう。彼はしきりに人に憧憬を感じ大人になりたく思つてゐる。この大人になりたいといふのが彼の意味では「女を知りたいといふ意味だ」と明らかに云つてゐる。高等學校の時蝶々といふ藝妓と知り合ひ、それと何らの交渉もなく別れて來たのを悔い、遊廓にゆくのだが、そこで接した女が醜く感じられると同時に、蝶々の純潔に一層憧れる。然しそれにもかゝはらず、遊廓の女のことが諦めきれず、蝶々への思慕が募ると同時に、滿たされない思ひを抱いて頻繁に遊廓へ通ふ結果となるのである。この幻想の女性觀と現實の女性觀との相反性は、女性を純潔な母のやうなものと見、又一面ではそれに現實性を求めてやまぬ思春期の心理の錯覺であるらしい。

この作品で興味あることは、この主人公が友人の女と關係を生ずる處である。男でも女でも、その戀愛對象に他に戀人があるやうな場合、その對象に一層愛着を感ずるものである。この三角型心理は、丹羽文雄氏や岡本かの子氏の作品にしばしば描寫されてゐる。この主人公も、その心理的錯覺によりその娘に愛着を感じたが、超自我の呵責により、その娘が友人と主人公を兩手に捉へてゐるカラクリを知つたが、その娘に友人を裏切らした相手は自分自らであることに考へつかなかつたと書いてゐるが、或時其友人と件の娘とが町を歩いてゐたのに會ふ。友

れ自身が）その華の中から生れ出るかの如き幻想を持たしめるに好都合な條件を呈するやうになつたものではあるまいか。

我々の日本國土は昔から「日出づる國」として、その住民が他の國土民以上に、特に太陽に同一化する傾向を強く帶びてゐることは日の丸を以て國旗にしてゐるに徵しても分る。我々は威勢のいゝ事を「旭日昇天」と云ふ言葉を以て表現する。それは、眞赤な太陽（赤ん坊）が海洋（母胎）の中から威勢よく出產することを象徵的に意味してゐるのであつて、それは桃果を威勢よくパンと二つに割つて中から飛出して來る桃太郎の姿を空想した民族心理と同じものだと云つて、恐らく何の差支へもなからうと思ふ。昔から出產直後に威勢のいゝ呱々の聲を揚げる子は丈夫だと云ひ慣はされてゐる程だ。それならば、母胎象徵としての蓮の華が、桃太郎の桃果のやうに威勢のいゝ割れ方をすると空想（願望）したからとて、少しも不思議はないわけである。それ故に蓮が早朝に咲く花でなく、或は水中からぬき出る花でなかつたならば、恐らくかう云ふ傳說は蓮をめぐつて生れ來なかつたであらうと斷言するを憚らぬ。

以上は私一個の中に存する集合無意識の分

人は幾分キマリ悪さうにしてゐたが、娘はそつぽを向いてゐたので、彼はカツとなつて歸るとすぐ友人に宛て、あの娘は悪い女だから別れた方がいゝと手紙で云つてやると、友人は餘計なお節介だと怒つて來るといふ心理の錯綜が興味あるものに思へた。

さて大分途中でヒマをとつて紙幅に乏しくなつたので、男性の思春期心理の作品はこれで打ち切り、女性の方に移らうと思ふ。

▼女性の思春期的作品

女性のこの種の作品では、岡本かの子氏の「女體開顯」と、窪川稻子氏の「素足の娘」とを讀んだ。「女體開顯」は未だ日本評論に連載中だが、この作品が岡本氏の自敍傳風のものであるか否かを私は詳かにせぬが、主人公奈々子が十二歳の時から筆を起してゐる。その題目がこれを證してゐるやうに、女が女としての行動や心理の特徴が生じて來るのを、作者は女性の本然的なものとして、佛教的な女性の罪障感をもつて描出しようと欲してゐるものらしい。然し私の觀るところでは、思春期の女性がやうやく母的なものをもつて來る行動が派生的に描かれてゐると思ふのである。奈々子は大人のナメクじのやうな生活を嫌ひ、少年達といくさごつこをやる快味に憧れ、そこで少年軍の旗頭である宗四郎と一騎討の戰ひをする。宗四郎は弱々しい子であるが、奈々子はこの少年に自分の女らしさを奪はれるやうな氣がして、苛めてやりたい衝動に驅られる。この心理を彼の女の従兄の鳳作は、「そりやたゞのいぢらしさや憎らしさぢやねえ、母性といふものが入つてゐら」といふ其言葉が面白いと思つた。

窪川氏の「素足の娘」は岡本氏の作とはやゝ對蹠的に、岡本氏のものがサディスムスに偏し、奈々子が所謂「男喰ひ」の女性型として描かれてゐるに對し、女性的マゾヒスムスの典型のやうに描かれてゐる。主人公は奈々子より上の十六七

析である。もしこれがそのまゝ日本人全般に妥當として承認せられたならば、その時我等は大賀氏の提出せられた問題に答辯を與へ得たことになるのである。我等はまづ大賀杉山兩氏の率直な答辯を聽きたい。尤も、分析をよく知らない人々が、右の私の自己分析を聽かれたならば、相當面喰はれるであらうことは、私の察し得るところであるが……。

玉露錯綜

たしか僧正遍照の作であつたと思ふが、蓮の華を詠じた有名な歌に「蜂巣葉の濁りに泌まぬ心もて何かは露を玉と欺く」と云ふのがある。青年時代にこれを讀んだ時には、たゞ露が玉のやうに見えると云ふだけの簡單な事實を變に持つて廻つて機智にならぬ機智を弄した氣障な歌だと思つてゐたが、分析眼を以て鑑賞し直して見ると、これは恐らくやはり女の事を詠じたものであるらしく、女の事だとすると、また別の見所が出て來る。

私はかつて同じ僧正の「乙女の姿」の歌を分析鑑賞して、この「乙女」は普通に月のことだと解釋せられてゐるけれども、月に托してやはり女の事を詠じてゐるのだと分析解釋したことがあつた。「蜂巣葉」の歌もやはり

八歳の少女であるが、彼の女は男性に憧れを抱いてをり、父の任地で多くの男性に近づくのであるが、彼の女はそれらの男性に美しい女性として見られることを願望し、しば／＼その男性の通る方へ歩いて行つては、その視線を浴びて滿足するのである。この心理は露出癖的であり、フロイドの云つたやうにナルチスス的でもある。作者がこれに「素足の娘」なる標題を附したのも、足は性器を象徴するものであるので、さういふ露出癖を作家的な直感で感じとつたものらしい。斯ういふ動作はまた誘惑願望でもあり、だからこそその願望を見破つた川瀬に處女性を奪はれるのである。

なほこの作の主人公の父コムプレクスは蔽ふべくもなく描かれてゐる。彼の女は初め東京に祖母と暮してゐたが、父が長崎方面で職に就いてゐるので呼ばれて長崎へ行くのであるが、父と暮すうちの動作にそれがはつきりと見える。例へば父親ひとりで食事をしてゐるのにお給仕をする時、男女間の羞恥みたいなものを感じたといひ、川瀬との關係が生じた直後、父を思ひ出し、父を置き去りにして來たやうな氣がして父が可愛さうになつたといふやうな心理は、明らかにそれである。岡本かの子氏の「女體開顯」とこの作品とは、同じやうな思春期心理の小說であるが、岡本氏の主人公奈々子はやゝサディスチッシュであり、これに反し窪川氏の主人公はマゾヒスティッシュである。が、兩者に通ずるところもあると思ふ。最早豫定の枚數を突破したので擱筆せねばならぬが、最近私の讀んだ作品で特に精神分析の立場から、その研究對象となるものを擧げて此の拔書的な稿を了りたいと思ふ。

▼墮落願望

窪川稻子氏「矜持」（『新潮』新年號）
丹羽文雄氏「太宗寺附近」（同）

女の事だと解して深甚な意味が生じて來る。泥中から出ても淸淨な華を咲かせるほどの心を持ちながら、何故に露を玉と見せかけるかと云ふ嘆きは、その裏面に、やはり本性は失はれないものだと云ふ批難を含んでゐることは疑ふ餘地がない。外面如菩薩、內心如夜叉の佛敎的女性觀をそのまゝに歌で表現してゐるわけになる。して見ると、こゝで蓮は女性又は母性の象徵となつてゐるのだから、前項開花音の日本民族心理コムプレクス分析解釋の基礎的資料の一つとなり得ると思つて、こゝにこの歌とその分析解釋とを附加して見た次第だ。

新刊紹介

▼『精神病學』――丸井清泰著――

この書は昭和十一年に初版を出し、今や四年を經て本年二月に再版を刊行するに至つたもので、著者が序文で斷つてゐる通り、從來の精神病學書と異つてゐる點は、そこに「精神生物學」「發生學的心理學」などの研究結果を加味してゐる點に存する。ところで精神生物學とか發生學的心理學とか云ふのは精神分析學のことに外ならぬのであるが、かう云

▼救助願望

中山義秀氏「醜の花」（『改造』三月號）
同　　　　「柔い蠟」（『文藝春秋』五月號）
牧屋善三氏「登場人物」（『文學者』四月銑）……完。

『民族の祭典』を観る

映畫協會、體育協會、東和商事映畫部などの主催に係る試寫會を五月廿九日歌舞伎座に見る。開會前に體育協會を代表して下村宏氏の講演があり、續いて「日本映畫史」の上映があり、中には旅順口の乃木、ステッセル會見の如きなつかしい場面も數々出て來た。最後に『民族の祭典』が上映せられたが、これは數年前ベルリンに於いて催されたるオリムピック競技の實寫であつて、多數の日本選手が登場活躍するので、我々觀客には非常に感激的な場面に富んでゐた。私も思はず、拍手し續けてゐた。併したゞ事務的散文的に選手たちの競技振りを次から次へと寫して行つたと云ふだけのものではなく、ギリシアの荒野からの聖火の傳達に始まり、ギリシア彫刻の美から、殊に有名な圓板投げの古代彫像作品から現代圓板投げ選手のポーズに移り行くなど、流石に映畫監督として盛名あるリーフェンスタール女史の作たるに恥ぢぬものであることを思はせた。公開の節には是非、人々の一覽しおくべきものであることを保障する。（大槻）

ふ別の表現を用ゐてゐるところに著者の學界に對する遠慮が見られ、またその遠慮が氏の存在と分析學の存在とを從來官學界に於いて力弱いものにした傾きがある。併し氏は評者等の如く野にあつて、自由奔走に馳け廻ることの出來る氣樂な身分ではなく、衣冠束帶をつけて固くなつてゐなければならぬ窮屈な身の上なのだから、これも已むを得ないことであらう。環境の心理學的意義を重視せられる氏は、恐らく氏自身を反省苦笑してゐられることであらう。併し斷乎として進めば鬼神も避けるのだ。私は學者の勇氣は軍人の勇氣以上に必要なものだと信じてゐる。

全體を四編に分ち、第一を精神病學總論とし、第二篇を精神病學各論とし、始めに緒論をおいて、本書の立場を明かにし、最後に附錄を添へて病者診斷の手引の類を方法、形式の諸方面に亘つて傳へてゐる。元來、教科書として編述せられたもの故、西洋の諸學者の說を忠實に（あまりに固くなりすぎるほど忠實に）傳へてゐるが、とりたてゝ著者の獨創の見解や發見は述べられてゐないやうに思へる。教科書とは云へ、も少し獨自の體驗を報告せられたら一層精彩を加へ得たであらう。併し挿圖も多くて興味をそゝり讀んで見て分らぬ晦澁な文章では決してない。分析を學ぶ人々のための精神病學書として最も適當なものを得たるを喜ぶ。

現今、純粹の學究者としては寧ろ筆の立つ、著作力の豐かな一人として賞揚せられてよいであらう。著者は評者と同じ中學出身の先輩である。評者は常々かゝる先輩を有することを誇りとし信頼してゐる。（大槻）――金原書店發行、定價八圓。

精神分析學入門講話 （十四）

ジグムント・フロイド（K・O・生譯）

第五講　夢の解釋の初まり

嘗て、或る神經症者の現はす症候に意味がある、と云ふことを發見した人があつた。※ その發見の上に精神分析治療法は基礎をおいてゐるのである。分析處置中に、患者はその症候の代りに夢を提示すると云ふ事が起つた。そこで夢にもやはり意味があると云ふことを想定するやうになつた。

註　ヨゼフ・ブロイヤーが一八八〇年－八二年間に行つた實驗を云ふ。詳しくは大槻譯『精神分析總論』中の『精神分析五講』及び『精神分析運動史』參照。

我々は併し、このやうな歷史的道程を辿らずにその逆の道を進んで行き、さうして精神症研究への準備として夢の意味を證明したいと思ふ。この逆轉は當然である。何となれば、夢の研究は神經症研究のための最良の準備であるばかりでなく、夢のそれ自身はまた一つの神經症候であるばかりでなく、健康なる萬人にも起ると云ふ我々には頗る好都合な利益もあるのである。實際、萬人が健康であつて、たゞ夢を見てゐるだけであつたならば、我々は彼等の夢の中から殆ど一切の洞察——神經症の研究に依つて我々が到達したところの洞察——を得ることが出來たでもあらう。

このやうな次第で、夢は精神分析研究の對象になつたのである。これまたやはり日常普通の、あまり重視せられない、實際的には何らの價値がないらしく思はれるところのものでその點では行り損ひと同樣であつて、行り損ひと夢との間には幾多の共通點が存するのである。併しその他の點では、我々の研究のための條件は、夢の場合の方が都合が惡い。行り損ひはたゞ學問の方で無視してゐたゞけである。學界は一向そんなものに頓着してゐない。併し、行り損ひの研究ならばやつて見ても別に不名譽にはならなかつた。も少し重要なことがあるのに、併しそれでも研究して見れば何かは出て來る

だらう。ところが、夢の事に拘泥すると云ふことは、非實際的であらずもがなの事であるばかりでなく、人を馬鹿にした話だ。夢の研究は非科學の譏りを招くばかりか、神祕への個人的傾向に懷疑を喚起することになる。神經病理學や精神病學には幾多の重大問題があるではないか。例へば、精神生活を壓迫する林檎大の腫瘍、血液滲出、慢性炎などがあり、それ等の場合には組織の變化を顯微鏡下に確めることも出來るではないか。醫家たるものが、夢の研究に沒頭するとは何事か。いや、夢の如きはあまりに些小の問題だ。研究に價しない對象だ、と。

　なほその上にも一つ厄介なことは、夢と云ふものはその出來具合からして、正確な研究態度をこれに臨むことが抑々苦手なものである。實際、夢の研究に當つて見ると、全く朦朧に腕押しである。例へば、妄想ならば、明白な一定の輪廓をとつて本人に現はれる。俺は支那の天子だと患者は高聲に叫ぶ。併し夢のはどうか。大抵の夢は何と話していゝか、それさへ覺付かない。何んにもせよ、自分の夢を語る時に確に本當の事を話したと保障出來るであらうか。記憶の不確實のために、話を變へたり何かをそこに附加したりしなかつたと確言出來るであらうか。大抵の夢は抑々想起することの出來ないものである。些細な斷片だけしか覺えてゐないものだ。果してこのやうな材料に基いて科學的心理學や患者の處置法が立てられ得るものであらうか。

或る事の判斷に於いて多少力を入れ過ぎると、我々は懷疑に陷る。研究對象としての夢に對してこのやうな抗議をするのは、確に行き過ぎである。重要でないと云ふことに就いては、我々は既に行き損ひの條で、論じておいた。重要な事も些小な外觀で現れると云ふことを述べておいた。夢が不正確であるとしても、それも他の性格と同樣、一つの性格であるのだ。人々は事柄の性格を豫めきめてかゝつてはならない。それにまた、判然とした、正確な夢もあるにはあるのだ。また他の精神病學的研究對象の中で、同じく不正確な性格を帶びたものもないことはない。例へば、强迫觀念の如きで、これに就いては多くの尊敬すべき、優秀な精神病學者たちが研究してゐるのである。私が醫師としての活動の中で最近に起きた場合を想起して見よう。

　その婦人患者は自分のことを次のやうな言葉で話した。「私は何か生きものを―子供かな―いや犬でしたらう――害したやうな、害しやうと思つたやうな氣がします。多分橋の上から投げ棄てたやうな氣がします。――或はそれとも違つた感じです」と。夢の本人の語り出づることに忘れたところがあるとか、思ひ出す時に變つたかも知れないとか云ふやうな心配がなくて、確に彼の夢として妥當すると定まつた場合には、想起の不確實と云ふ難點は何とか處置する方法が立つのである。要するに人々は、夢は重要ならぬものだと、それほど一般的に主張することも出來なくなるのだ。我々自身の

經驗に徴しても分る通り、我々が夢を見て眼が醒めるとその夢の氣分がその日一日續いてゐると云ふこともあるし、また醫師たちの觀察に依ると、或る精神病は一つの夢から始まつてをり、その夢から由來してゐることもあるのだ。また重大な事業への暗示を夢から得てゐると云ふ歴史上の人物もあるのだ。それ故に我々は問題にするのである、夢に對する學界の輕視が抑々何に由來するものであるかを――。

それは昔の人々がこれをあまり重視したことに對する反動であると私は考へるのである。昔を今になすよしもないことは申すまでもないが、併し我々が確實に認め得ることは――一寸冗談めいて恐縮だが――三千年の昔の我々の祖先が現在の我々と同樣に夢を見たに相違ないと云ふことである。我々の知つてゐる限りでは、古代の人々は總て夢に大きな意義を認め、そこに實際的な價値があるものと考へたのである。彼等はそこに未來に對する標識をさぐり、そこに豫徴を卜したのである。ギリシア人及び東方の人々にとつては、夢判斷師を伴はずして戰場に向ふことは、今日飛行探偵なしに向ふのと同じに、不可能なことであつた。アレキサンダー大王が遠征軍を起す時には、常に最も有名な夢判斷師をその幕僚に加へてゐた。チロスの都は當時なほ島の上に立つてゐたが、大王に對して頑強な抵抗をしたので、攻撃を廢めようかとの考へが起きて來たほどであつた。その時、一夜、大王は勝利に小躍りするかの如きサチールを夢見たので、その夢の話を判斷師にしたところ、彼はそれこそ王が勝利を得給ふ前兆なりと告げた。そこで彼は襲撃を命じてチロスを占領した。エトラスカ人やローマ人の間では、未來を豫知するためには別の方法が用ゐられてゐた。併し、夢判斷はギリシア・ローマ時代の全般に亘つて用ゐられ、尊重せられてゐた。夢判斷を取扱つた文獻としては少くともその傑作が我等に傳承せられてゐる。卽ち、ダルディスのアルテミドロスの書で、ハドリアン王の治世時代に編纂せられたものである。それ以後、夢判斷の術が如何にして衰微し、夢が信用せられなくなつたかに就いては、私は何も諸君に云ふべきことを知らない。啓蒙開發と云ふことが、それに對して多くの役割を果したと云ふことはあり得ない。何となれば、中世暗黑時代には、古代の夢判斷よりも、もつと矛盾したものが忠實に保存せられてゐたからである。事實は、夢に對する興味が迷信と墮し無教育なものゝ間にのみ行はれることになつたのであらう。夢判斷の最後の惡用は、富籤を引くためにそれの番號を夢から知らうとする試みである。それに對して現代の精密科學は幾度も幾度も夢の研究に着手したが、併しいつもそれの生理學說を夢に適用しようとするに過ぎないものであつた。醫家たちにとつては、夢は勿論、心理的行動ではなく、肉體的刺戟が精神生活に顯現したものと考へられた。ビンツ（Binz）は一八七六年に夢は「肉體的過程であり、あらゆる場合に於いて不用

な、多くの場合に於いて正に病的な過程であり、それの上に世界精神と不滅性とが聳えてゐることは、宛も最も低き不毛の砂地の上に紺碧の大空が聳えてゐるやうである」と說いた。マウリ（Maury）は、夢を常人の均整のとれた運動とは正反對の、舞踏病者の痙攣に比較した。古い比較によると、夢は音樂に通じないものが十指を以て鍵盤の上を引掻き廻す音に擬せられる。（未完）

精神分析學語彙（四四）

一、聯想（Assoziation）――觀念、思想、思ひ浮びは意識內に於いて各々孤立してゐるのではなく、相互に結びついてゐる。この結び付きは何らかの事實的條件に基いてゐることもある。例へば、幾何學に於ける公理の證明の如きものである。また心理的に條件づけられてゐることもある。種々の思想は互に聯關してゐるのである。何となれば、これ等の思想は同じ本能感情に依って色付けられてゐる體驗の內に含まれてゐたものだからである。このやうな心理的性質の結び付きを、我々は分析學に於いて全く共通的に、聯想と名付けてゐる。一般の心理學に於いてはこれとはいさゝか違つた意味に用ゐてゐるが、それに就いては「聯想心理學」の條を參照せられたい。分析操作中に於ける聯想は、普通に「思ひ浮び」と名付ける。聯想は目的觀念、又は本能感情に依つて發動せしめられる。特に抑壓及び超自我の要求は聯想の具體的流れに對して決定的である。この發動は本質的には、それ自身に於いて聯結せられ得べき材料の充滿してゐる中から一定の聯想の選擇に依つてなされるのである。人間の聯想は普通の時には論理的、倫理的、審美的規範に依つて支配せられてゐるものであるが、それ等の規範に基く聯想選擇をやゝ抑制することに成功したならば、その時、現實の本能感情の意味に於ける聯想が、又はその感情に卽した願望が、發動して來る。例へば、白日夢に於ける觀念發動の如きものである。（「白日夢」の條參照）分析治療に際しては右三種の規範は出來るだけ抑制しておくやうに努めるのである。それに依つて所謂「自由」聯想の生起は可能となるのである。その時自由聯想は右に擧げた三種の力に依つて制約せられず、無意識面からの直接派生として發動し來るのであるから、それによつて無意識を知るの手懸りとなるのである。

一、聯想實驗（Assoziationsexperiment）――ヴント派心理學の聯想實驗は、被實驗者に一定の刺戟語を與へて、出來るだけ早くそれに對する何らかの反應語を好き勝手に語らせる事に存する。その時實驗者は被實驗者の返答の速度を計っておき、また同樣な實驗を後になつて繰返し試み、その時の間違ひなどをも參考にして心理を調査するのである。ブロイラー及びユングを宗とするチウリヒ派では、聯想實驗に際して起きた反應の說明を與へてゐるが、それは被實驗者をしてその反應語について後になつてまた聯想をとつて說明させると云ふ方法であつて、その時驚くべきことが出て來ると云ふのである。卽ちその驚くべきことゝは、被實驗者のコムプレクスに依つて、極めて微妙に決定せられてゐるものなのである。

一、聯想心理學（Assoziationspsychologie）――十七世紀の（殊にジ

ョン・ロックの）認識論的、心理學的實驗から出發して、ハートリー、ジェイムズ、並びにミル等の努力に依つて始めて科學的心理學が確立せられ、それがフェヒネル及びヴントを經て十九世紀後半の心理學を支配するやうになり、今日もなほ相當の程度にまで心理學思考の中に浸潤してゐるのである。

これ等心理學の根本的方向は、感覺、殊に觀念に於けるあらゆる意識現象を解剖的に闡明し、復合したる諸現象をそのやうな窮極的要素の結合として把握せんとの試みにあつた。諸要素の結合はそれの聯想（聯結）に依つて起り、聯想が支配せられてゐるところの諸々の「法則」の內最も重要なものは、次の如くである。――最初の體驗に於いて時間的に空間的に近接して結合せられてあつたものは、時間及び空間に於いて「聯結」せられて想起せられる傾向が强い。同時的體驗が反復せられゝばせられるほど、聯想的結合は愈々緊密となる。

一九〇〇年頃以來聯想心理學の不完全さが加速度に强調せられるやうになり、殊にそれがあまりに感覺本位的であり、經驗本位的、原子觀的であると云ふ點でその不完全さを鳴らされたのである。精神分析學は聯想心理學と同樣、言葉や聯想を重視し、且つ時代的に云つてもフロイドの出發は聯想心理學の最盛期であつたが精神分析學と聯想心理學との間には、何ら直接の關係はない。第一に聯想心理學は意識心理學であるに對して、精神分析學は無意識心理學であり、第二に所謂聯想法則は分析に依つてその不當なることを證明せられ、それに代ふるに觀念發生の一層微妙な概念を以てするやうになつた。（未完）

前號正誌正誤表

頁	行	誤	正
五	一〇	surrounlings	surrounding
〃	一六	unconscions	unconscious
〃	二一	attvact	attract
〃	二三	aggresive	aggressive
〃	二六	comklexes	complexes
六六	六	本詩	本誌
七五下	一五	特續	持續
八〇上	五	女情	友情
八一上	三	自分	匪賊
〃　下	一七	テフォルム	デフォルム
八六上	一四	縱貫	縱貫
八七下	二〇	進込	追込
八八上	一六	豫定	豫言
八九下	二二	前月	前々
九一上	九	岩倉具榮氏令妹	岩倉（具榮氏令妹）
表紙四	一	Mei	Mai
〃	一一	Schlucken	Schluckauf
〃	一七	Ktankheit	Krankheit

内外彙報

『精神分析季刊』（本年度第二冊）

第九巻第二號は殆ど全誌を擧げてフロイド追憶の文を掲げてゐる。

一、「フロイドの人及び事業」エルンスト・ジムメル（ロスアンヂェルス）
一、「フロイドの思ひ出」ブリル（ニウヨーク）
一、「フロイドとその門下（精神分析運動史附説）」ヘレーネ・ドイチ（ボストン）
一、「キイン、ベルヒガッセ街の追憶」フランツ・アレクザンダ（シカゴ）
一、「フロイド會見記」マーチン・ペック（ボストン）
一、「モーゼと一神教に就いて」アクリーン（シカゴ）
一、「神經學に對する精神分析の影響」スミス・ジェリフ（ニウヨーク）
一、「精神病學に對する分析學の影響」パウル・シルダー（ニウヨーク）
一、「アメリカ精神病學へのフロイドの感化」グレン・マイヤーズ（ロス・アンヂルス）
一、「アメリカ文藝に於けるフロイド」ベルナルド・ド・ヴォート（ケンブリッヂ）
一、「フロイドと文化人類學」ゲザ・ローハイム（ウヤター）
一、「フロイドと美術の問題」リヒヤード・ステルバ（デトロイト）
一、「犯罪學と精神分析」ウェストキック（サンタ・バーバラ）
一、「アメリカ心理學に對するフロイドの影響」ブラウン（カンサス）
一、「エディポス前期のリビドー發展」ブランスキック（ニウヨーク）

『メニンガー診療所報』本年五月

一、「青年期の情緒問題」カロリン・ザチリ（ニウヨーク）
一、「從屬願望」シルビア・アレン。
一、「お道樂の比較研究」ジェイムズ・モーワー。
一、「補償神經症の問題について」アーネスト・リウキー。

『精神病學』本年第一冊

この米誌は第三巻第一號の殆ど全部を擧げて、ハリー・スタック・サリヴァン氏の「近代精神病學の概念」と云ふ講話を掲げ第一講基礎概念、第二講有機體と環境、第三講併發餘病、第四講說明的概念、第五講治療的概念等の各部より成る。その他二三の論文、新刊紹介などがある。

國內關係時事

▲『日本醫事新報』六月號は「精神分析に就いて」の特別課題を取擧げ、丸井清泰、久保喜代二、古澤平作、大槻憲二の四氏の寄稿を掲げてゐる。

▲田中香涯氏は『補習產婆學雜誌』第四十一號（五月號）に「性交の嫌忌に因る子宮出血の奇話」と題してドイツの醫師ブランデルスの『婦人科醫の暗示療法』から三例ほど引用してゐる。精神分析をやり子宮出血の原因が性交嫌忌にあることを知り暗示をかけて

治したとある。（塚崎茂明氏報告）

▲宮田戊子氏は『科學知識』六月號に「火野葦平精神分析」を寄稿。

▲河西邦孝氏は五月十三日兒童問題研究會に於いて「教育と精神分析」を講演。

▲霜田靜志氏は六月十日右同會に於いて「兒童研究と精神分析」につき講演。

▲飯田龜代治氏は千葉縣大多喜中學校職員間の研究會に於いて五月中精神分析と教育について講演せられた。

▲大槻憲二氏は五月廿四日夜、岩倉公爵家主催學藝茶話會（華族會館）にて「ダンテの神曲」につき分析的に講演を試みた。

▲大槻氏文筆近業一束――

一、「部分本能と性格」――『人生創造』五月號及六月號。
一、「日大生殺し被告手記の分析批判」――『腦』六月號。
一、「銃後社會心理分析」――『世界週刊』六月一日號。

▲本誌前々號（正誌）及び同號（册子）內容に關しては本號巻末廣告欄參照ありたし。

研究會例會

五月例會は二十日夜、神田アメリカン・ベーカリ階上で催された。食前司會者から本誌五月號所載語彙に就いての解說があり、續いて當夜初出席の瓶子喜巳氏の紹介がなされた。

食後 田中虎男氏は最近の信州行の分析的感想を述べられ。殊に善光寺戒壇下の暗所に就いての面白い經驗を語られた。大槻氏は日本的性格缺陷に就いて本號巻頭論文の要旨を述べられた。最後に、高橋鐵氏は某誌に連載せられた「宣傳心理學」に關する長論文を朗讀して、批判を乞はれた。出席者は右言及諸氏の他に、小野田、宮崎、高木、馬場、大槻岐美の諸氏であつた。長崎、宮田、大久保、小山、塚崎の諸氏から缺席挨拶を頂いた。

物價變調のために會費は嵩む上に會場料理店の待遇は惡くなり、不快なこと多い故に、適當な會場の發見せられるまで當分研究會を隔月（奇數月のみ）にするつもりであるから、會員諸氏には右御諒承願ひたい。

講習會例會

六月例會は三日夜研究所で催された。本夕は『トーテムとタブー』の第三章第四節（「アニミスムスと無意識心理」と我等は假りに見出しをつけた）及び第四章「幼兒期に於けるトーテミスムスの復活」の第一節「トーテムと宗教との關係」と假りに見出しをつけた）を精讀した。原始人の心理が現代の幼兒に要約反復せられる心理過程を證明せんとする準備の個所である。

會後 歐洲大戰の狀勢を論じ合ひつゝ、田中虎男氏が鄉里鹿兒島からのお土産「春駒餅」（羊羹と餅との混血兒の如き菓子）を頂いてその美味を賞した。この菓子は元來「馬のマラ」と稱したものである由、その名稱の美化せられてゐるところに民俗心理の抑壓過程を見る。

出席者は田中氏の他は、大場、高木、瓶子、小野田、塚崎、宮崎、小林、宮本、馬場、大槻夫妻の十二氏。

文獻維持委員に就いて

文獻維持委員に就いては、前號にも詳細報告するところあつたが、その後また馬場由子、平野直人兩氏（共に東京市內在住）が相前後し

て自發的に加入せられたことを、こゝに更めて感謝を以て御報告致さねばならない。　文献維持委員はこれで都合十八氏になつたわけである。委員諸氏に對しては、研究所側の義務の一端として最近では大槻氏著「續戀愛性慾の心理」及び同氏講演筆記「ダンテの神曲」を寄贈いたし、それ〴〵發送濟みである。

研究所だより

▲五月十七日、馬場由子さんと共に又々山中湖に行つて來ました。富士吉田から梨ヶ原を抜ける道々、新緑には深い霧がかゝり、晴れた日とは違つた趣きがありました。殊に湖はもの寂びてしつとりと、さながら霧は湖面から湧くやうでありました。翌日は美しい日で、はじめ寒さうだつた水の色も晝頃、漸く暖かくなつて、丁度東京の四月半ころの風物でした。大出山に登りわらびを手折り鶯を聞き、斜面の芝生に富士を仰ぎ、湖を目の下に二時間あまり寢轉んで取止めなく過したり久しぶりで何とのんびりした旅でありましたでせう。野兎が飛び出したので馬場さんは大喜びで追かけましたが、忽ちに逃げられました。兎は「ダテにあとあしを長くしてゐるのではないのです」湖畔で偶然、特別誌友の菊池直次さんにお會ひしましたが、歸りに御殿場の驛から又御一緒になり、種々御世話になりました。菊池さんは湖に舟が無かつたのを嘆じて「湖には舟が無ければならない」とおつしやいました。ご尤もなことでございます。（岐美）

▲研究會員大久保眞太郎氏よりの便り――　先日公務を外に忙中の閑をぬすみまして法隆寺の壁畫と夢殿の秘佛を見に參りました。京都では大徳寺、仁和寺、南禪寺の庭園を見物いたし久方ぶりに浮世をちよつとはなれていゝ氣もちになつて歸りました。

▲特別誌友豐田雄二郎氏よりの便り――　皆樣元氣で御研究の事となします。分析學を知つてから半年も經ち自分の解らなかつた事や、心理の如何に深奥な事も知り、段々と理解出來るやうになりました。始めは却々呑み込めませんでしたが、解つて來れば興味も深く、今後もなほ一生懸命自分の姿を知る事に勉めます。（中略）今度水戸に移りました。　忘年會にはお會ひし度いと思つて今から樂しみにしてゐます。

▲飯田龜代治氏から本號特輯題目に關して次の感想を寄せられた。「日本國民性として他の高度に發達せる文明國諸民族に比して、エス的分子多く、冷嚴なる現實凝視の能力に缺くるところがあるのではないかと心配します。他面、健全なる國民的超自我はその理想を謬らず、獨特なる國運の進展を致して今日に至りましたが、より健全なる國民的自我の强化確立が今日の急務ではないかと愚考いたします。」と。記者曰く　併しその急務を實行するために國民的超自我を何とかせねばなりますまい。それが出來ないから弱體內閣ばかり出來るのだと思ひます。大變な問題に直面してゐるわけです。

相談

愚痴の多い妻

問――私は四十一歳で九歳を頭に四人の子供をもつ父親です、結婚後既に十年にもなりますが、妻が人一倍愚痴が多くて困つてゐます。昨年の暮に大病に罹り入院治療を受け、本年二月に退院しましたが

十年も連添ふ妻は私の薄給なのに輕蔑と不滿とを感じ、着物一枚買つて貰へぬとか、近所の誰彼は子供はなく主人と二人で遊び歩いて居るとか、何圓のパーマネントをかけてゐるとか、子供のお守りで一日を暮すは馬鹿らしいとか、年中つまらぬ事ばかり申してゐます。

妻の實家は私の家の恩人であるので、妻がどんな事を云つても何もいはず十年もの間我慢してゐますが、近所の人はあなたが餘りおとなしいからと親切にいつて吳れます。

平常は左程でもありませんが、病氣などしてみますと妻の心なき愚痴が餘りにも身に痛く感じ、口もきゝたくなくなつて口をきかぬ日もあります。すると妻は恩知らずと罵つて妻は實家へ歸り三四日は家へ歸つて來ない有樣です。

右のやうなわけで勤めも思ふやうには出來ず困つてゐます。折角全快した病氣もまた再發しさうです、私が病で倒れたら一家は闇です、このやうな妻では子供のためにもよくないと思ひます、餘りの事ですから妻の母にも話してみようかと思ひますが、何かよい解決の方法はございませんでせうか？　私の主人として執るべき道をお教へ下さい。（澁谷、煩悶生）

答――貴君の苦しさと不快とは十分にお察し出來ます。併し妻君の立場や心持にも十分の理解を持つやうにつとめられ、また御自分の態度にも多少の反省をなさることも必要かと存じます。

第一に、恩人の家などから妻君を貰はれたのが間違ひでした。妻君は原則として自分の家よりは貧しい家から貰ふべきものです。それでも妻君と云ふのはとかく愚痴の多いものですのに、自分より身分の上の家から女君を貰つたら、どんなに貴君に働きがあつても「輕蔑と不滿」とを持つものです。ましてやあなたが「薄給」なのに於いてをやです。女としては自分の尊敬し崇拝出來る男を夫としたいと云ふのは至極尤もな要求でありまして、自分がその尊敬と崇拝とに價しないと思へば、寧ろ氣の毒な位なものではありますまいか。それでもとにかく間違ひも起さず、ついて來るとすればまづ〳〵怒るべき點もありませう。さう云ふ考へ方もして御覽になるのがよいでせう。すると貴君の妻君に對する態度にも違つたところが出來、妻君の貴君への反應にも變化が來ませう。

「折角全快した病氣も再發しさうです。」と貴君は云はれますが、この言葉の中に貴君の病氣が、心理的に動機づけられてゐることへの無意識的な自覺と告白があると思はれます。そんなに虐待するなら病氣へ逃げ込んでやるぞと云ふ極めて子供らしい威嚇があると思ひます。つまり貴君は妻君に甘へてゐらつしやる。換言すれば母コムプレクスを持つてゐられる。恩人の家の娘などはどうしても母親代償になり易いものですから貴君の場合も勿論それでせう。それに對して妻君の方は貴君を父親代償にしたくてたまらないのに貴君は幼兒的であると云ふので、兩方の要求がチグハグになつてゐます。

「妻の母に話して見ようか」と云はれますが、その母がどんな人か、また貴君に對してどういふ感情を持つてゐるか私には分らないし、何とも卽答出來ませんが、貴君の幼兒性を分析解消することが抑々根本的な事だとだけは云つて差支へないと信じます。（記者）

編輯後記

日本人として日本人の性格を研究するのは困難なことですが、結論はやゝ峻嚴なものとなつたかも知れません。どうせ科學的研究は甘やかしたりおだてたりすることに於いて不得手なものですから。併し御互に媚び合つてそれで愛國心だなどと思ひ上つていゝ氣になつてゐるらしい現代日本の風潮に對しては、から云ふ峻嚴な批判の聲こそ却つて眞の愛國心の發露であることを認められる識者も少くないと信じたいのです。さうしてさう云ふ識者と共に史上稀なる困難に處するの道を研究せんとするのが我等の意圖であることを諒承せられたい。

×

土屋舒廣と云ふのは從來、お馴染の秋實氏のことで、今回改名せられた由。相變らずの努力を謝します。

宮田氏の文藝分析ほ愈々精彩を放つて來たやうです。この調子でぐん／＼進んで文壇を震撼させて頂きたいものです。長崎氏の長論文は次回完結いたします。

×

初執筆の黑子昌彦氏は東京帝大ドイツ文學科出身の方で、ライクのシュニッツレル研究とはいゝものを譯して下さいます。編輯部員と共に讀者も喜ばれることゝ信じます。シュニッツレルと云へば昔、大槻氏にシュニッツレルの『ギリシアの踊女』の譯（新潮社刊）のあることを讀者諸氏は御存知でせうか。

×

『續戀愛性慾の心理とその分析處置法』は高價なものに拘らず、讀者諸氏の支援厚きを感謝してゐます。前著がまたこれにつれて夥しく出ます。第三版は殘り少くなりました。これがなくなると、增版は困難なので、心配してゐます。もう第三版までのやうな立派な體裁を具へることは困難だらうと思ひますから御希望の方は早く御求め下さい。

フロイド全集中でも『性慾論・禁制論』その他が最近に重版になりました。

×

新特別誌友諸氏を左に御紹介致します。

◇福岡縣……森岡　濟氏

▲北海道……小　室　　亨氏
▲大阪市……森　田　十　郎氏
・▲明石市……奥　田　幹　治氏
▲下谷區……山　本　俊　一　郎氏
▲杉並區……香　川　重　雄氏
▲麻布市……一ノ瀬・和溢郎氏
▲大分縣……田　北　憲　章氏
▲澁谷區……竹　村　長　生氏
▲船橋市……加　藤　秀　吉氏
（飯田龜代治氏紹介）
▲京橋區……惟　村　敏　晴氏
（宮崎正路氏紹介）
▲大森區……鮫　島　正　信氏
（高木統他郎氏紹介）
▲朝　鮮……山　岡　壽　城氏
▲淀橋區……芦　澤　健　兒氏
▲牛込區……田　中　正　志氏
▲大阪府……道　下　太　郎氏

御紹介下さつた方々及び引續き誌代お送り下さつた方々に厚く御禮申述べます。

×

九〇頁に報告いたしておきましたやうに今後當分研究會を隔月に致しますから御諒承下さい。

×

次號は『盲兒法講話』と題して特輯します。

今度は學術雜誌としてでなく、世の母親たちを目安において出來るだけ平易に通俗的に書いて見ようと思つてゐます。幼兒愛育の問題は興亞の問題に聯關して目下愈々重要視せられてをりますので、この特輯題目は世の需用に應ずるものが多いと信じます。併し多少は學術的な部分も混入することは已むを得ません。

離乳の問題、所謂性教育可否の問題、叱り方の問題、一人子の問題、不良化の問題、兄妹定着の問題、子供を繞つての嫁姑闘爭の問題、いろ〳〵考へねばならない問題が山積してゐます。

その他、飯田龜代治氏譯、ステーケル原著『暗示療法と精神分析』と云ふ單行本を附錄として連續掲載して行きたい計畫があります。これは面白いものであると信じます。

岩倉氏のストレイチ、黒子氏のシュニッツレル第一章は次號で完結します。

×　×　×　×

昭和十五年六月二十五日印刷
昭和十五年七月一日發行
（月刊）定價六十錢
（外地定價）六十五錢

東京市本郷區駒込動坂町三二七
編輯兼發行人　大槻憲二
東京市板橋區板橋町三ノ六四
印刷所　帝都印刷株式會社

定價一部　六十錢（送料共）
半年分　一圓八十錢（送料共）
一年分　三圓六十錢（送料共）

御註文規定

・本誌の御註文は一切前金に御願ひ致します。
・御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
・切手代用の場合は一割増に願ひます
・本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

東京市本郷區駒込動坂町三二七
發行所　東京精神分析學研究所
振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂・大東館・北隆館・（大阪）福音社

精神分析　前號要目

第八卷第五號（病氣と健康）正誌

第八卷第六號（六月號冊子）

合本単冊『精神分析』（特輯題目及び定價）一覽表

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七・振替東京七八八一七番

第一巻・上

創刊號（昭和八年　五月）「エディポス研究號」※
第二號（同　六月）「フロイド記念號」
第三號（同　七月）「教育研究號」※
第四號（同　八月）「夢の研究號」（第一）※
（合本としては品切）

第一巻・下

第五號（同　九月）「兒童心理研究號（第一）」※
第六號（同　十月）「社會思想・犯罪心理研究號」
第七號（同　十一月）「戰爭心理研究號」
第八號（同　十二月）「夢の研究號「（第二）
（合本としては品切）

第二巻・上

第一號（同九年　一月）「心理療法研究號」
第二號（同　二月）「女性心理研究號」※
第三號（同　三月）「傳說研究號」
第四號（同　四月）「文學研究號」
（合本としては品切）

第二巻・下

第五號（同　五月）「ドストイェフスキー研究」
（六月休刊・以下隔月刊行）
第六號（同　七・八月）「戀愛心理研究號」※
第七號（同　九・十月）「性慾心理研究號」※
第八號（同　十一・十二月）「夫婦生活研究號」※
（合本としては品切）

第三巻

第一號（同　十年一・二月）「兒童心理研究號」（第二）※
第二號（同　三・四月）「宗教心理研究號」※
第三號（同　五・六月）「自殺・情死心理研究號」
第四號（同　七・八月）「同性愛と異性愛」
第五號（同　九・十月）「家庭問題と親子關係」
第六號（同　十一・十二月）「常態及び變態の性心理」
（合本としては品切）

第四巻

第一號（同十一年一・二月）「性格改造研究號」
第二號（同　三・四月）「母性と妊婦研究號」
第三號（同　五・六月）「夢と幻覺研究號」
第四號（同　七・八月）「兒童分析と教育研究號」
第五號（同　九・十月）「愛慾葛藤の諸問題」
第六號（同　十一・十二月）「道德の分析」
金　三　圓（送料十五錢）

第五巻

第一號（同十二年一・二月）「思春期の研究」
第二號（同　三・四月）「不良少年少女の心理」
第三號（同　五・六月）「生理と心理」
第四號（同　七・八月）「男性と女性」
第五號（同　九・十月）「男女性格分析」
第六號（同　十一・十二月）「幼兒心理研究」
金　三　圓（送料十五錢）

※印は單册としては品切、その他は在庫す。單冊代價送料共各五十錢

第六巻（昭和十三年度）

號	題目	種別
第一號（一、二月號）	夢と象徴	（正誌）
第二號（三月號）	文藝と繪畫	（正誌）
第三號（四月號）	東洋醫學と分析	（册子）
第四號（五月號）	處女性の問題	（正誌）
第五號（六月號）	斷種法と優生學	（册子）
第六號（七月號）	貞操の心理	（正誌）
第七號（八月號）	受分析者の心得	（册子）
第八號（九月號）	自己愛の研究	（正誌）
第九號（十月號）	分析學邦文獻	（册子）
第十號（十一月號）	神經症研究	（正誌）
第十一號（十二月號）	分析學の勸め	（册子）

第七巻（昭和十四年度）

號	題目	種別
第一號（一月號）	金錢心理	（正誌）
第二號（二月號）	自尊心の再建	（册子）
第三號（三月號）	心理經濟	（正誌）
第四號（四月號）	精神衞生	（册子）
第五號（五月號）	自慰の處置	（正誌）
第六號（六月號）	全體主義	（册子）
第七號（七月號）	愛情と憎惡	（正誌）
第八號（八月號）	國民精神保健運動	（册子）
第九號（九月號）	精神病への理解	（正誌）
第十號（十月號）	ユダヤ問題觀	（册子）
第十一號（十一月號）	結婚の諸問題	（正誌）
第十二號（十二月號）	知識階級の覺悟	（册子）

單册正誌五十錢・册子十錢・各送料共

特別誌友規約

昭和十五年度より半年分一圓八十錢
一年分三圓六十錢（送料共）

一、本研究所在外研究會員を特別誌友と稱す。

一、特別誌友は本誌の豫約購讀者として半年分（一圓五十錢）又は一年分（三圓）前納の義務を有す。

一、特別誌友は偶數月發行「册子精神分析」の無代配布を受く。

一、特別誌友はその研究、感想、報告を、編輯部の了解を得て本誌上に發表することを得るのみならず、司會者の承諾を得て研究會、講習會に出席することを得。

一、希望者は購讀料金と共に、住所、姓名は勿論、年齡、職業その他を報告ありたし。（且つ何月號より送本すべきかを明記せらるべきこと。）

紀元二千六百年

擧って参拜

伊勢大神宮
橿原神宮
畝傍御陵

参拜に御便利な省社線共通特殊乘車券

（本年中發賣）

	大阪より往復	京都より往復	名古屋より往復
伊勢大神宮參拜	四・九〇（小兒半額）	四・二〇（小兒半額）	三・六〇（小兒一・七五）
橿原神宮參拜	一・二〇（小兒半額）	二・〇〇（小兒半額）	四・九〇（小兒半額）

（この外全國省線及び鮮滿各指定驛より伊勢大神宮・橿原神宮巡拜省、社線共通特殊乘車券發賣、詳細は最寄驛にて御問合せ願ひます）

伊勢へ！橿原へ！

快速快適の

急行電車終日頻發

大軌・参急電鐵

VIII. Jahrgang, Heft 7-8 —Juli-Aug., 1940. Erscheint zweimonatlich.

Tokio Zeitschrift für Psychoanalyse

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse"

(Hefttitel: Nationaler Charakter der Japaner)

INHALT

Preis des Einzelheftes, 60 sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag
327 Dozakacho Hongoku Tokio Nippon